「入道洞・十王堂・橋場」

【入道洞】

ニュウドウボラ。

川路との境界にあり、現在の高松峠を含む小字である。

ホラ（洞）は、例えば天竜川から支流に入って遡行すると、川幅は狭くなっていく。その時の地形の変化を、タニ（谷）→サワ（沢）→ホラ（洞）→タオ（垰）と、伊那谷では表現しているのではないかという（大平宿のご主人）。頷ける見解ではないだろうか。

ニュウドウボラとは何か。二説を挙げておきたい。

①ニュウドウ（入道）は、丸い頂をもつ山のことをいう。入道頭に見立てて名付けたと思われる。現地でみると、丸い山頂は川路の村境にあるが、隣の小字であるジュウオウドウ（十王堂）との境界付近にある。小字間の境ははっきりしないので、この独立峰によってニュウドウボラと名付けられた可能性はある。

②ニュウドウボラ小字の東部には、現在はかなり埋め立てられているが、広い洞があり、湿地にもなっている。地名語源事典によると、ニュウドウ←ニュウ・ト（処）←ニブ（鈍）・ト（処）と転化したもので、「緩傾斜地」か「湿地」を意味する場合があるという。そこで、ニュウドウボラ（入道洞）とは、「緩い傾斜地で、下方に湿地帯のある洞」であるかもしれない。

国土地理院の二、五万分の一全国地図には、大・中字として、ニュウドウ（入道）地名が７件、記載されている。

【十王堂】

ジュウオウドウ。

この小字は、川路とは村境の尾根で接しており、丸い頂上をもつ山となっている。

十王とは、冥土で死者を裁くという十人の王で、十王を安置するのが十王堂である。閻魔王で代表される象が見られるようになるのは鎌倉時代以降といわれている。村境や墓地・寺の入口に建てられることが多く、念仏講の会場になっていることが多いという。

十王堂が、どうして村境に建てられたのか、はっきりとはしないが、村堂（惣堂）の役割も担っていたのではないだろうか、と想像している。

伊豆木のこの十王堂の近くには川は流れていないが、駄科の村はずれにある十王堂は、毛賀沢峡谷の上にある。

村堂の条件には、川端と村境の二つが挙げられているが、必ずしも必要条件ではないのかもしれない。と考えたくなる。

現在、この小字には、十王堂があった痕跡は認められないという。しかし、十王堂という小字になっている以上、この地に十王堂があったことは確かであろう。

なお、全国地図には、ジュウオウドウ地名が六件記載されている。宛てられている漢字は、「十王堂」が五件、「重王堂」が一件となっている。

【橋場】

ハシバ。

すぐ近くを弟川が流れている。ハシ（橋梁）・バ（場）で、文字通り、弟川に橋が架けられていた場所と思われる。

ハシバ小字が発生したときに、この橋が架けられていたのか、あるいは、「ここに橋があったのだ」という口碑が残っていたのか。はっきりはしない。

しかし、いつかは分からないが、主要街道が、この橋を通っていた可能性は否定できないのではないだろうか。

二、五万分の一の全国地図には、ハシバ（全て「橋場」）地名は３８件と多い。

「藤山・京田・町尻」

【藤山】

フジヤマである。

川路村境の丘陵地にある。工場予定地だったらしく、現在は平された原っぱになって大きな道路も取り付けられているが、草木に覆われている。

フジヤマとは、常識的には、藤の多い山ということになりそうだが、ここでは富士山に関係した小字であろう。

単に、富士山に似た形の山があることから、名付けられた地名であるのか、あるいは、その富士山に似た山を信仰対象として、富士講があった場所なのか。ここでは、確認はしてないが後者である可能性が高い。

フジヤマ小字の中には、富士山類似の山は無いが、すぐ北側のトウベエヤシキ小字に、空に屹立した富士山に似た峰がある。ただし、屹立して見えるのは、南側から見たときだけで、東や西側から見た時には、この峯の北側にあるもう少し高い山も目に入ってしまう。だから、富士山に見立てることができるのは、南側のフジヤマ小字から見た場合のみ、ということになる。フジヤマ小字が、この屹立した峯に対して、この位置に存在する理由であろうと思われる。

このフジヤマ小字で、富士山様の峯を対象にして富士講が行われていたではないだろうか。

この頂には、稲荷神社が祀られていたことがあるという。この山を仰ぎながら富士講を行った場所が、フジヤマ小字であったのではないだろうか。

国土地理院の全国地図には、フジヤマ地名は三〇件が載っている。これは、江戸時代に隆盛を極めた富士講関係の地名が多いためではないだろうか。フジヤマとかフジツカなどの小字は、川路にも竜丘にもある。

【京田】

キョウデン。

この小字は、弟川の左岸にある。ハシバ小字の北側で、反対側の弟川右岸にはダイモン小字がある。

キョウデン（京田）は、キュウデン（給田）が転化したという考え方がある。武士が主君から給与された土地で、年貢が免除されていた。あるいは、江戸時代であれば、藩士に与えられた知行地ということになる。この意味であれば、もう少し、この小字は多くあってもいいような気がするが、どうであろうか。

もう一つの考えは、キョウデンは「経田」のことで、「寺院に寄進された田んぼ」をいう。近くには、興徳寺がある。興徳寺の水田、とするのが、無理のない解釈と思われる。

全国地図には、中・大字として、キョウデン地名が一四ヵ所、挙げられている。「京田」の字が宛てられているのが１０ヵ所、「経田」地名は３ヵ所となっている。

【町尻】

マチジリ。

この小字は、マチ（小字）とは県道飯田・中村線を挟んだ反対側にある。

シリ（尻）は、末端とか出口という意味であるが、もう一つ別の意味もある。それは、形容詞ジルイの略で、水気の多い土地つまり湿地を意味するという。

マチジリ小字のあるところは、確かに町の外れにあるが、弟川の氾濫原の湿地でもある。どちらが正しいのか、はっきりはしないが、「町の外れ」とするのが、無難かもしれない。

全国地図には、中・大字として四件のマチジリ小字が記載されている。宛てられている漢字は、全て「町尻」である。

「下池田・藤兵エ屋敷・寺ノ脇・
興徳寺・肥田」

【下池田】

シモイケダ。

この小字は、県道親田・中村線と弟川の間にある。

シモイケダというから、カミイケダ（上池田）もあったと思われるが、『下伊那地名調査』には無い。

イケダ（池田）には、二つの意味があるという。すなわち、

①湧き出る泉の水で潅漑している田んぼ。伊豆木のイケダ小字は、興徳寺のある段丘の裾にあり、自然の湧水がある。少なくとも、イケダ小字が名付けられた頃には、この湧水を利用して稲作りをしていたのだろうか。

②イケ（池）には、水路や川を意味することもあるらしい。そうであれば、イケデはイケ（池）・ダ（処）で、水路や川などがある所という意味になる。

この二つのどちらであるか、はっきりしない。あるいは、年月を経て地域の人達が双方の意味を含むように理解している、ということもあるかもしれない。

国土地理院の二、五万分の一全国地図には、イケダ地名は九六ヵ所にも及ぶ。

【藤兵エ屋敷】

トウベエヤシキ。

この小字は、川路との境界の丘陵地に広がっている。面積の大きな小字である。恐らく富士講の信仰対象になっていたと思われる富士山に見立てた山も、この小字内にあると思われる。

この小字は、藤兵衛さんが住んでいた屋敷跡をいうが、藤兵衛さんがどんな人で何をしていたのかは、わからない。

なお、国土地理院の全国地図に記載されている中・大字の中には、トウベエ地名は当然のことながら一つも無い。

【寺ノ脇】

テラノワキ。

興徳寺とダイモン小字の間にある。文字通り、興徳寺の傍にある小字である。

国土地理院の二、五万分の一地図には、中・大字として、テラノワキ地名は一ヵ所、テラワキ地名は１１ヵ所に記載されている。

【興徳寺】

コウトクジ。

この小字も間違いようがない。興徳寺境内にある小字である。

お寺の固有名詞が小字名になっているのは、珍しいように思えたが、そうでもないらしい。

国土地理院の全国地図には、コウトクジという中・大字となっている地名が、１１件と予想外に多い。小字ならあるかもしれないが、中・大字にはほとんど無いのではないか、と思っていたからである。ただ、宛てられている漢字は、固有名詞をそのまま地名にしていると思われるが、高徳寺・皇徳寺・洪徳寺・光徳寺・広徳寺とまちまちになっている。

【肥田】

コエダ。

いわゆる城山と高徳寺の間にある小字で、面積もかなり広い傾斜地となっている。

このコエダ小字には、水田は今も無いし、かってもなかったと思われるので、ダ（田）は場所を表すダ（処）であることは、はっきりしている。

コエ（肥）には、二説がある。①コシ（掘、抉）に通じ、崩壊地形を示す。②動詞コユ（肥）の連用形で柴山を意味し、水田などに鋤込む草木のある場所を表す。

どちらかであるが、後者か。

全国地図にはコエダ地名は十六件。

「家ノ上（裏）・大門・井ノ口・垣外」

【家ノ上・家の裏】

イエノウエ・イエノウラ。

対になっている小字名で、県道親田・中村線を挟んで東西に広がっている。イエノウエ小字は西側の台地上にあり、イエノウラ小字は、中心が東側低地の水田地帯にある。

文字通り、イエノウエは「家のある所から緩傾斜地の高い方にある土地」であり、イエノウラは、「家のある所から低い方にある土地」であろう。

なお、ウラには、家の表の方とか、東を意味する場合もある。この場合はいずれも当てはまる解釈であるが、一応、ウエ・ウラの対応で先のようにしておきたい。

中・大字には、イエノウエ（ウラ）地名は無いのかなと思っていたが、全国地図には、イエノウエ地名とイエノシタ地名が四件、イエノウラ地名が２件、ある。

【大門】

ダイモン。

この小字は、興徳寺の東にあって、県道と弟川の間にある。弟川を越えた左岸には、ハシバ（橋場）小字がある。

ダイモン（大門）小字は、意味がはっきりしている。直接的には、寺の総門をいう。総門とは、禅寺の表門のこと。また、間接的には、参道を意味する場合がある。この場所に、興徳寺の総門があったのかどうかはわからないが、この参道を通って、東方からの参拝者は、弟川の橋を渡ってこの小字の地に入ったのであろう。

国土地理院の二、五万分の一地図には、全国の中・大字に中に、ダイモン地名は９３ヵ所と多い。「大門」地名は９９ヵ所となる。

【井ノ口】

イノクチ。

この小字は、県道親田・中村線に沿った水田地帯で、主要部分は県道の東側にある。

イノクチ（井ノ口）とは、「田んぼの水の取り入れ口」を意味する。

水の取り入れ口は、この小字の北の端にあり、ここは緩傾斜地となっている水田地帯の北の端ともなっている。

現在は、弟川から引く井水が使われているが、かっては北東側の丘陵地の麓から流れ出る湧水を利用していたものと思われる。

二、五万分の一の全国地図には、「井の口」地名は一つも無いが、イノクチ地名は、瑞穂の国には当然のことながら、３５件と多い。

【垣外】

カイト。

カイト小字も県道親田・中村線に沿った、イノクチ小字の北側にある。

川路境の丘陵地帯の一部で、イノクチなどの水田地帯より少し高い所にある。

伊那谷南部には、カイト小字が多い。「〇〇カイト」というように、上に固有名詞や職業など名称が付くことが多い。しかし全国的にはどうであろうか。国土地理院の二、五万分の一全国地図には、中･大字には相応しくないということか、カイト地名は八件、と割合に少ない。宛てられている漢字をみると、垣内４ヵ所、垣外３ヵ所、垣戸・開都・貝戸が１ヵ所ずつとなっている。

カイトは、もともとは、「何かで囲まれた地域」のことで、この何かは、垣根であったり、山であったり、田んぼであったり、林であったりしたのであろう。

このカイトは、「屋敷のあった跡」を意味しているものと思われる。

「日向前・小洞・盆地堂」

【日向前】

ヒナタマエ。

川路境の丘陵地にある。トオベエヤシキ小字の北側で、西側はイノグチ小字に接している。

分かりにくい地名の一つ。

ヒナタには、ヒダ（襞）・タ（処）という解釈もある。襞のように山と洞の凹凸が激しいところを意味する。地図を見ると、それも捨てがたい。しかしヒナタは日当たりのいい所、という方が素直な感じもする。どんな山でも日当たりはいいに決まっているのではあるが。

素直に考えれば、ヒナタマエとは「日の当たる所の前の方」であるが、これでは何のことだかよくわからないし、地名にする必要性も見えてこない。

ここではマイ（舞）と考えたい。「ぐるりと回りこんだ、廻りめぐった地形」（語源辞典）を表す。先の襞と同じ地形をいう。

つまり、ヒナタマエ（日向前）とは、「日当たりのいい、山と洞がいりくんで、ぐるぐる回っているようなところ」と解釈するのは、どうであろうか。

二、五万分の一の全国地図によると、ヒナタマエ地名は３ヵ所もある。いずれも「日向前」の字を宛てている。

【小洞】

コボラ。

この小字も、川路境の丘陵地にある。カイト小字の東側で、ヒナタマイ小字の北側と東側を取り巻くようにしている。

コは一般には、「小さい」という意味であるが、このコボラ小字の東側と西側にある洞は小さくはない。

ここのコは、コチラのコ（此）で、「手前の」の意に採りたい。そうなると、コボラは、「手前に近くにある洞」を意味する。では、何に対しての「こちら」なのであろうか。はっきりとは分からないが、イエノウエ・イエノウラ小字の家がそれではないか。あるいは、フルヤシキ・シンヤシキ小字の屋敷かもしれない。

国土地理院の全国地図には、コボラという中・大字が四ヵ所にもあり、いずれも「小洞」の字を宛てている。

【盆地堂】

ボンチドウ。

この小字は、県道から川路境までの広い地域になっている。

ボンチドウが何を意味しているのか分かりにくい。御堂があったか、その形跡があれば、かなり絞ることもできるのだが、現在のところ、はっきりしていない。

いくつか仮説を示しておきたい。

①ドウ（堂）は川音の擬音語から変化したもので、川の合流点をいう。ボンチドウとは、「山に囲まれた盆地にある川の合流点」となる。合流点が信仰の対象になったこともあるので、地名としてはあり得るが、合流点が隣のフジモト小字にあることや語順に問題が残る。ボンチとドウが逆になっているからである。

②ボンチ（盆地）←ホンチ（本智）と転化したもので、本智とは本当の知識のこと。ボンチドウとは、「真の知識を悟ることのできる御堂」となる。ここに御堂の跡らしいものがないことが、気になる。

③ボンチ（盆地）←ホンチ（奔馳）の転とする。ドウ（堂）はドーム状の山のことで穹窿地形をいう。ボンチドウとは、「修行のため駆け回る山地」となるが、奔馳に修行の意味が含まれているのかどうか、危うい。ただ、このボンチドウ小字は二つの峯を持つ丘陵地帯である。

国土地理院の全国地図には、ボンチドウ地名は一つも無い。

「ふじ本・天王・日影」

【ふじ本】

フジモト。

この小字は、県道親田・中村線に沿った、その西側の水田地帯にある。

フジには、先にフジヤマ（藤山）小字で触れたように、富士山に似た形の山とか富士講にかかわるような意味があった。しかし、ここは、富士山様の山があったトウベエヤシキ小字から離れていて、とてもその「山の麓」というには、少し遠すぎるような気がする。

ではフジモトとは何か。二つの解釈を示しておきたい。

①フジ←フシ(節)と濁音化したもので、フシは「盛り上がったり瘤のようになっている高地」(語源辞典）を意味する。ここでいう高地とは東側の尾根のことをいうのかもしれない。あるいは西側にある丘陵地帯のことか。フジモトとは、「盛り上がった高地の麓」ということになる。

②フジは先と同様にフシ（節）の転化したものとするが、「何かによって区切られた所」（語源辞典）としたい。「何か」とは山で東側と西側にある丘陵地のこと。モト（本）は、動詞モトル（悖、戻）の語幹で「川などの屈曲点」を示す。フジモトとは、「山に囲まれた低湿地で弟川が屈曲しているところ」となるが、ややいじり過ぎているかもしれない。

国土地理院の二、五万分の一地図には、中・大字として、フジモト地名は、６件の記載があるので、一般的な地名と考えていいのかもしれない。

【天王】

テンノウ。

弟川氾濫原の低湿地より一段高い微高地になっている。周囲には、フジモト・コワラビ・ヒカゲ・イエノウエ・イノグチの小字がある。

テンノウは天王にほぼ間違いはないであろう。天王は牛頭天王と四天王のどちらかである。

牛頭天王は京都八坂神社（祇園社）や尾張津島大社などの祭神。祇園祭に繋がる。薬師如来や素戔嗚尊の垂迹であるともいわれている。

四天王は帝釈天の四方を護る護法神で、持国天・増長天・広目天・多聞天のこと。

テンノウ（天王）小字では、このどれかの天王あるいは、これに関わる神が祀られていた、と考えるよりほかはない。

現在のテンノウ小字には、これらの痕跡は何もないという。

気になる資料がある。村史によれば、廃仏毀釈によって廃寺になった寺の中に、藤本庵がある。テンノウ小字のすぐ近くがフジモト小字だから、何らかの関係があったのではないだろうか。無名の仏像が四体あり、現在は立石にある。元はテンノウないしはフジモト小字にあった仏像で、それがテンノウであった可能性はないであろうか。

テンノウ地名は全国的にも多く、二、五万分の一地図には、テンノウ地名が四九ヵ所が載っている。

【日影】

ヒカゲ。

西の丘陵地帯に入ったところで、ヒカゲ小字の尾根がその北側を日当たりのよくないところにしている。

ヒカゲには、ヒ（樋）・カケ（掛）の意もあるが、ここでは、やはり「日当たりのよくない所」であろう。

岐阜県と下伊那では、ヒナタ地名よりもヒカゲの方が多い。全国的に見て特異型と呼ばれている。その理由ははっきりしていない。考えられるのは貢租対策ではないか、ということだが、どうか。

「小わらび・古（新）屋敷
・大（小）稲場・町張」

【小わらび】

コワラビ。

この小字は、弟川の支流が開いた谷間の最下流にある。弟川を挟んで、東側にフジモト小字と接している。

コワラビも難しい地名である。

コ(小)は意味のほとんど無い接頭語。ワラはワラフ（笑）の語幹、あるいはワル（割）の転化したもので、「隙間が生ずる」とか、「割れる」ということから、崩壊地形を示しているものと思われる。ビはミ（廻）が転化したもので、「屈曲した地形」をいう。

コワラビとは、「崩壊しやすい水田地帯で、山裾や川も屈曲している場所」と解したい。

地形的には湧水の多いところで、その水で稲作を続けてきたが、湧水が多いので崩壊もし易かったのであろう。現在は構造改善によって、ゆるい傾斜地の安定した水田地帯になっている。

コワラビ地名は、二、五万分の一全国地図には一件の記載もない。難しい地名であるためかもしれない。

【古屋敷・新屋敷】

フルヤシキ・アラヤシキ。

これらの小字は、二ヵ所ずつ、コワラビ小字の北西方向に広がる丘陵地にある。フルヤシキ小字は二ヵ所とも丘陵の斜面の下の方にあり、シンヤシキ小字は二ヵ所とも丘陵地の斜面の上の方にある。古屋敷のあった土地には、崩壊等、不安定だったのかもしれない。

フルヤシキとは、「かって屋敷があった場所」であり、アラヤシキは「現在、あるいは最近まで屋敷があったところ」であろう。

フルヤシキ地名もアラヤシキ地名も、全国的には多い地名である。国土地理院の全国地図の中・大字の中に、フルヤシキ地名が６７件、アラヤシキ地名は１１６件も、記載されている。

【大稲場・小稲場】

オオイナバ・コイナバ。

これらの小字は、ヤシキ小字群に混じって位置している。

イナバ（稲場）について、方言大辞典は、飯田市付近と長野県南部の方言であるとして「古く稲を干す所として使ったところから、民家に近い芝原」をいう、としている。イナバは①住居が近いこと②水田が近いこと、という特徴をもっている。この伊豆木のイナバにぴったりである。

オオイナバは「面積が広い稲干し場」であり、コイナバは「それより少し面積の小さな稲干し場」ということであろう。

なおイナバは、イ（鋳）・ナ（穴）・バ（場）とする見解もあるが、ここでは採らない。

二、五万分の一の全国地図には、３２件のイナバ地名が載っている。

【町張】

マチハリ。

この小字は、ヤシキ・イナバ小字群のある丘陵と、いわゆる城山丘陵との間の谷にある。谷の中では微高地になっていて、現在もここには家屋がある。

国土地理院の全国地図には、マチハリ地名は一件も無い。しかし、その割に伊那谷南部では多いような気がする。

桐林にも一ヵ所、マチハリ（町張）小字があり、新川が大きく廻っている所で「地形が、巻いたように張り出したところ」とした。

伊豆木のマチハリは「居住地のある、張り出した微高地」を表している。

「坪の尻・中田・外山
・城（條）の腰・桐山」

【坪の尻】

ツボノシリ。

弟川の支流が削った谷の中の水田地帯にある。もう一つ、ツボノシリ小字が、伊豆木八幡社の裏手にある。

ツボは動詞ツボム（窄）の語幹で、「つぼんだ地形。深くえぐられた地形。窪地」（語源辞典）を意味する。シリ（尻）は、文字通り末端のこと。ツボノシリ（坪の尻）とは、「沢の水流に削られ、あるいは堆積した谷の末端」を表している。弟川の支流の、この小字の下流側にマチハリ小字があってやや高いので、居住地になっているからである。傾斜がいったん緩んでいることを示していると思われる。

国土地理院の全国地図の中･大字には、ツボノシリ地名は記載がない。川路にも竜丘にもあるのだが、伊那谷南部にはかなり多い、この地名は方言になっているのかもしれない。

【中田】

ナカタ。

ナカタ小字は、ヤシキ小字群がある丘陵の南側斜面にあり、現在もすぐ北側に伊豆木第四集落センターがある。

ナカタ小字には、水田は無いので、タ（田）はタ（処）としたい。ナカ（中）は中心となるところである。

ナカタ（中田）とは、「中心となっていたところ」を意味する。フルヤシキ（古屋敷）小字やシンヤシキ（新屋敷）のある所なので、ここが中心地であっても不思議ではない。

ナカタは中心地を意味するので、地名になりやすい。全国の二、五万分の一地図には、中・大字として３５ヵ所のナカタ地名が挙げられている。「中田」地名は、８７ヵ所に及ぶ。

【外山】

ソトノヤマ。

この小字は、ジョウ小字群のある丘陵（城山）の北側の斜面にある。

ソト（外）とは、「空間的、平面的に、ある範囲や区画、限界のどから出ている部分」（国語大辞典）をいう。ここ伊豆木のソトノヤマの外は、ジョウ小字群のある城山のことと思われる。

すなわち、ソトノヤマ（外の山）は、「城山の城の範囲から外れた山林」のことを表しているようだ。

なぜか、全国地図の中・大字に中にはソトノヤマ地名は無い。

【城の腰・條の腰】

双方ともジョウノコシである。

いわゆる城山を構成している小字で、城山丘陵の高いところと南側は麓をも占めている。

ジョウノコシとは､語源辞典によれば、「中世、豪族の本拠を囲繞して一族郎党の居住した地」となっているが、ここ伊豆木のジョウノコシには一族郎党は居住していないのではないか。

ここのジョウノコシとは､「豪族の本拠を繞る山地」ぐらいにしておきたい。

二、五万分の一の全国地図には、ジョウノコシ地名は１０ヵ所が挙げられている。

【桐山】

キリヤマ。

この小字は、イナバ・ヤシキ小字群のある丘陵の南側斜面となっている。

キリヤマ（桐山）とは、切山で、山林を切り開いて作った開墾地のことをいう。あるいは焼き畑も行われたこともあるかもしれない。

全国地図には、キリヤマ地名は３２ヵ所に記載されている。

「梅ノ木田・大畑・入・入ノ峠」

【梅ノ木田】

ムメノキダ。

この小字は、伊豆木西部のヤシキ・イナバ小字群の丘陵とその南のいわゆる城山丘陵との間にある洞の中にある、大きな小字である。

ムメ＝ウメであるが、梅を植えた田んぼが広がっているわけではない。では、ムメノキダとは何を意味しているのだろうか。語源辞典などを参照して、次のように考えたい。

ウメ（梅）は、動詞ウム（埋）の連用形で名詞化したもので、山崩れなどで砂が堆積した土地のこと。ノはノ（野）で、緩傾斜地を表す。キダ（木田）は、キダハシ（階段）で、傾斜地に段が刻まれている状態を示す。

以上から、ムメノキダ（梅ノ木田）は、ムメノキダ（埋野段）で、「崩壊で埋まった砂地で、階段状になっている緩傾斜地」を意味するものと思われる。

現在は構造改善により、見事な階段状の水田が並んでいるが、小字発生当時も湧水で稲作が行われたのではないだろうか。

二、五万分の一の全国地図には、ムメノキダ地名は無いが、ウメノキダ（梅木田）地名は、一ヵ所が記載されている。

【大畑】

オオハタ。

この小字は、ムメノキダ小字のある洞のほぼ最上部である西部の丘陵に位置し、ムメノキダ小字とマルヤマ小字の間にある。

オオハタとは、「大きな畑」といいたところであるが、これが、小字の面積が大きいことなのか、あるいは、一枚の畑の面積が大きいことなのか、はっきりはしない。小字の大小でいえが、近くにあるサダスケハタ小字の方が面積は大きい。

ではオオハタは何を意味しているのか。二つの仮説を提示したい。語源辞典等を参考にした。

①オオ（大）は、「中心となる」の意。オオハタ（大畑）は、「この西部丘陵地の中心にある畑」とする。この小字にある現在の住宅数が最も多いと思われるので、この周辺の中心地であると判断した。

②オオ（大）はヲ（峯）の転化したもので、「尾根」を意味する。ハタ（畑）は、動詞ハタク（叩。砕）の語幹で、「叩き落とされたような地形」で崩壊地形と考える。合わせると、オオハタ（大畑）とは、「崩壊地のある尾根筋」ということになる。現在は修復されているが、かっては崩壊地があったことは想像に難くない。

国土地理院の全国地図には、中・大字としてオオハタ地名は７５件、「大畑」地名となると１４５件にも挙げられている。

【入】

イリ。

この小字は、西部丘陵地帯の尾根に近いところにあり、オオハタ小字の更に奥まった洞を含んでいる。

イリ（入）とは、「奥まった洞の最上流部」のことをいう。

二、五万分の一の全国地図には、イリ地名は２２ヵ所になる。この中で「入」の字を宛てているのは１９ヵ所となる。

【入ノ峠】

イリノトウゲ。

この小字は、イリ小字に近い、西部丘陵の尾根にある。この尾根の鞍部を越えているのが「入ノ峠」である。弟川の沢筋から栃ケ沢の沢筋に越えていく峠である。文字通り、「イリ小字付近の峠のある所」を意味する。

全国地図には、イリノトウゲは無い。

「丸山・高越・豊住・野田（尻・入）

【丸山】

マルヤマ。

マルヤマ小字は、イリノトウゲ（入ノ峠）小字の周辺に、二ヵ所ある。一つは入ノ峠の尾根筋に、もう一つは近くの独立峰である。

マルヤマは文字通り、頂上の丸くなっている山であるが、ある方向からみて、頂上が丸くなっているように見える山についてもマルヤマと表現されているのかもしれない。

マルヤマ小字は、川路にも竜丘にもあり、全国地図にも、中・大字として登録されているマルヤマ地名は３５２件という厖大な数になる。どこにでもある地名といえよう。

【高越】

タカゴシ。

この小字は、イリノトウゲ小字の東側の丘陵地で、住居と水田からなる小字である。ここも構造改善がなされて、今では安定した地形になっている。

タカゴシの意味が絞りにくいので、語源辞典等によって、三通りの考え方を挙げておきたい。

①コシ（越）は、動詞コズ（掘）、コジル（抉）の連用形が名詞化したもので、崩壊地形を表す。タカゴシとは、「高い所で、崖のある場所」をいう。

②タカ（高）には、限度の意があり、台地の端などを表す。タカゴシとは、「台地の端にある崖地」を表す。

③コシ（越）は、コス（漉）の連用形で、水が湧き出る地のこと。タカゴシとは、「高い所にあって、水が湧き出る所」を意味する。

全国的には少ない地名で、二、五万分の一地図には、タカコシ（高越）地名が一件記載されているだけ。

【豊住】

トヨズミ。

この小字は、二ヵ所、いずれもヤシキ・イナバ小字群のある丘陵地の最も奥の場所にある。ここでも仮説を二つ挙げておきたい。

①トヨズミとは、「豊かな谷の奥まった所」を示す。トヨは瑞祥地名で用いたと思われるが、炭焼きなども行われていたのかもしれない。

②トヨはトヒ（樋）が転じたもので、トヨズミとは、「水の流れがある、奥まった谷」とする。二つのトヨズミ小字のうち高いところにある、この小字のすぐ近くに、配水池があるので、水が流れていた可能性は否定できない。

国土地理院の全国地図には、中・大字に中に、トヨズミ地名が３ヵ所、記載されている。宛てられている字は、「豊住」が２ヵ所、１ヵ所は「とよずみ」となっている。

【野田・野田尻・のた入】

ノタ・ノタジリ。

ノタ小字は二ヵ所、西部丘陵地の中腹から尾根付近まで広がって意いる。

ノタジリ小字は西部丘陵の尾根筋から麓までの大きな小字になっている。

ノタ（野田）は、ヌタ（沼田）の変化した語で、長野県南部の方言にもなっており、「山間の湿地」を意味する。

西部丘陵の湧水を利用した稲作が行われ、同時に崩壊しやすい地形に苦しんできたと思われる土地である。

ノタジリ（野田尻）は、「山間の湿地帯の末端部分」を意味し、ノタイリ（のた入）は、「山間の湿地帯の奥まった所」を示している。

全国地図の二、五万分の一には、ノタとノダ地名は１６５ヵ所ある。

「若宮林・なげ尻・又ぎ田・番匠畑」

【若宮林】

ワカミヤバヤシ。

この小字は、天満宮を祀るノタジリ小字の南側の洞にある。ノタジリ丘陵とヤシキ・イナガ小字群のある丘陵の間の谷である。ほぼ半分ほどが現在は水田になっているが、残りの半分は丘陵地の斜面上にある。

ワカミヤ（若宮）は、普通、若宮様と呼ばれている神のことで、この小字内に今は無くてもかっては存在していたのであろう。

ハヤシ（林）は、一般的には樹木の生えている所をいうが、傾斜地をいうこともある。ハヤ（逸。急）・シ（接尾語）の転化したもので、傾斜地の意味もある。

ワカミヤバヤシ（若宮林）とは、①「若宮様を祀っている樹木の生えている林」か、②「若宮様を祀っている傾斜地」のどちらかではないだろうか。後者はややまわりくどいが、可能性は低くはない。

国土地理院の全国地図には、ワカミヤバヤシ地名は無い。

【なげ尻】

ナゲジリ。

この小字は、ワカミヤバヤシ小字の下流にあり、ノダ・ワカミヤバヤシ小字の崩壊土砂が流れ着く場所となっている、弟川の氾濫原である。

ナゲ←ナギで、ナゲジリとは、「薙ぎ落としたように崩れて土砂が堆積した場所の末端部」を意味する。

この湧水・水田地帯は、繰り返して述べているように、現在は、構造改善で安定している。

二、五万分の一の全国地図に、ナゲジリ地名が載ってないのは、不思議な気がする。

【又ぎ田】

マタギダ。

この小字は、県道親田・中村線に沿っており、ナギジリ小字の下流に当たる。弟川の氾濫原でもある。

氾濫原であるが、現在でも水田は少なく、面積は、全マタギダの三分の一にも満たない。

マタギダとは何か。不安定ではあるが、二通りの解釈がある。

①マタ（又）はマタ（叉）で、一つの本から二つ以上に分かれている所をいう。ギダはキザハシ（階段）のこと。合わせると、マタギダとは、「二股に分かれた段丘のある場所」をいう。現在は見られないが、構造改善前には、複雑な段丘になっていた可能性はある。

②マタギはマタグ（跨）の連用形が名詞化したもの。タ（田）はタ（処）。マタギダとは、「弟川を跨いだような地形になっているところ」となる。しかし、この場合、小字発生時に、果たして、今のように弟川が真ん中を流れていたかどうか。

全国地図には、マタギダ地名は一つも記載されていない。

【番匠畑】

マンジュバタと地元では呼んでいる。

この小字は、ノダジリ小字の北側になる。弟川の上流側である。

土地での呼び名で考えていくのが原則ではあるが、マンジュは僧坊から名付けられた縁起地名であるという。これには該当しがたいのではないだろうか。

そこで、バンジョウ（番匠）とした。これは、中世の大工であろうと思われる。

バンジョウハタ（番匠畑）とは、「むかし、大工さんが耕していた田畑」としておきたい。

国土地理院の全国地図には、このバン

ジョウハタも「番匠畑」も載っていない。

「小入・祢宜屋前（洞）・権田垣外」

【小入】

コイリ。

コイリ小字は、栃ヶ沢と弟川の間にある丘陵地のノタイリ小字の北側にあり、急峻な谷になっている。

コ（小）は、「ちょっとした」と解するのか、あるいは意味のない接頭語と考えるのか、その違いはある。が、ここではおおまかに、コイリ（小入）とは、「ちょっとした奥まった深い谷」としておきたい。なお、イリ（入）は、「奥。川上。山と山との間の沢」（語源辞典）を意味している。

隣にコマキダ小字があるので、このコ（小）は、意味のない接頭語とするのが正しいのかもしれない。

二、五万分の一の全国地図には、コイリ地名は無いが、「小入」地名は３ヵ所にある。読み方は、コイル・ホソリ・オイレとなっていて、よく分からない。

【祢宜屋前・祢宜屋洞】

ネギヤマエ・ネギヤボラ。

ネギヤマエ小字は、栃ヶ沢と弟川の間にある丘陵の東の麓付近で、バンジョウハタ小字の北側にある。県道親田・中村線の東側にあって、三遠南信自動車道に間を裂かれているのが、ネギヤボラ小字である。

ネギ（祢宜）は、神職のことで、ネギヤ（祢宜屋）は神職の居住地をいう。

ネギヤマエ小字の西端に少し高い所があって、そこに祢宜屋があったと思われる。現在のネギヤマエは水田地帯になっている。

ネギヤボラ小字は川路との境に連なっており、ここの谷にも、祢宜屋があったと思われるが、自動車道の通過で、以前の地形がつかめないので、はっきりはしない。

これらの祢宜屋に居住していた祢宜たちは、どこで神事を執り行ったのであろうか。

南の方には伊豆木天満宮や八幡社だったと思われるが、神事意外は、農耕に励んでいたのではないだろうか。

ネギヤ小字は、川路にも竜丘にもある。

【権田垣外】

ゴンタガイト。

この小字は、県道親田・中村線の西側にあって、カズタ小字とカズタマエ小字の間にある。

ゴンタガイトといえば、普通には、「権太さんが住んでいた跡」ということになりそうだが、ここでは、それとは異なった解釈にしたい。というのは、ゴンタや後から出てくるゲンタ（源太）は童名と思われるのでカイト（垣外）につける固有名詞には相応しくないと判断したからである。

なお、童名は幼名ともいわれ、皇室から始まった習慣であるが、１０世紀までには庶民にまで普及していたという。ただ、一般的には、下人・非人については、成人後も童名のままで通したというので、気になるところもある。

別の解釈を示したい。

ゴンタ←ゴタの転化したもので、低湿地を意味する。県内でも泥地やぬかるみをゴタといっているところがあるという。ゴンタガイト（権田垣外）は、「近くに住居跡のある、山の麓の方の湿地」としておきたい。

伊豆木の丘陵地の麓は、湧水の多いところで、低地は湿地が多かったものと思われる。そこでも微高地は居住地になっていたのであろう。

国土地理院の全国地図には、「権田」地名が３ヵ所ある。

「初検田・数田（前）・観音」

【初検田】

ショケダ。地元では、こう呼んでいる。町村地名大鑑には、ショケンタとなっているが。

この小字は、県道親田・中村線に沿った、東側が急斜面になっている土地である。小字図でみると、斜面だけで水田は無い。

ショケダ（初検田）とは何か。検地と関わりはあるのだろうか。

ショ（初）←シオ（シホルの語幹）で、湿地を表す。ケダ（検田）は、ケダ←キダ（刻）と転化したもので、段丘や崖を意味する。キダハシ（階）と同義である。

以上から、ショケダ（初検田）とは、「湧水のある急傾斜地」となる。

念のために、もう一つ仮説を挙げておきたい。

ショ（初）は先と同じように湿地を意味する。はケンタ（検田）←ゴンタ（ぬかるみ）で、ショケンタとは、「水がしみ出して、ぬかるみになりやすい場所」となる。

この小字のすぐ下方には、斜面から湧き出る水をためる堤がある。

全国地図には、ショケダ地名もショケンタ地名も記載は無い。

【数田・数田前】

カズタ・カズタマエ。

これらの小字は、県道親田・中村線と弟川の間にある。カズタマイ小字は、カズタ小字の前方、南側で下流側にある。

カズ（数）は、上代東国方言で、カド（門）のことをいうらしい。村史でも「数田」←「門田」と転じたとしている。では、カド（門）とは何か。二通り考えられる。①家の門。②カド（門）←カド（角）で、「屈曲点」を意味する。

以上のことから、カズタ（数田）とは、①タ（田）は、タ（処）として、「家の門のある所」を表す。カズタ小字の中には、現在も四軒の家があるが、ここでいう家は、かって存在していたといわれる観音寺の可能性が高い（村史）。しかし寺田であったといいきることは難しいのではないだろうか。

②同様に、タ（田）はタ（処）として、「弟川が屈曲している場所」を表す。弟川は、ここでほぼ直角に曲がっている。

なお、二、五万分の一の全国地図には、カズタ地名は『時又』に一ヵ所記載されているだけである。宛てられている漢字は「数田」である。カズタは珍しい地名なのかもしれない。

【観音】

カンノン。

この小字は、県道親田・中村線と三遠南信自動車道との間にある独立峰を擁している。この小字のすぐ近くに（初検田小字内）、伊那西国七番の大峰山観音堂があり、さらに、いくつかの祠や石碑がある（大稲場小字内）。いずれもカンノン小字と深く関わっていると思われる。

観音信仰は、十一世紀には、聖・千手・馬頭・十一面・准底・如意輪の六観音が唱えられるようになったが、中近世には、三十三観音などの分身になり、それを巡る観音霊場の巡礼修行も民間では盛んになっていったという。現在、伊那谷南部の各地の峠路にある石造の観音群は、この六観音である場合がほとんどと思われる。

ここ伊豆木のカンノン小字もそうした巡礼対象の霊場の一つとなっていると思われる。

国土地理院の二、五万分の一の全国地図には、中・大字として９ヵ所にカンノン地名が記載されている。

「吉本・大上・下屋・沢の田」

【吉本】

ヨシモト。

この小字は、カンノン小字の山の南側の麓にある。

ヨシモト（吉本）は、何を意味するのか。二通りの考えを提示しておきたい。①ヨシ（吉）←ヨス（寄）で「山寄り地」を示すという。モト（本）←モト（下）で、「山の麓」のことだという。合わせてヨシモトとは、「山寄りで麓の地」を意味知るが、重複しすぎているかもしれない。②ヨシ（吉）は、美称で意味はない。モト（下）は①と同じ。ヨシモトとは、「山の麓の地」のこと。この方がすっきりしているかもしれない。

二、五万分の一の全国地図には、ヨシモト地名は７ヵ所に記載されている。

【大上】

オオウエ。

この小字は、ヨシモト小字の南側で少し低いところにあるが、尾根にはなっているので、東西から見れば高いところにある。

オオウエ（大上）とは何か。

オオ（大）は美称で意味はないとしたい。ウエ（上）は「高い所」にあるから、オオウエは、やはり「高い所」を意味すると考えていいのではないだろうか。

全国地図の中・大字には、オオウエ地名は３件だけであるが、「大上」地名は３７になる。オオガミ・オオカミ・オオガサなどの漢字に宛てられている。

【下屋】

シモヤ。

この小字は、三ヵ所に分断されている。もともとは一つの小字であったのかもしれない。シモヤ小字を分断しているのは、サワノタ小字で、こちらも二ヵ所に分断されている。

分断されているシモヤ小字の一つは、県道親田・中村線東側の傾斜地を中心にしてその西側にも少し広がっている。二つ目のシモヤ小字は、三遠南信自動車道が、真ん中を通っており、自動車道の盆地堂橋から南の一帯にある。三つ目は、二つ目の北東側にある。

シモヤ（下屋）の「下」に対する「上」が付近に見当たらない。となると、シモはシモ（霜）の可能性が強くなる。ヤはヤ（屋）←ヤ（谷）と転化したものと考えられる。霜は忌避されていて、霜の字を使った小字は、今までも見たことがないような気がする。唯一、伊賀良の「霜原」中字は、後で付けられたもので、新しい地名である。

シモヤ（下屋）とは、「霜がおりやすい谷」ということになる。いずれのシモヤ小字も霜道になっていて、冷気がゆっくりと流れやすい地形であるといえそうだ。

国土地理院の全国地図には、シモヤという中・大字が１２ヵ所ある。

【沢の田】

サワノタ。

この小字は、前のシモヤ小字で述べたように、シモヤ小字と分断しあっていて、二つに分かれている。川路との境界にある山地の中である。

サワノタ（沢の田）とは何か。一般的に考えれば、文字通り「沢にある田んぼ」ということになる。しかし、このサワノタには現在でも田んぼはない。地名発生の当時には田んぼがあったとは、とても考えられない。

ノタ（の田）は、おなじみの湿地を表すノタである。サワノタ（沢の田）は、「谷川の近くの湿地帯で、猪のノタ場となる場合もある場所」としたい。

全国地図には、サワノタ地名は無い。

「十三塚・外・長畑・狐洞・大平」

【十三塚】

ジュウサンヅカ。

この小字は二ヵ所にある。一つは県道親田・中村線の東側の小さな小字で、シモヤ小字にすっぽりと囲まれている。二つ目は、そのシモヤ小字の東側の丘陵地の広い尾根にある。

死者供養、境界指標、修法壇として、十三の列塚が気づかれたという。背後に怨霊慰撫の御霊信仰があり、築造には修験者が関与したという。

ジュウサンヅカ（十三塚）小字には、この十三塚がある。

不思議なことに、二、五万分の一の全国地図には、「十三塚」地名の記載は一件もない。

【外】

ソト。

この小字は、三遠南信自動車道の西側にある。「十三塚」小字の東側で、この小字の東側には、ナガハタ小字やシモヤ・サワノタ小字群が並んでいる。

ソト（外）とは、「空間的、平面的に、ある範囲や区画、限界から出ている部分、すなわち内側でないほうをいう語」（国語大辞典）であるという。

ソトというのは、伊豆木の中心部分に対して「外」なんだろうと思われるが、小字図をみると、現在は「外」とは言えないよう所に位置している。

ただ、村境に築くことが多かったという「十三塚」小字の外になるので、いつの時代か、ソト小字が名付けられた時には、この付近に村境があったのかもしれない。とすれば、ソト小字がここにある意味もはっきりする。

国土地理院の全国地図には、ソト地名は無い。

【長畑】

ナガハタ。

ナガハタ小字を貫いて、三遠自動車道が通っている。ソト（外）小字の東側にあり、その更に外側には、シモヤ・サワノタ小字群がある。

ナガハタ（長畑）とは、何を意味するのか。二通りの解釈を挙げておきたい。

①文字通り「谷間に長く延びた畑」とする。三遠道の工事で地形が攪乱されているので、はっきりはしないが、広めの谷が長く延びていて、今でも一部で果樹を栽培している。

②ナガ（長）は動詞ナガル（流）の語幹で、傾斜地をいう。ハタ（畑）は、ハ（端）・タ（処）であるとすると、ナガハタは、「傾斜地になっていて、伊豆木の中心部の外にある所」となる。ナガハタ小字がソト（外）小字の外側にあるために、生きてくる解釈だが、やや無理か。

全国地図の中・大字には、ナガハタ地名が２１ヵ所と比較的多い。

【狐洞】

キツネボラ。

この小字は、三遠南信自動車道の東側にあり、オオビラ小字とネギヤホラ小字に挟まれている。

キツネといえば、動物の狐か稲荷神社を祀ってあるところのどちらかであるが、ここは、「狐の住んでいる洞」ということか。稲荷神社のことは聞いていないので。

キツネホラは竜丘など各地にある。

【大平】

オオビラ。

この小字は三遠道の大平橋を中心に広がる、かなり広い小字である。

ヒラ（平）は、傾斜地を意味するので、オオヒラ（大平）とは、「傾斜地の多い、大きな地域」となる。

全国地図には１３７ヵ所が載っている。

「清水坂・五万洞・歳ノ神・小あみ」

【清水坂】

シミズザカ。

この小字は、県道親田・中村線の東側にあり、カズタ小字はこの小字の西側で接している。この小字の形をみると、シミズザカ小字は、東に向かう道に沿っているようだ。

シミズザカ（清水坂）とは、「清水が湧き出ている傾斜地にある道路」であろう。恐らくカズタ小字のある東の方からやってきたであろう旅人が、喉を潤しながら一休みした場所ではなかったろうか。とすれば、ここを地名発生当時の主要街道があったのではないか、と想像している。

国土地理院の二、五万分の一地図には、中・大字の中に、シミズザカ（清水坂）地名は１ヵ所の記載がある。

【五万洞】

ゴマンボラ。

この小字は、県道親田・中村線と三遠南信自動車道との中間にあって、西側のサイノカミ小字と東側のオオヒラ小字に挟まれている緩傾斜地である。

ゴマンボラ（五万洞）とは何か。見ればわかるように、たくさんの洞があるわけではない。

ゴマン（五万）←ゴマ←コバと転化したもので、ゴマンボラ（五万洞）とは、「山中のわずかな平坦地のある洞」を意味するものと思われる。その平坦地はゆるい傾斜地になっていて、現在は山林になっているが、地名発生の頃には、焼畑か耕作地であった可能性はある。

竜丘にもゴマンドウ（五万洞）小字があるが、近くに長石寺があって護摩堂のことを意味している。

全国地図には、ゴマンボラ地名の記載はない。

【歳ノ神】

サイノカミ。

この小字の中を県道親田・中村線が貫いている。ナナヨバリ小字にある峠に近い。

歳ノ神は塞ノ神でもあり、サエノカミ（障ノ神）とも呼ばれ、邪霊の侵入を防ぐ神、航路の安全を守る神とされている。峠や村境を通るときに拝んで供え物をしたりする。また、虫送りや風邪の神送りなど災いを外の世界に送り出そうとするときに、この神の祀られているところまで送ることにしているところは各地に見られるという。

伊豆木のサイノカミは、県道の峠に近いところにあるので、峠で悪霊を防ぐために祀られていたのではないだろうか。

国土地理院の全国地図には、サイノカミ地名が、中・大字として２９ヵ所も記載されている。サイノカミ小字は、川路にも竜丘にもあるが、必ずしも村境ではないので、何らかの境界であるはずであるが、はっきりしないことが多い。

【小あみ】

コアミ。

コアミ小字は、サイノカミ・アザカグチ・タカゴシ・カズタの小字に囲まれた小さな小字である。

コアミは何を意味するのか。難しい。堤はあるが、この堤で網を使うわけではないだろう。

アミは阿弥陀の略で、かってこの小字にあったであろう阿弥陀堂を考えてみた。近くにはカンノンジ（観音寺）小字もあり、考えられないことではない。

コ（小）は、意味のない接頭語か、「古い」というコ（古）なのかわからないが、コアミとは、「古い観音堂があった所」としたい。

全国地図には四ヵ所にコアミ地名。

「七呼リ・徳兵エ坂・姥ケ懐
・(小・白・登)牧」

【七呼リ】

ナナヨバリ。

この小字は、県道親田・中村線の峠付近にある。梨洞と数田の間の峠である。

ナナには方言で「母」の意味もあるが、当地の方言ではないので、取り上げない。ナナ（七）は回数を表す数字で、ヨバリ（呼）も、字のように、動詞ヨバル（呼）の連用形が名詞化したものと考えていいだろう。

すると、ナナヨバリは「七回、呼ぶこと」ということになる。何を呼ぶのか、これがわからない。竜丘にはナナメグリ小字がある。七ヵ所をお参りして、願をかけるとか、厄を落としたのであろうと想像した。この場合も、七には、そうした祈願の動作に必要な数字ではないかと思われるが、それ以上のことはわからない。

国土地理院の二、五万分の一地図には、ナナヨバリ地名は無い。

【徳兵エ坂】

トクベエサカ。

この小字は、三遠南信自動車道に接して西側にある。取り囲んでいる小字は、ウバガホトコロ・オオヒラ・ゴマンホラ・エダホラ・ナカシマである。

トクベエサカとは、「徳兵衛さんが関わっていた傾斜地」とうことだが、それ以上のことは分からない。徳兵衛という固有名詞が明らかになってくるということはないかもしれない。

もちろんのことであるが、全国地図にはトクベエ地名は載っていない。

【姥ケ懐】

ウバガホトコロ。地名大鑑に、こんな小字名が出てくると、調査担当者は本当に一つずつ小字名を確かめていったのかな、と信じたくなる。

この小字名は、方言であるから、全国的には通用しない。国土地理院の二、五万分の一地図でも、ウバガフトコロ地名は四ヵ所あるが、ウバガホトコロ地名はゼロになっている。竜丘でもウバガフトコロになっている。

この小字は、三遠南信自動車道の東側の村境に二ヵ所がある。いずれも、村境に近い独立峰の南側の斜面になっている。

姥ヶ懐には、①没落した武士の若殿と乳母が住んだという伝承をもつ地②自然に風を防ぎ、南面して日当たりがよく乳母の懐にいるような地形の所、の二種類があるが、この伊豆木の姥ヶ懐は、地形から見て、後者の②であろう。

このような土地は、製陶に適していたところから陶土を産する場所の地名として呼ばれたという。少し北の久米では製瓦業を営んでいる所がある。ここの伊豆木でも陶土は出ないのだろうか、と気になる。

【牧・小牧・白牧・白牧峠・登牧】

マキ・コマキ・シロマキ・シロマキトウゲ。

これらの小字は、川路との村境付近にあり、久米川より南に方になる。

全ての小字が牧場を意味しており、コマキのコ（小）は意味のない接頭語で、これも牧場を意味するものと考えたい。

シロマキは、峯がナナヨバリ小字より低いので、城塞は考えられないので、「土の色が白っぽい色をした牧場」としたい。領家帯の風化した花崗岩が乾くと白っぽく見えるためである。

ノボリマキは、「上り坂になっている牧場」ではないだろうか。

シロマキトウゲは、「白牧にある峠のある所」か。

「中島・鬧ヶ洞・大丸山・庄ノ田」

【中島】

ナカジマ。

この小字は、県道親田・中村線がナナヨバリの峠を北に向かって下っていく途中の東側にある谷である。

ナカジマとは何か。大きな川が流れておれば簡単であるが、山間地のナカジマは難しい。

シマ（島）←シバで、動詞シバク（打）の語幹で崩壊地形を表すという。

ナカジマ（中島）とは、「両側が崩壊して中央部に堆積した谷」としておきたい。

国土地理院の全国地図には、ナカジマ地名の中･大字は２６２件もある。「中島」地名は、３２２件、ナカシマの分が増えている。

【鬧ヶ洞】

イソガシホラ。地名大鑑には、こうある。イソガシガホラの間違いではないだろうか。

この小字は、ナナヨバリの峠を北に向かって下りにかかった西側にある。

イソガシホラでもイソガシガホラでも、どうしてこのような地名が生まれたか、全くわからない。もちろん、二、五万分の一地図にも記載は無い。

「鬧」の字を漢和辞典で調べていると、訓読みでは、サワグ、サワガス、サワガシイ、ミダレルとなっていて、イソガシは無い。ただ古訓のなかに、イソカハシがあるだけであった。音は、ドウが主でネウとも読むらしい。

さて、以上のことから、小字としてはどう考えたらいいのか。三通りの考え方を浮上させるしかない。

①漢字を無視する地名学の本道に従って、イソガシとかサワガシから解く。川音が聞こえる場所ではないので、やや無理もあるが、「崩れている洞」とする。

②鬧の音読みドウを活かして、「水のない谷間」とする（語源辞典）。イソガシホラは「水のない洞」となる。

③同じようにドウと読んで、小字地区内にある標高６０７．１ｍの独立峰を御堂と見立てて、「御堂のような山がある洞」とする。

【大丸山】

オオマルヤマ。

この小字は、川路との村境にある。

オオマルヤマ（大丸山）とは、文字通り、「頂上部分の丸い大きな山」であろう。

マルヤマ（丸山）小字は、川路にも竜丘にもあり、伊豆木と同様に、頂上部の丸い山がある。国土地理院の全国地図には、オオマルヤマ地名が中・大字となって七件記載されている。

【庄ノ田】

ショウノタ。

この小字は、大丸山の中腹の傾斜地にある小さな小字である。

ショウ（庄）とあれば、奈良時代末以降中世の末まで各地に成立した私的土地領有形態である荘園のことになるが、ここでは当てはまらない。かって荘園であった地域にも該当しないのではないだろうか。

ショウ（庄）←シホで、動詞シホル（濡れて弱る）の語幹で、じめじめとした湿地を意味する。

ノタ（の田）は、「沢の田」と同じように、ヌタ（沼田）の転化したもので、山間の沼地を表す。このショウノタ小字周辺には今も水田は全くない。

ショウノタとは、「じめじめとした湿地で、ヌタのある場所」としたい。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、1ヵ所にショウノタ地名がある。宛てられている漢字は「正ノ田」。

「烏平・向平・化原・元屋敷」

【烏平】

カラスダイラ。

この小字は、北側を久米川に、東側を川路に接する広大な小字である。

カラスは烏、ここのダイラ（平）は、平地でも盆地でもない。語源辞典の「山の中腹から麓のあたり」を採りたい。カラスダイラ小字は、山頂を含まない傾斜地で久米川にまで達する。久米川に近い場所に棚田状の水田があり、少し平らになっているだけである状況に、合っている。

烏がよく集まる所だと地元の人はいう。地名発生時にも、冬はカラスのねぐらになっていたものと思われる。

カラスとダイラの組み合わせのためか、全国地図には、カラスダイラ地名は、一件も記載されていない。

【向平】

ムコウビラ。

この小字は、カラスダイラ小字の西側にあり、久米川に接している、傾斜地にある。

ヒラ（平）は傾斜地を意味するので、ムコウビラ（向平）とは、「向こうにある傾斜地」ということになるが、基準がどこにあるのか、何の「向こう」なのだろうか。

考えられることは二つ。

①谷を挟んだ北の方にモトヤシキ小字がある。この元屋敷から見ての谷の向こう側だったと思われる。目に見えている「向こう」だから、確からしい。

②こちらは目に見えてないので、可能性は薄いが、挙げておきたい。ムコウヒラ小字の南の方に、サイノカミ小字があり、峠にもなっていた。あの当たりに当時の村人たちは、なにかの境界を感じていたのではないか。近くにソト小字もあった。サイノカミを越えた「向こう」と考えることも不可能ではない。この場合の基準は伊豆木の中心部にある。

なお、国土地理院の二、五万分の一地図には、ムコウビラ地名は載っていないが、「向平」地名は１７ヵ所もある。ムカイヒラ・ムカイダイ・ムカイダイラ・ムカイッピラ・ムカイタイ・ムコヒラ・ダイラなどと呼んでいる。

【化原】

カハラ。

久米川に開口する洞で、ムコウヒラとモトヤシキ小字の間にある低湿地である。現在、久米川に近い方は水田になっており、高い所は牧草地か荒地になっている。

カハラ（化原）とは何か。ここでも二説を挙げておきたいが、二説ともほとんど同じ状態を違った言葉で表現しているだけかもしれない。

①カハラ←ゴウラ（河原）と転化したもので、「小石のごろごろしているような所」を表す。この小字が名付けられた当時は、こういう状態だったかもしれない。

②カ（化）は動詞カク（欠）の語幹で、崩壊地形を示す。ハラは開墾地のこと。カハラとは「崖など急傾斜地に囲まれた開墾地」を意味する。

国土地理院の全国地図の中・大字に記載されているカハラ地名は九ヵ所ある。

【元屋敷】

モトヤシキ。

この小字は、久米川と県道親田・中村線の間の山地でその中腹にある。カハラ小字の北側になる。

モトヤシキ（元屋敷）とは、①「以前に屋敷があった所」②「山の麓の屋敷」の二説がある。フルヤシキ小字もあるので、②説か。

全国地図には２１件の記載がある。

「下・窪・梨洞・本洞」

【下】

シモ。

シモ小字は、細長い洞の緩傾斜地にあって、カハラ（化原）小字やクボ（窪）小字の上流側にある。

シモ（下）といえば、高い所に比べて低い所を意味するが、ここではそぐわない。それではシモとは何か。

それはシモ（霜）ではないだろうか。この緩傾斜地が霜道になっていて、南向きの斜面で放射冷却が強く、冷気がゆっくりと流れていったのではないかと思われる。

今は樹木畑になっているが、桑もまだ残っている。晩霜の被害を受けやすい土地ながら、それでも桑を作らざるを得ない、だから「霜」という字は使いたくない。そんな悩みがシモ小字には込められているような気がする。

伊那谷南部には、シモ（下）＝シモ（霜）小字が多い。川路にも、竜丘にもある。

国土地理院の二、五万分の一地図には、中・大字の中に、１００件ものシモ地名があるが、「霜」を宛てているのは一件もない。「下」が８９件、「志茂」が１０件、「しも」が１件となっている。

【窪】

クボ。

クボ小字も緩傾斜地であるが、袋状になっていて、出口はあっても狭い。同じ洞の中のカハラ（化原）小字よりも上流にあり、シモ（下）小字よりは下流側になる。

クボ（窪）は、文字通り、「周囲よりも低くなっている土地」をいういが、ここは洞に狭窄部があって、盆地状の地形になっていることを表している。

ここも霜害に遭っているのではないだろうか。

どこにでもある地名で、全国では、クボ地名は、なんと２６５ヵ所にもなる。

【梨洞】

ナシボラ。

ナシボラは中字にもなっているが、ナシボラ小字は県道親田・中村線東側の山地の尾根の部分にある。もう一ヵ所、テンパクワキ（天白脇）の南にも小さなナシボラ小字がある。小さなナシボラについえはよく分からないので、大きな方のナシボラについて考えていきたい。

ナシ（梨）が分かりにくい。この地域では、かってスルをシルといったことがあった。ということから、ナシはナシルの語幹で、ナスル（擦）という意味であった。ナスル（擦る）は山地が擦られたように削られたような状態を表す。と考えるのはどうであろうか。

ナシボラ（梨洞）とは、「高い所が削られたようになっている洞」となる。ナシボラ小字は山頂付近が緩い傾斜地になっている。「梨」の字は美称であろう。

むずかしい地名であるせいか、全国地図にはナシボラ地名は一ヵ所あるだけ。もちろん、それは『ときまた』の二、五万分の一の地図である。

【本洞】

ホンボラ。

この小字は二ヵ所。大きい方は大きな方のナシボラとアサカグチ（阿坂口）小字の間にあり、小さいホンボラは県道親田・中村線と三遠自動車道の間にある最高点の山頂付近となっている。

ホンボラとは、文字通り、「中心になるような大きな洞」と思われるが、小さな方はかっては大きなホンボラの一部だったかもしれない。

国土地理院の二、五万分の一地図には、ホンボラ地名は２ヵ所に記載がある。

「川端・登・けだし・野添・地蔵前」

【川端】

カワバタ。

久米川の梨羽橋付近の右岸に細長く延びている。

久米川の氾濫原にあって、文字通り、「川に沿った所」を意味する。

時又にも天竜川沿いにカワバタ小字があり、全国的にも多く、二、五万分の一地図にも中・大字として６９ヵ所の記載がある。

【登】

ノボリ。

この小字は、久米川に近い「元屋敷」小字から、県道親田・中村線を越えて、三遠南信自動車道の近くまで、細長く延びた小字になっている。

この小字は５０ｍほどの標高差になっている。ノボリ（登）とは、文字通り「上り坂になっている所」であろう。

全国地図では、ノボリ地名が、１７件、中・大字として記載されている。

【けだし】

ケダシ小字は、中字梨洞の中にあって、大きな方は久米川に近く、モトヤシキ小字にも近いので、ケダシとはケダシ（蹴出）で「屋敷から本道へ出るまでの私道」としたい。これは長野県の方言で主に北信で使われているが、南信でも富士見町で採集されており、少し遠いが解釈はこれしかないだろうと思われる。

もう一ヵ所、小さなケダシ小字が遙か西の方にある。これはホンボラ小字に囲まれた山中にあり、付近に住居があったとは考えられない場所である。恐らくは、大きなケダシ小字が、昔はここまで延びていたのであろうか。

【野添】

ノゾエ。

この小字は、久米川の支流が開いた沢の下流部周辺にある。西半分が水田を含む耕地となっており、東半分は急傾斜地になっている。

ノゾエ（野添）とは「野の周辺」ということになるが、これだけでは、よく分からない。仮説を二つ提示しておきたい。

①ノ（野）・ゾエ（添）とする。「野」は広々としたハラ（原）と違って、低木などの繁った山裾や台地状のやや起伏に富んだ平坦地だという（国語大辞典）。とすると、ノゾエ（野添）とは、「緩傾斜地のやや平坦地と急傾斜地を含む土地」ということになろうか。

②ノゾ（覗）・へ（辺）とする。動詞ノゾク（覗）の語幹で、「露出地形、崩壊地形」を意味する。とすると、ノゾエ（野添）とは、「崩壊地のある周辺部の土地」となる。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、ノゾエ地名は３１件も挙がっている。比較的多い地名と思われる。

【地蔵前】

ジゾウマエ。

この小字は、梨洞地積に二ヵ所ある。一つは久米から久米川の地蔵橋を渡ったところで、そこには地蔵菩薩・庚申塔・甲子碑群がある。その付近いったである。もう一ヵ所は、地蔵橋から続く南下する道と久米川の間にある。

ジゾウマエ（地蔵前）は文字通りに考えると、「地蔵菩薩の石碑群の前」というのは、ジゾウマエ小字ではなくて、シモチ小字になってしまう。

そこで、マエ（前）とは、辞書類にあるように、人が地蔵群に面したときに、「顔または目が向いている方向」であると考えたい。そうすれば矛盾しないがどうであろうか。

全国地図には、５

件のジゾウマエ地名。

「下地・喜左エ門屋敷・籔下・きじ山神・天白脇」

【下地】

シモチ。

この小字は久米川に沿った氾濫原に広がり、久米との村境に長く延びている、大きな小字である。

シモ（下）は「低地」を意味する。チ（地）も土地であるとすると、語が重なることになる。これもあり得るとは思うが、チ←フチ（縁）と考えることもできる。

後者に従えば、シモチ（下地）とは、「低い所にあり、伊豆木（或いは梨洞）を縁取っている地域」となる。

さらに、この付近の最も低地になるので、霜害を受けている可能性がある。シモチ（下地）はシモチ（霜地）ではなかったか、とも考えている。近くには、シモ（下）もある。

国土地理院の二、五万分の一地図には、中・大字として六ヵ所にシモチ地名があり、しずれも「下地」の字を宛てている。

【喜左エ門屋敷】

キザエモンヤシキ。

この小字は、久米との境界に接する緩傾斜地にあり、現在でも数軒の家がある。

文字通り、「キザエモンさんが住んでいた場所」で間違いないと思うが、喜左衛門さんが、どんな人で何をしていた人なのかは、分からない。

当然のことながら、全国地図の中・大字の中にはキザエモンヤシキ地名は一つもない。

【籔下】

ヤブシタ。

この小字も久米との境にあって、ジョウヤマ（城山）小字の中腹に当たる。

これも文字通りで、「雑草や雑木が密生している場所の下側のところ」となる。これだけではないようにも思えるが、今のところはわからない。

全国地図には、意外にも、ヤブシタ地名の記載は無い。

【きじ山神】

キジヤマノカミ。

この小字も、ジョウヤマ（城山）小字の中腹に当たり、ナシボラ・テンパクワキ・カイザワなどの小字に囲まれている。

キジヤマノカミ（きじ山神）は、「木地師や木地屋の崇拝していた山の神」のことと思われる。これ以外の解釈は難しい。

木地師たちは、良質の材木を求めて山地を移動していたという。しかし、所々に、木地師の墓地があるところをみると、かなりの期間にわたって滞在していたのではないだろうか。

木地師達の祭祀する神々は、自然の事物や自然の力を神格化していたらしい。だから、祠などはなかったのではないか。

伊豆木ではどうであったのか。多分、木地屋のあった所を木地師達が神を祀ったところと考えて、地名化したのではないか、と思っている。

国土地理院の全国地図には、キジヤマノカミ地名は一件も無い。

【天白脇】

テンパクワキ。

この小字は、キザエモンヤシキ小字の南側にあり、ここにも現住している家族がある。山中の小平坦地となっている。

テンパクワキ（天白脇）とは、「天白神を祀っていた場所の付近」となる。どこか近くにその祠があったのではないかと思われるがどうであろうか。近所の方々に聞いてみないとわからない。

天白神を祀る所は各地にあり、川路に

も竜丘にもあった。しかし、全国地図には無い。この地域特有の神か。

「四国田・うるし洞・先祖地・城山」

【四国田】

シコクタ。

この小字は、急傾斜地を含む、傾斜地にあり、現在でも水田にはなっていない。

シコクタ（四国田）とは何を意味するのか。二説を挙げておきたい。

①中世、シコシコという副詞があって、「場所がぬかるみになっているさま、または、そこに足がはまりこみそうなさま」（日葡辞書）を示している。

クタは動詞クタツ（降）の語幹で、名詞化したもの。傾斜地を表している（語源辞典）。

以上から、シコクタ（四国田）とは、「ぬかるんでいる湿地で、傾斜地となっている場所」を意味していると思われる。

②語源辞典による。シコ（醜）は「荒々しく険しい地」で、クタ（腐）は「湿地」。シコクタ（四国田）とは、「荒々しく険しい傾斜地で、湿地になっている場所」となり、結果的には、①の意味とそれほど異なってはいない。

シコクタ小字は、全体が傾斜地となっているが、特に南東斜面は、急勾配となっており、その裾を川が流れている。北西の緩傾斜地は荒地と一部は桑畑になっていたようだ。

国土地理院の全国地図には、中・大字の中に、シコクタ地名は一件も無い。

【うるし洞】

ウルシボラ。

この小字は、シコクタ小字の南側の傾斜地にある。

ウルシボラといえば、一般には、「漆が生えている洞」を表すが、ここでも、その通りであろうと思われる。

しかし別の解釈もあり得るので、参考のために挙げておく。

ウル（潤）・シ（方向を表す接尾語）で、「湿地である洞」を表すというもの。

ウルシガホラ小字が川路にもあり、どこにでもありそうな小字であるが、全国地図には一ヵ所も無い。暖地性の植物だから地域が限られているためか。

【先祖地】

センゾチ。

この小字は北はシモチ小字に接し、南は尾根に達し、南側のマツバアホラ小字とつながっている。

これも解釈の難しい地名である。ここでも二説を掲げておきたい。

①文字通りの解釈で、センゾチ（先祖地）は、先祖の地で「墓地があるところ」を示している。現に、この小字の北端にある小さな山の頂には、墓地もあり、睦竜霊神の石碑もある。しかしぴったりしないのだ。

②センゾチ←センドウチ←セ（背）・ノ（助詞）・タヲ（垰）・チ（接尾語）と転化したのではないか。セ（背）は、「山の尾根」。チ（地）は場所を示す接尾語。センゾチとは、「山の尾根の峠のある所」を意味する。現地をみると、その通りの地形になっているので、こちらを買いたい。

国土地理院の二、五万分の一の地図には、センゾチ地名は一件も無い。やはりそうであろうと思わざるをえない。

【城山】

ジョウヤマ。

この小字は伊豆木の北西端にあって、久米の城山とは、尾根続きでつながっている。

中世の城山で、合戦時の緊急避難場所としての村の城の役割を果たしていたものと思われる。

全国地図の中・大字には、ジョウヤマ地名は九七ヵ所、「城山」地名は３２０

ヵ所が挙げられている。

「貝沢・源太垣外・青見平・源四郎林・甚三林」

【貝沢】

カイサワ。

この小字は、ジョウヤマ小字続きで尾根が張り出したところで、キジヤマノカミ小字とアオンビラ小字の間にある。殆どが桑畑で、ごく一部が水田になっている。

カイサワ（貝沢）とは何か。

語源辞典にあるように、カイ（貝）はカイ（開）で、「開墾地」を表しており、サワ（沢）は「山あいの水のある所」であろう。

カイサワ（貝沢）とは、「山あいの水もある開墾地」を意味する。尾根なので水は無いようにも思えるが、水田があるところをみると、湧水もあるものと思われる。

国土地理院の全国地図には、カイサワ地名は１０ヵ所にある。いずれも「貝沢」の字を宛てている。

【源太垣外】

ゲンタカイト。

この小字も、ジョウヤマ小字から下る尾根の一つにあり、カイザワ小字とシャグウジヤマ小字に挟まれている。

ゲンタカイト（源太垣外）とは、「源太さんが住んでいた住居の跡」ということになるが、「源太」が幼名ではないかとも思われるので、別の解釈を提示しておきたい。

ゲンタはゲンタ（元太）で、「山から切り出したヒノキの丸太」という意味がある（国語大辞典）。ゲンタカイト（源太垣外）とは、「山から切り出したヒノキの原木の貯木所があった所」と考えたいが、どうであろうか。

なお、国土地理院の二、五万分の一地図には、ゲンタカイト地名は、載っていない。

【青海平】

アオンビラ。

この小字は、カイザワ小字の尾根の南側斜面にあり、二つのジンザハヤシ小字に挟まれている。現在も住宅が一軒ある。

アオンビラ（青海平）とは、何を意味するのか。二説を挙げておきたい。

①アオン←オオミと転化したものとする。オオ（オホ）は美称の接頭語で、ミ（水）となる。ビラ（平）は、「山中にある平らの所」を表す。合わせると、アオンビラ（青海平）は、「一部が湿地となっている山中の平地」を意味する。

②アオン←オオミで、オオはオク（奥）の転化したもの、ミ（廻）は接尾語で、タイラは①と同じ。アオンビラとは、「谷の奥で平らなところ」を表す。

この他に解釈がありそうに思えるが、今のところ、はっきりはしていない。

国土地理院の全国地図には、中・大字としてアオンビラ地名は一件の記載も無い。

【源四郎林】

ゲンシロウハヤシ。

この小字も、尾根の垰を通る道を含んでいて、ジンザハヤシ小字の隣にある。

数えて見たわけではないが、伊豆木には固有名詞がついた小字が多いような気がする。

ゲンシロウハヤシ（源四郎林）とは、文字通り、「源四郎さんが所有していた植林地」のことと思われる。

【甚三林】

ジンザハヤシ。

この小字は、二ヵ所にあるが、アオミタイラ小字を挟んでいる。

「甚三さん所有の植林地」と思われるが、どうであろうか。

「社宮地山・吉原・袴腰・穴田」

【社宮地山】

シャグウジヤマ。

この小字は、ジョウヤマ小字にちかく、尾根の間の谷にあって、周辺には、ゲンタカイト・ジンザハヤシ・アナタ・ハカマゴシの小字がある。現在も住宅が一軒あって、この付近では標高の最も高い所になる。

なにか意味のありそうな地名であるが、はっきりしない。

シャグウジ←ジャクチと転化したものではないかと思われる。ジャク（寂、若）は方言で、「山が崩れた所」を意味する。東北、関東の方言となっているが、神奈川・八王子・山梨でも使われているようなので、伊那谷でも使われていたことがあるかもしれない。長野県では、佐久でジャクエといっているようだ。チは場所を示す接尾語。

以上のことを活かせば、シャグウジヤマ（社宮地山）とは、「崩れたところがある山」ということになる。

なお、国土地理院の全国地図には、中・大字として、シャグウジ地名が一件あるが、シャグウジヤマ地名は記載がない。

【吉原】

ヨシワラ。

この小字は、二ヵ所にある小さな小字で、二つともジョウヤマ小字の斜面のすぐ下側にある。この二つが、かっては繋がっていたのかどうかも判断しにくい。

これもよくわからない地名の一つであろうか。それでも二説を挙げておきたい。

①ヨシ（吉）は、美称でただ好字として使われているだけ。ハラ（原）は、語源辞典によれば、「未墾の入会草刈地」とある。ハラ（腹）の転じたものとして、「山の中腹」とする見方もあるが、ここでは採らない。

ヨシワラ（吉原）とは、「未墾の入会草刈り地で見晴らしのよい所」ぐらいにしておきたい。

②ヨシ←ヨル（寄）と転化したもので、「山寄りの地」とすることもあるようだ（語源辞典）。これを採用すれば、ヨシワラ（吉原）とは、「山寄りで未墾の入会草刈地になっている所」ということになる。

国土地理院の二、五万分の一地図には、中・大字として、ヨシワラ地名が２０ヵ所、「吉原」地名は５１ヵ所も記載されている。おめでたい地名ということだろうか。

【袴腰】

ハカマゴシ。

この小字は、箱川境の南北の稜線に接しており、その稜線とヨシワラ・アナタ小字に囲まれている。

語源辞典によれば、ハカマゴシ（袴腰）は、「崩壊しやすい鞍部」であるという。ハカ←ハガ（剥）で、崩壊地形をいい、マ（間）で場所を示し、コシは尾根をいう。

現在、ハカマゴシ小字に崩壊地はないが、ハカマゴシ小字のやや下流側、弟川の最上流部に当たる谷には崩落の痕跡が見える。

国土地理院の全国地図には、ハカマゴシ地名が３ヵ所ある。

【穴田】

アナダ。

この小字は、弟川の上流部に当たり、箱川境にまで達する大きな小字となっている。

アナ（穴）・ダ（場所を表す接尾語）で、アナダ（穴田）とは、「穴状に入り込んだ土地で、三方を山に囲まれている場所」

ということになる。
全国地図にはアナダ地名が８ヵ所。

「七通田・松葉洞・池ヶ洞・河原田・阿坂口」

【七通田】
ナナトオリダ。
この小字は、アナタ小字の下流側にあり、弟川が削って埋めた谷間に沿っている。
ナナトオリダ（七通田）とは、「たくさん並んだ傾斜地の水田」ではないかと思われる。ナナ（七）は美称で数の多いことを示す。トオリ（通）はタ（接頭語）・オリ（下）で、傾斜地を意味しているものと思われる。
国土地理院の二､五万分の一地図には、ナナトオリダ地名は一つも無い。

【松葉洞】
マツバボラ。
この小字では、弟川に開口する北側と南側の洞が繋がっている。
マツバボラは､「松葉の多い洞」ではあるが、バ（葉）はバ（場）が転化したものと考えたい。そうなると、マツバボラ（松葉洞）は､「松の多い洞」ということになるが、どうであろうか。
全国地図にも、マツバボラ地名は一つある。

【池ヶ洞】
イケガホラ。
この小字は、久米の城山山地から東に延びる側稜の末端の山となっている。
イケガホラ（池ヶ洞）といえば､「水たまりのある洞」ということになるが、この小字の中にはありそうもない。ただ尾根の鞍部に水たまりがあったことは、あり得ないことではない。
イケガホラは水気のありそうにもない小字なので、やや無理気味ながら、次の解釈も示しておきたい。
イ・ケガ・ホラとする。イは接頭語で語調を調え意味を強める語｡ケガ(怪我)は崩壊地形を表す｡合わせると､「崩れたことのある洞のある所」となる。現在、ここに崩壊地の痕跡を見ることは難しいが、当然のことながら、なかったとはいいきれない。
全国地図には、イケガホラ地名が二ヵ所、中・大字として記載されている。

【河原田】
カワラダ。
この小字の北側は、マツバホラ（松葉洞）小字の尾根の末端部に当たり、南側はイケガホラ（池ヶ洞）小字の山麓となっていて、間を弟川が流れていて、水田もある。
カワラダ（河原田）とは、文字通り、「弟川の河川敷にある水田が作られている場所」でいいのではないだろうか。
国土地理院の二､五万分の一地図には、中・大字として、カワラダ地名が１８ヵ所､「河原田」地名が７ヵ所、挙げられている。

【阿坂口】
アザカグチ。
この小字は、弟川支流の比較的大きな沢とセンゾチ小字のある峠から南東に延びる二つの尾根からなる、広い小字である。
アザカグチ（阿坂口）とは何を意味するのか｡二つの考え方を挙げておきたい。
①ア（接頭語で意味はない)・ザカ（山の峠)・グチ（口）で､アザカグチ（阿坂口）とは､｢山の峠に至る入口｣であるとする。アザカグチの上方には、センゾチ小字があって、そこには側稜の峠がある。
②ザカ（坂）をサカヒ（境界）とする。アザカグチとは､｢境界への入口｣となる。

側稜に沿って、センゾチ・ナナヨバリ・サイノカミ・ソト・ジュウサンゾカなど境を表現するような小字がある。

「高腰・うなり岩・肴畑」

【高腰】

タカゴシ。

この小字は、弟川の氾濫原と南側の急斜面からなっている。

タカゴシ（高腰）とは何か。二つの考えがある。

①タカゴシとは、「高い山の麓」を意味する。北側には、標高５７２．８m、南側には標高５６６．８m米の山がある。コシ（腰）には、「山腹」や「麓」の意味がある。

②タカ（高）には、「台地の端」という解釈がある。コシ←コス（漉）で、「水の湧き出る所」。タカゴシ（高腰）とは、「山麓で水の湧き出ている所のある場所」ということになるだろうか。

国土地理院の全国地図には、タカゴシ地名は１件の記載がある。

【うなり岩】

ウナリイワ。

この小字は、ジャバミ小字の上流側にある。

ウナリイワとは、「大雨の時に弟川の激流を受けて、或いは巽の強風を受けて音を発するところ」と思われる。

しかし、このうなり岩については、口碑が残されている。三穂小三年生が作った説明文には、次のように書かれている。「むかし、このあたりで働く女中さんが庄屋さんをおこらせ、カマドで焼き殺されてしまいました。この後、この付近ではモチをふかすためにクドで火をたくと“ホーホー”とうなるような音がするようになったということです。そこで祠をたてて女中さんをなぐさめたということです」（語は一部変更）。

近くの岩場には、石碑が二基ある。一つは、春昌禅定尼・幻先童女の墓碑ともう一つは庚申塔である。墓碑は母子のものと思われるが、口碑との関係ははっきりしない。また、二つの石塔の間の関係も見当がつかない。

音の原因は水流なのか風なのかはっきりしないが、川であれが、岩にぶっかる音がうなりであったのだろうし、風であれば振動する気柱になりうる隙間が、たまたま岩の間にできていて風の方向にうまくマッチしたのであろう。

国土地理院の二、五万分の一の全国地図にも、ウナリイワという中・大字は載ってはいない。

【肴畑】

サカナバタ。

この小字は、一つの尾根と二つの谷を含む広い面積の小字である。現在でも一部が桑畑になっている山地である。

サカ（坂）は傾斜地のこと、ナは接尾語で、「土地」を表す古語であるという。ハタ（畑）には二通りの解釈がある。

①動詞ハタク（叩）の語幹で「叩き落とす」から崩壊地形を表しているとする。

②ハ（端）・タ（処）で、「周辺部」をいう。それぞれを組み合わせれば次のようになる。

サカナバタ（肴畑）とは、①「急傾斜では崩壊した場所もあるところ」を意味する。②「急傾斜地もある場所の周辺部」となる。

この小字は広大な面積になっており、現在でも、殆ど耕作されていない土地で、名付けられた時にも、柴山として利用されていたと思われる。

なお、川路には、サカナヤマ（肴山）小字があって、「瘠せた山地なので、他の土地の肴として、ついでに貰った土地」

であるという口碑がついている。
　国土地理院の二、五万分の一地図には、サカナバタ地名は無い。

「岩子山・観音寺・久保田・殿林・大畑」

【岩子山】
　イワコヤマ。
　この小字は、弟川が形成する谷に沿って三ヵ所に分散しているが、かっては一続きであったかもしれない。
　イワコヤマ（岩子山）とは、何か。仮説を二つ。
①コ（子）はコ（木）から転化したと考えて、「岩のむき出た所や樹木の生えている山」とする。これは、素直な解釈ではあるが、地名としては物足りないような気もする。
②イ（接頭語）・ワコ（動詞ワゴムの語幹）・ヤマ（山）で、「等高線が強く湾曲している山」となる。イは語調を調え意味を強める接頭語。ワコ←ワゴでワゴム（綰）は下伊那郡の方言で「湾曲する」の意（方言大辞典）であるという。この方が地名らしい感じがするが、どうであろうか。
　国土地理院の全国地図には、イワコヤマ地名は無いが、イワゴヤマ地名は１ヵ所ある。

【観音寺】
　カンノンジ。
　この小字は、ダイモン小字のある谷の南側の台地上にある。
　村史によれば、元慶５年（８８０）年に「伊那郡観音寺ヲ以テ天台別院ト為ス」（日本三大実録等）とあるのは、この伊豆木の観音寺であったという。
　この付近一帯に観音寺の御堂が並んでいたのだろうか。
　国土地理院の全国地図には、中・大字として、カンノンジ地名は４３ヵ所、「観音寺」地名は５２件と多い。漢字の方が多いのは、カンオンジと呼んでいる所があるからである。観音像が各地で造像されるようになったのは、７世紀以降というから、さすがに多い。

【久保田】
　クボタ。
　この小字は、弟川の支流が形成した谷の中にある小さな小字である。
　クボタ（久保田）は、文字通り、「谷間にある田んぼ」のことをいう。この地名の意味から考えて、この小字はもっと広かったはずである。この付近は、小盆地になっており、観音寺関係の耕作地が広がっていたのかもしれない。
　このクボタ地名は全国的にも多く、二、五万分の一地図には、８１ヵ所もある。

【殿林】
　トノバヤシ。
　この小字は三ヵ所に分散していて城山側稜のいくつかの峯にまたがる小字で、山麓の水田も含まれている。これらが、かってはつながっていたものと思われる。
　トノバヤシ（殿林）とは、何か。
　トノ（殿）←タナ（棚）と転じたもので、「棚状の地」をいう。ハヤシ（林）←ハヤ（逸、急）・シ（接尾語）。
　合わせると、トノバヤシ（殿林）とは、「棚状の傾斜地」を意味するものと思われる。
　全国地図には、トノバヤシ地名は、３件の記載がある。

【大畑】
　オオバタ。
　この小字は、久米境の山地にある。山林が大半を占めているが、現在でも三分の一ぐらいは、桑畑と水田があるようだ。地名発生時には、桑畑が多かったのではないだろうか。
　オオバタ（大畑）とは、素直に、「面積

の広い耕作地」としておきたい。
全国地図には、オオバタの中・大字は２０件、「大畑」は１４５件と多い。

「大門・田ノ口・うど洞・大熟手」

【大門】
ダイモン。
ダイモン小字は、興徳寺にもあったが、こちらのダイモン小字は観音寺のすぐ北側にある。弟川の支流が開析した谷の氾濫原である。城山山地に近いところであるが、県道田中・乱橋線も通っているので、古代からよく利用された道であったのかもしれない。竜丘には「ダイドウバタ」小字がたくさんあるが、この大道に繋がっているのかもしれない。
ダイモン（大門）とは、寺の総門をいう。東の方から支流に沿って登ってきた参拝者は、この大門で南にある観音寺に向かったのであろう。その門の跡も参道も今はない。現在は小字の殆どが水田になっている。

【田ノ口】
タノクチ。
この小字は、箱川境にあって、鞍部を通る県道田中･乱橋線のすぐ北側にある。
タノクチ（田ノ口）は、「田んぼの出発点」の意か。ここから伊豆木の下流に向かって水田が広がっている。
城山山地の、この峠は、湧水が豊かで、田んぼの出発点であるということは、このタノクチ小字が、下流も含めた水田地帯の水源にもなっていることを意味しているのであろう。
国土地理院の二、五万分の一地図には、中・大字として、タノクチ地名は２３ヵ所が記載されている。

【うど洞】
ウドホラ。
この小字は、県道田中･乱橋線が通る、箱川境の峠の周辺部となっている。
二、五万分の一の全国地図には、中・大字として、ウドホラ地名は載っていないが、ウド地名は１３ヵ所にあり、同類の語であるウト地名は三一ヵ所、ウトウ地名は一二ヵ所と、少なくはない。時又にも、ウトウ、ウトウ洞の小字があって、崩壊地であることを示している。
ウドホラとは、「両側が高くて切り込まれたようになっている道のある洞」を意味するのであろう。
ウト＝ウド＝ウトウであるが、ウトは、ウツ（空、虚）の転化したもの、というのが一般的であるが、辰野の善知鳥峠や時又のウトウ小字などの周辺のウト系地名をみると、もう一つの説を支持したい気持になる。その説とは、ウトの語源は、動詞ウツ（打）の終止形から転化した、とするもの。

【大熟手】
オオジクテ。
この小字も、箱川との境界線に沿っており、ウドホラ・シシヤマ・ツツミイリの小字に接している。
ジクテとは何を意味するのか、全く見当もつかなかったが、語源辞典には、下伊那郡の方言で、「山地の草生湿地」とあって驚く。聞いたことがなかったからである。しかし、軟化病になってしまった蚕が作りかけた繭を集めて真綿にしていたお年寄りのことを思い出した。この繭をシクタと呼んだ。語源が同じだろうと思っている。
ジクジクという副詞がある。「水分を多く含んでいるさま、湿っているさまなどを表わす語」（国語大辞典）であるという。テ（手）は場所を示す接尾語。オオ（大）は美称の接頭語であろう。
オオジクテ（大熟手）とは、「じくじくと湿っている草地」を意味するものと思

われる。
　全国地図には、当然のことながら、オオジクテ地名はない。

「獅子山・与四郎畑・立石田・堤入・小野」

【獅子山】
　シシヤマ。
　この小字は、県道田中・乱橋線が箱川境の峠にさしかかる直前の地にあり、小字内には伊豆木特高区配水池がある。
　シシヤマ（獅子山）とは何をいみするのか。二説を挙げておきたい。
①シシは猪のこと。シシヤマとは、「猪の多い山林」を意味する。素直な解釈であるが、ここだけ猪が多いのだろうか、と考えてしまう。
②シシ←ヒシ←ヒジ（泥）と転化したもので、「湿地」を表す。とすると、シシヤマとは、「自然湧水の豊かな山林」となる。転化の過程が長すぎるという欠点はあるが、現地によくマッチしている。
　国土地理院の二、五万分の一地図には、シシヤマの中・大字が１ヵ所ある。宛てられている漢字は「猪山」である。

【与四郎畑】
　ヨシロウハタ。
　この小字は、観音寺小盆地にあり、タテイシタ小字の上流側、シシヤマの下流側にある、小さな小字である。
　ヨシロウハタだから、「与四郎さんの所有になる耕作地」ということになろうか。伊豆木には固有名詞小字が多いような気がするが、どうしてだろうか。中世末、有力者が多かったのだろうと思われるが、それ以上のことは分からない。
　当然のことではあるが、全国地図には、ヨシロウハタ地名の記載はない。

【立石田】
　タテイシタ。
　この小字も観音寺盆地にあり、ダイモン小字の上流側になる。
　タテイシダ（立石田）とは、何を意味しているのだろうか。
　大きな岩が立っておれば、その近くの田んぼということになるが、どうもそんな目立つような岩か巨石はないようだ。
　タテ（立）はタテ（館）で、「低地に臨んだ丘陵の端」（語源辞典）を意味する。有力者が館などを建てるのに適した地形だからだ、と柳田國男が指摘しているという。イシダはイシ（石）・タ（処）で、「石の多いところ」をいう。
　合わせると、タテイシタ（立石田）とは、「館に適したような、低地に臨んだ、やや高い所で、石が多い」ということになる。
　タテイシタ小字は、「大門」小字に接し、「観音寺」小字にも近い。傍らを通過している県道田中・乱橋線も、かっての主要街道とも目されている。ここに有力者の館があったのは、当然のことと思われる。
　なお、二、五万分の一全国地図には、タテイシタ地名は載っていないが、「立石田」地名は１件記載されている。ここはタテイシダと呼んでいる。

【堤入】
　ツツミイリ。
　この小字は、タテイシタ小字の南側の傾斜地となっているが、一つの洞を形成している。
　ツツミ（堤）は溜め池で水を貯えておく所。イリ（入）は、その上流にあって、しみ出た水を堤に集中する谷ではないだろうか。
　だから、ツツミイリとは、「溜め池に水を少しずつ流し込む傾斜地」としておきたい。
　現在は、溜め池そのものはないが、伊

豆木高区配水池がある。
　国土地理院の全国地図には、なぜか、ツツミイリ地名は記載がない。語の並び方が一般的ではないためであろうか。

「蛇場見・小野・柳平・中條平」

【蛇場見】
　ジャバミ。
　この小字の中には、弟川の氾濫原と南側の急斜面がある。
　ジャバミ（蛇場見）←ジャバミ（蛇食）と転化したもの。国語大辞典によれば、ジャバミ（蛇食）とは、「山野で直径五～一〇米ほどの円形に草木の生えていない場所」とある。この状態を、崩壊した山肌や谷が埋まった部分に見立てたものと思われる。
　ジャバミ（蛇場見）とは、「崖が崩れた所」を意味する。
　国土地理院の全国地図には、ジャバミという中・大字は、８ヵ所に記載されている。

【小野】
　コノ。
　水晶山の麓部分に当たり、カマタ小字の中にある。
　コノ（小野）とは何か。考え方を二つ挙げておきたい。
①コ（小）はほとんど意味をもたない接頭語。ノ（野）は柴山で入会地の草刈場か。コノとは「入会地の草刈場」でこの地域では、柴山ともいう。
②コ（小）は字音コウ（高）の約で「高い」こと。ノ（野）は緩い傾斜地。この場合は、コノ（小野）は、「高い所にある緩傾斜地」となる。
　コとノの組み合わせは逆になることもあり得る。
　全国的には、コノ地名は多く、二、五万分の一地図には、中・大字として４２ヵ所、「小野」地名だと１１３ヵ所にもなる。

【柳平】
　ヤナギダイラ。
　この小字は、水晶山山系の尾根に近い中腹にある。
　北側にはツツミイリ小字があり、湧水のあるところではあるが、ここに果たして柳が生えていたのだろうか。
　下伊那の方言でヤナギは「尾根」を意味するという（長野県方言辞典）。また、神奈川県などでは、ヤナは傾斜地を意味するという。この場合のギは場所を表す接尾語ということになる。
　伊豆木のヤナギダイラは、尾根そのものではないが、尾根に近いところにある。
　ダイラは、「山頂または中腹の平らな場所」であるという。
　以上のことから、ヤナギダイラ（柳平）とは、「水晶山山地の尾根に近い中腹にある、ちょっとした平坦地があるところ」としておきたい。
　国土地理院の全国地図には、中・大字として、ヤナギダイラ地名が５ヵ所に記載されている。

【中條平】
　ナカジョウダイラ。
　これも水晶山山系にある。県道田中・卵橋線の近くで、ヤナギダイラ小字の麓よりになる。
　意外と難しい地名である。ここでも二説挙げておきたい。
①ナカ（中）は、中心地とか重要な所、といった意味がある。ジョウ＝デフで、「～になった所」（語源辞典）という。ナカジョウダイラ（中條平）とは、「山の中腹から麓にかけての平坦地で、何かの中心になったところ」を意味する。何かは近くにあった観音寺のことであるかどうか。

②ナカジョウ＝チュウジョウで、チュウ←ツブで崩壊地を示す。ナカジョウダイラとは､｢崩壊場所のある中腹から麓にかけての平坦地｣か。

「連台場・杉原・横前」

【連台場】

レンダイバ。

この小字は、県道田中・乱橋線の山よりにあり､｢観音寺｣小字の少し離れた南側になる。

連台＝蓮台は、本来は蓮華の形をした仏や菩薩の座台である。それが、墓地や火葬場の意味に変わってきている。伊豆木のレンダイバも同じであったと思われる。

近くには観音寺があった。その北側に「大門」小字があるので、観音寺は北側が正面になっていたと思われる。レンダイバは南側になるので、観音寺の裏手になる。ここに火葬場があったとすれば、位置的には納得できる。観音寺が管理していた火葬場である。中世には、仮葬に付されたものは有力者であって、一般庶民ではなかったようだ。だから人数も限られていたのであろう。

全国地図には、不思議なことにレンダイバ地名は、記載されていない。

【杉原】

スギハラ。

カンノンジ小字の南側に接している。県道田中・乱橋線の東側になる。

湧水の多い傾斜地で、現在では居住地以外はほとんどが水田になっている。地名発生当時、杉の木があったかどうかは疑問である。

スギには三通りの解釈がある。①ス（砂）・ギ（場所を示す接尾語）とするもの。②スキ（剥）の濁音化で、崩崖を意味する。③スキ（数寄）で、観音寺の隣だから茶の湯の可能性もある。

ハラ（原）は開墾地であるが､｢神聖な地｣という意味が含まれる（語源辞典）という。

スギハラ（杉原）とは、①「砂礫地の開墾地」ということか。②「崩崖のある開墾地」ということになるか。③「茶の湯などの行われた茶室もあった､神聖な地」か。

「神聖な場所」というのは観音寺や次のヨコマエ小字とも関係すると思われるがが、はっきりはしない。

国土地理院の全国地図には、中・大字として､スギハラ地名は１５ヵ所にある。

【横前】

ヨコマエ。

この小字は、カンノンジ・スギハラ小字の東側、傾斜地の下の方になる。

この小字も解釈は難しい。

観音寺は先に触れたように、大門のある北に向かっていたであろうと思われる。すると、このヨコマエ小字は観音寺の右横に長く延びている形になる。これをヨコマエと表現したのであろうか、と思いたくなるが、やや無理な感じがする。

ヨコマエは辞書類には無いのだが、気になることが一つある。それは、時又にもヨコマエ小字があって、それが､｢安城垣外｣という有力者の邸跡と思われる小字とタイザ小字の間にある､ということ。タイザもまた有力者や神社・仏閣に関わる地名であるが、ここでは触れない。

伊豆木のヨコマエも、観音寺と関わる何事かが行われていたのではないか、と考えているがどうであろうか。

ヨコマエの斜面の上に横たわるスギハラ小字も「神聖な場所」に関与しているとすれば、ヨコマエ（横前）の意味もはっきりする。ヨコマエ小字は、スギハラ小字の正面の東側に当たるからである。

ヨコマエ（横前）とは、「神聖な墓所である観音寺・杉原の前に長く横たわっている所」としたい。

全国地図にはヨコマエ地名は５ヵ所。

「喜作田・一石田・柿ノ平・中屋・一本木」

【喜作田】

キサクダ。

この小字は、観音寺盆地の南側にあり、イワコヤマ・ヨコマエ・サカナハタ・イチコクダ・カキノタイラの小字に囲まれている。小字内には、標高六〇四米の峯もある。

キサクダの解釈は二つ。

①素直に考えれば、「喜作さんの所有していた水田」となる。

②地形からみると、次のように考えた方が現地には合っている。キサはキザ(刻)の清音化したもので、「刻まれたような所」を意味し、クダはクタ（腐）が濁音化したもので、「湿地」を示す。合わせて、キサクダ（喜作田）とは、「刻まれたような段丘のある湿地」となる。

国土地理院の全国地図には、キサクダ地名は、中・大字には無い。

【一石田】

イチコクダ。

この小字は、観音寺盆地にあり、キサクダ小字に分割されて、二ヵ所に分かれている。

一石は２．５俵だから、小字図から見ると、年貢ではなくて収穫量を表しているものと思われる。すなわち、イチコクダ（一石田）とは、「一石の米を収穫できる水田」を意味する。

一石は中・大字にしては少なすぎるということか、全国地図にはイチコクダ地名もイッコクダ地名も記載されていない。

【柿ノ平】

カキノタイラ。

この小字は、サカナハタ・ナカヤ・イチコクダ等の小字の間にある。現在は、一部に水田と草刈り地があるが、樹林に覆われており、標高６０６ｍの独立峰もある。

カキノタイラ（柿ノ平）とは何か。一応、二説を挙げる。

①「柿を栽培している山中の平らな所」。伊豆木も立石柿の産地と思われるので、ありうるかもしれない。

②カキ（柿）は動詞カク（欠。掻）の連用形が名詞化したもの。カキノタイラとは「崩壊地のある山中の平らの所」と見る。

国土地理院の二、五万分の一全国地図には、カイキノタイラ地名は２ヵ所挙げられている。

【中屋】

ナカヤ。

この小字は、観音寺盆地の一つ南側の谷になる、広い小字である。いずれも水晶山の側稜であるが、観音寺から続く喜作田・岩子山の尾根とその南側の加満田から和泉垣外の小字と繋がる尾根の間の谷である。

ナカ(中)は、「二つの小さな山脈の間」を表す。ヤ（屋）はヤ（谷）のこと。

合わせて、ナカヤ（中屋）とは、「水晶山の二つの側稜の間の谷」を意味する。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、ナカヤ地名が６４ヵ所、記載されている。

【一本木】

イッポンギ。

この小字は、水晶山側稜の一つ、観音寺―喜作田―岩子山の小山脈の末端部とその南側の谷からなる。

この小字には、特に目立つような大きな樹木があったものと思われる。まだ確

認はしてないが、その目標となるような大樹は枯れて今はなくなっているのではないだろうか。

全国地図には、こうした巨木の名を残すイッポンギ地名が３９ヵ所もある。

「小牧田・棚田・松木洞・和泉垣外・久祢添」

【小牧田】

コマキダ。

この小字は伊豆木第三集会所のある洞の下流側で狭くなっている所にあり、上流側にはタナダ小字もある。

コマキタとは何か。これも二説を挙げる。

①コ(小)は調子を調えるための接頭語、マキ（牧）は、動詞マク（巻）の連用形が名詞化したもので、「山麓を取り巻いていること」を示す。コマキダ（小牧田）とは、「山麓を取り巻いているように並んだ水田」を意味する。

②コマ・キダで、コマ（細）は「狭い土地」をいう。キダ（段）は「細かく刻み分けられた地」のこと。コマキダとは、「階段状に刻まれた土地」を意味する。

なお、二、五万分の一全国地図には、コマキダ地名は中・大字として１ヵ所が挙げられている。

【棚田】

タナダ。

この小字も伊豆木第三集会所の洞にあり、コマキダ小字とスギノキホラ小字の間にある。

タナダ（棚田）とは、「急な傾斜地を耕して階段状に作った田。膳棚田」(広辞苑)で、ここ伊豆木のタナダもその通りになっている。

国土地理院の全国地図には、タナダ地名は中・大字として１１ヵ所にあるが、やや少ない感じがするが、伊那谷に住んでいるためであろうか。

【松木洞】

マツコホラ。

この小字も伊豆木第三集会所の洞の中にあるが、伊豆木中区配水池のある丸山山地にも懸かっている。

マツコホラという呼び名もどうなのか、はっきりしていないので、意味まで考えるのは難しいかもしれない。

マツコホラ（松木洞）は、素直に解釈していいのではないだろうか。「松の多い洞」にしておきたい。

二、五万分の一の全国地図には、マツコホラ地名もマツキホラ地名も記載は無い。

【和泉垣外】

イズミガイト。

この小字も、伊豆木第三集会所のある洞の中にあり、ナカヤ・カマタ・マツコホラ小字に接している広い小字である。

イズミガイト（和泉垣外）とは何か。二通りの解釈を挙げておきたい。

①「和泉さんが住んでいた居住地とその周辺」とする。

②イズミは「湧泉地」のこと。イズミガイトとは、「湧水の多い住居跡の周辺」とする。

なお、イズミガイト地名は、二、五万分の一の全国地図には記載されていない。

【久祢添】

クネゾエ。

この小字も，第三集会所のある洞にあり、イズミガイトとカマタの小字に挟まれている。

クネゾイ（久祢添）とは何を意味しているのか。これも難しい地名である。

クネゾエそのものは、「田んぼの畔に添っていること」であるが、何が畔に添っているというのであろうか。あるいは、

田んぼの畔が何に添っているというのだろうか。

答えは、標高に添った水平線か、山の麓の曲線か、ということになりそうだがどうであろうか。

全国地図にはクネゾエ地名は１ヵ所。

「加満田・南堀田・明前・樽ヶ脇」

【加満田】

カマタ。

カマタ小字は、標高８００ｍの水晶山を含む非常に広い面積をもつ小字である。この小字は、水晶山の側稜を連ねて伊豆木第三集会所に達する広さである。

かって豪雨があって水晶山が大崩壊を起こしたときに、大きな水晶を拾ったという話も聞いたことがある。その崩壊地が、このカマタ小字内にあったのであろう。

カマ（釜）は、「えぐったような崖地」をいう。タ（田）は、タ（処）で場所を表す接尾語である。

カマタ（加満田）とは、「えぐったような崖地のある所」であろう。

カマタ小字発生時にも、崩落があり、こうした地名が付けられたのだと思われる。

カマタ地名は、国土地理院の二、五万分の一地図には、中・大字として２８ヵ所も記載されているが、「加満田」地名は無い。

【南堀田】

ミナミホッタ。

この小字は、水晶山の東側の崩壊地からその下流の崩壊地まで続く細長い小字になっている。

ホッタ（堀田）は「新しい開墾地」を意味するが、ここに開墾された跡はない。

ミナミ（南）は方角ではなくて、ミナミ（水波）ではないかと判断した。

ミナミホッタ（南堀田）とは、「水波すなわち土石流が流れ下って掘ったところ」と解したい。この小字の地形が流路に沿っているように見える。

因みに、国土地理院の全国地図には、ミナミホッタ地名は一つも載ってはいない。

【明前】

ミョウゼン。

この小字は、ミナミホッタ小字の下流端から更に崩壊地を下ったところにある、小さな小字である。

ミョウゼン（明前）は固有名詞の感じがするが、もしそうであれば、何らかの口碑が残っていると思われる。どうであろうか。

あるいは、ミョウゼン←ミョウセンで、ミョウセンとは、新潟・長野の方言で、キハダ（黄檗）のことをいうらしい。とすれば、「キハダが自生しているところ」ということになる。

これが固有名詞であれば、全国地図には記載がないであろうと思われたのだが、実際には、中・大字として、ミョウゼン地名は３件もある。「明前」地名も３件と、意外な感じがする。

【樽ヶ脇】

タルガワキ。

この小字は、水晶山の側稜の一つが、県道田中・乱橋線をわずかに越える部分にまで達している。ミナミホッタ小字の下流側の崩壊地の南側に川（弟川の上流部）が流れており、この川の土石流がミナミホッタの崩壊地を形成したものと思われる。

タル（樽）は下伊那地方の方言で「谷川の滝となっているところ」をいう。動詞タル（垂）の終止形からタルミ（垂水）となり、タキ（滝）を意味するようになった方言と思われる。

タルガワキ（樽ヶ脇）とは、「雨の時には滝のように流れる谷川の傍にあるところ」ということになろうか。

国土地理院の二、五万分の一の全国地図の中・大字には、このタルガワキ地名は載っていない。

「ささみ・大峯（黒岩）・象ヶ洞・梅ヶ洞」

【ささみ】

この小字は、箱川境の水晶山の主稜線から側稜の中腹にいたる広い面積の小字になっている。タルガワキ小字の上流側になる。

ササミとは、静岡の方言でチガヤ（茅萱）のことをいうらしいが、この山地では相応しくない。

ササミ←ササミズのズが落ちたものと考えたい。ササミズ（細水）は、「わずかな水」をいう。

ササミとは、「いつもは、わずかな水しか流れていない細い水流」を意味する。

二、五万分の一の全国地図には、中・大字として、ササミ地名が２ヵ所に記載されている。宛てられている漢字は「笹見」である。

【大峯・大峯黒岩】

オオミネ・オオミネクロイワ。

オオミネ小字は、小さな小字で水晶山の北側の側稜の一つにある。オオミネクロイワ小字も水晶山の南側にある主稜線にある峯を含んでおり、東側の斜面に広がっている大きな小字である。

ミネ（峯）は、山の高くなった山頂をいうだけではなく、側稜とか尾根筋にも使われているようだ（語源辞典）。

オオミネ小字に独立した山頂は無い。やや傾斜の緩い大きな尾根がある。これをオオミネと表現したのであろう。オオ（大）は美称かもしれない。オオミネ（大峯）は、「やや大きな尾根筋」ぐらいの意味か。

クロイワ（黒岩）のクロ（黒）←クロ（畔）で、もともと田畑の畦と関連があり、「小高いところ」を意味する。イワ（岩）はガケ（崖）のこと。オオミネクロイワ（大峯黒岩）とは、「尾根筋で小高い所や崖地のあるところ」としておきたい。

国土地理院の全国地図には、中・大字としてオオミネ地名は４８ヵ所もあるが、オオミネクロイワ地名は一つも無い。

【象ヶ洞】

ゾウガホラ。

この小字は二ヵ所にある。一つは、オオミネクロイワ小字の北側にくっついている小さな小字で、小さな側稜の尾根にある。もう一つは、オオミネクロイワ小字の南側に、同じよう接している側稜の尾根筋に沿っている。

ゾウ（象）は、ソ（背または阻）が長音化・濁音化したもの。「背」とした場合には、「周りより少し高くなった尾根筋」となるし、「阻」の場合は、「険しいところ」の意となる。

以上から、ゾウガホラ（象ヶ洞）とは、次のどちらかになると思われる。

①ゾウガホラとは、「周りより少し高くなった尾根筋のある洞」であるとする。

②ゾウガホラとは、「険阻な崖のある洞」を意味する。

なお、国土地理院の二、五万分の一地図には、中・大字としてゾウガホラ地名は一件も記載されていない。

【梅ヶ洞】

ウメガホラ。

この小字は水晶山系の山腹にある広大な小字で、大きな小字が一つと小さな小字が二つある。キタザワ小字に分割されているが、元々はひとつながりの小字であったと思われる。水田や果樹が広がっ

ている。
　ウメガホラ（梅ヶ洞）は、梅が咲き誇っている美しい洞という意味ではない。
　ウメ（梅）ハ、ウメ（埋）で、「崩落で土砂が堆積したところ」をいう。
　国土地理院の全国地図には、ウメガホラ地名は、なぜか記載されていない。

「ふこうじ・網張場・腰馬屋」
【ふこうじ】
　フコウジ。
　この小字は、水晶山系の中腹にあり県道田中･乱橋線と尾根筋との中頃にある。崩落堆積地であるウメガホラ小字に、三方を囲まれていて、やや小高い場所に位置している。
　フコウジ小字は寺院跡といわれており、村史には次のように書かれている。
「ふこうじは織田信忠に焼かれたと伝える。地名に不幸寺と書かれているが、普光寺又は福応寺が不幸寺と記されるようになったものかと思われる。」
　国土地理院の二、五万分の一全国地図には、中・大字として、フコウジ地名は５ヵ所にあり、「普光寺」の漢字を宛てているところが四ヵ所、「福小路」が１ヵ所となっている。
　伊豆木の「ふこうじ」も、元々は、「普光寺」と書かれていた可能性は高い。不幸な末期を悼んで、「不幸寺」になったのであろうが。
【網張場】
　アミハリバ。
　この小字は、フコウジ小字より下流側に広がっており、県道田中・乱橋線をも越えた、側稜の尾根の末端と谷を含んでいる。現在、谷は水田がほとんどで、牧草地なども一部にある。
　アミハリバ（網張場）とは、「霞網を張って小鳥を捕獲した場所」と思われる。
　霞網は、戦後になっての一九四七年、鳥獣保護法によって許可を持たない者の使用は禁止されている。
　しかし、現在でも、観賞用（メジロなど）や食用（ツグミ・スズメなど）といった野鳥にたいする需要は高く、密猟が後を絶たないといわれている。
　この伊豆木のアミハリバ小字が、霞網を張るのに適していたのかどうか。
　民俗大辞典やインターネットなどでみると、戦前は、集落から少し山へ登った斜面に霞網を張ったという例や、谷間や果樹園など小鳥の通路に設置したという例が挙げられている。
　伊豆木のアミハリバも、まさにそうした地形であることから、霞網を設置した場所とみてよさそうだ。
　なお、意外にも、全国地図には、アミハリバ地名は一件の記載もない。
【腰馬屋】
　コシマヤ。
　この小字は、水晶山系の側稜の張り出し部分の小さな鞍部と、その鞍部から下の方に流れるような堆積地からなっている。この鞍部を県道田中・乱橋線が、コシマヤ小字を通っている。
　コシマヤの洞はほとんどが水田であるが、下流の末端部は荒地になっており、新しい堆積地かもしれない。
　コシマヤ（腰馬屋）とは何を意味するのか。仮説を二つあげておきたい。主に語源辞典による。
①コシ（腰）は、動詞コス（越）の連用形が名詞化したもの。マヤ（馬屋）は、中世以降、自然発生的に営まれるようになった民間の馬継ぎ場である。コシマヤとは、「この鞍部の近くにある馬継ぎ場」としておきたい。この説の弱点は、この場所を脇街道が通っていたことが条件になってしまうこと。

②コシ（腰）は動詞コス（漉）の連用形が名詞になったもの。マヤはマ（間）・ヤ（谷）で、コシマヤとは、「湧水の豊かな山々の間の洞」となる。現地の地形によく合っている。

二、五万分の一の全国地図には、中・大字としてコシマヤ地名の記載は無い。

「西本（の垣外）・森垣外・火打山・井場田」

【西本・西の垣外】

ニシモト・ニシノカイト。

これらの小字は、大きな定助畑の谷の西端にあり、いずれもサダスケハタ小字に接している。ニシノカイト小字の方が、ニシモト小字よりも上流側になる。

ニシ（西）については、三通りの解釈ができる。①方角の西を表す②動詞ニジル（躙）の語幹が清音化したもので、「崩壊地形」を表す。③動詞ニジム（滲）の語幹が清音化したもので「湿地」を意味する。ニシノカイトについては、固有名詞である可能性もある。

これらに、モトとノカイトを組み合わせることになる。

モトはモト（下）で「山の麓」を意味する。ニシモト小字はモリガイト（森垣外）山塊の麓になる。

ノカイトは，今までにも出ていているように、「住居地跡」を示す。

どの組み合わせがいいのか、はっきりしない。

国土地理院の二、五万分の一地図には、中・大字として、ニシモト地名は８ヵ所にあるが、ニシノカイト地名は載っていない。

【森垣外】

モリガイト。

この小字は、水晶山系側稜の尾根から飛び出したような小さな山塊で、森垣外山塊と呼んできた。

モリ（森）はモリ（盛）で、「小高く盛り上がった所」のこと。カイト（垣外）は、今までも「居住地跡」としてきたが、ここでは、あるいは「山間の小平地」を意味しているのかもしれない。カイ（峡）・ト（処）とである。

モリガイト（森垣外）の解釈は二通り。

①モリガイトとは、「小高い山のある山地で住居跡だったところ」とする。

②モリガイトとは、「小高い山のある山間の小平地」と考える。

二、五万分の一全国地図には、モリガイト地名は１件の記載があり、「森谷戸」の字を宛てている。

【火打山】

ヒウチヤマ。

この小字は、ささみ川が削った洞で、真ん中を県道田中・乱橋線が通っている。現在でも畑が多く、水田はごく一部にある。

ヒウチヤマとは何を意味するのか。

ヒ・ウチ・ヤマと分ける。ヒ（火）はヒ（樋）で水路のことをいい、ヤマ（山）は耕作地のことをいう。ウチ（打）には二通りの解釈がある。一つは、ウチ（内）で、入り込んだ地形」をいい、もう一つはウチ（打）で「崖などの切り取られたような地形」をいう。

従って、ヒウチヤマの解釈も二通りになる。

①「ささ川によって入り込んだ地形となった耕作地」である。

②「ささ川によって削られた崖のある耕作地」となる。

全国地図には、ヒウチヤマ地名は４ヵ所にある。

【井場田】

イバタ。

この小字は、県道田中・乱橋線の山側

にある小さな小字である。
　イバタ（井場田）は、文字通りの解釈で「井のある傍」で問題はないと思う。井（井）は、「泉や流水から水をくみ取る所」で、近くの住人や旅人たちが、水を汲み上げたところであろう。
　二、五万分の一全国地図には、不思議なことにイバタ地名は一件も無い。

「定助畑・尾地・おかみ・細洞・坂シ畑」

【定助畑】
　サダスケハタ。
　この小字は、ささみ川が開いた谷にあり、水晶山系の側稜の間に位置する。現在は主に、水田と果樹園で構成されている。
　サダスケハタとは、文字通り、「定助さん所有の耕作地」ということになるが、一つ異なった見解を挙げておきたい。
　サダ（定）は「斜面が水平に安定した所」をいい、スケ（助）は、ス（砂）・ケ（処）を表す。合わせて、サダスケハタとは、「傾斜地が緩んだ小段丘の砂地にある耕作地」を意味する。
　全国地図には、サダスケハタ地名は、中・大字の中には挙がっていない。

【尾地】
　オチ。
　この小字は、ささみ川の谷の南の側稜側にある小さな小字で緩傾斜地上にある。
　オチとは何か。二つの仮説を挙げる。
①オチ（落）で、急傾斜地の下の「緩傾斜地」を意味する。現在は水田と牧草地になっている。
②オチ←オンジ（隠地）が転化したもので、「日陰地」をいう。
　二、五万分の一全国地図には、オチ地名は１０件、挙げられている。宛てられている漢字は七種類もある。落３、越知２、越智、遠地、大路、尾知、百千で、「尾地」は無い。

【おかみ】
　オカミ。
　この小字は、水晶山系側稜の尾根に沿った広い面積の山地となっていて，その間を県道田中・乱橋線が通っている。
　オカミとは何か。二通りの解釈を、辞書類によりながら、ここに挙げておきたい。
①オカミ（龗）で、山中や水中に住んでいて、水・雨・雪などをつかさどる神のことで、龍神や水神ともいわれている。その祠か石碑があれば、その通りではないかと思われるが、まだ確認はしていない。
②オカミ（尾髪）で、馬の尾とたてがみをいう。側稜の尾根を馬の背に見立てた可能性もある。
　国土地理院の全国地図には、オカミ地名が１１ヵ所に挙げられている。宛てられている字は、六種類。岡見３、尾上３、夫神２、男神、おかみ、尾神、となっている。

【細洞】
　ホソボラ。
この小字は、オカミ小字とジョウノコシ小字の周辺に四ヵ所ある。いずれも小さな小字で急傾斜地が三ヵ所、緩傾斜地の一ヵ所となっている。
　ボラ（洞）には、「山などの崩れた所」（語源辞典）の意味がある。
　ホソボラ（細洞）とは、４ヵ所とも、「崩れて細くせばまった所」をいうのではないだろうか。
　意外であるが、全国地図には、一件も記載が無い。

【坂シ畑】
　サカシハタ。
　この小字は、ささみ川に沿った、サダスケハタ小字の谷の下流側にある。
　サカシハタとは何を意味しているのか。

サカシハタは、サカ・シハ・タとする。サカ（坂）は傾斜地をいう。シハ←シワ（皺）で、階段状の土地のこと。タはタ（処）またはタ（田）を意味する。

サカシハタとは、「傾斜地の階段状の所または田んぼ」の意か。

全国地図には、アカシタ地名は無い。

「湯が田・庄司洞・竹ノ上（花）・井番戸」

【湯が田】

ユガタ。

この小字はサカシハタ小字の北側の急傾斜地にある。

ユガタとは何か。語源辞典によれば、次の二つの解釈が可能となる。

①ユ（湯）←ヰ（井）の転化したもので、「泉」を表す。カタは動詞カタグ（傾）の語幹で「傾斜」のこと。合わせて、ユガタ（湯が田）とは、「湧水のある傾斜地」をいう。

②ユ（湯）は、動詞ユル（弛）の語幹から、「地盤が弛んで崩壊する」ことをいう。すなわち、ユガタとは、「崩壊したことがある急傾斜地」となる。

国土地理院の二、五万分の一地図には、中・大字としてのユガタ地名は一件もない。

【庄司洞】

ショウジボラ。

この小字は水晶山山系の側稜の末端部分で、二つの尾根に挟まれた、浅く広い谷に位置する。周辺には、ジョウノコシ・セキギョウ・イバンドなどの小字がある。

ショウジボラとは何か。ここでも二通りの解釈がある。

①ショウジ（庄司）←シミズで湧水のこと（語源辞典）。ショウジボラとは、「湧水のある洞」をいう。

②ショウジを中世の荘園の管理に当たった荘司あるいは庄司と、素直に解釈すれば、ショウジボラ（庄司洞）とは、「荘司が住んでいたことのある洞」となる。この小字の北東～北西にジョウノコシ小字があることは、傍証にはならないだろうか。

全国地図には、中・大字に、ショウジボラ地名は一件も無い。

【竹ノ上・竹ノ花】

タケノウエ・タケノハナ。

タケノウエ小字は、二ヵ所にある。一つはショウジボラ小字の南側の高みに、もう一つは八幡宮の北側にある。タケノハナ小字は、北のタケノウエ小字の下流側にある。

タケは、語源辞典によれば、「高くなった所」をいうか、「崩壊地」の意味か、のどちらかとなる。前者ではタケノウエを説明しにくいので、後者の「崩壊地」とする。

タケノウエ（竹ノ上）とは「崩壊地より上の高い所」、タケノハナ（竹ノ花）とは「崩壊地の末端部」を意味すると考えたい。

なお、国土地理院の全国地図では、中・大字として、タケノウエ地名が１１ヵ所、タケノハナ地名は２８ヵ所と意外に多い。

【井番戸】

イバント。

この小字は城山小字群の南側にあり、谷の上流部に当たる。

イバント（井番戸）とは何か。分からない地名の一つ。ここでは、分からないながらも、敢えて二つの考えを挙げておきたい。

①イバント←イバトと転化したもので、イバ（射場）・ト（処）と考える。イバントとは、「弓を射る練習をするところ」と考える。ジョウノコシ小字も遠くはない

ので、可能性はあると思うがどうであろうか。
②イ（井）・バント（番頭）とする。「湧水の管理をして、それぞれの田に水を供給する人」ではなかったか。この場所は、その洞の水田地帯の最上流部にあり、湧水の比較的少ない所だったかもしれない。
国土地理院の全国地図には、中・大字の中にイバント地名の記載はない。

「新庄庵・大庭・薬師前（裏）・飯田」

【新庄庵】
シンショウアン。
この小字はジョウノコシ小字の南側に接していて、現在、この小字内に伊豆木第五組合集会所がある。
アン（庵）は「大寺に付属する小僧坊」（広辞苑）である。シンショウ（新庄）は、仏語である「真証」「真性」（いずれもシンショウ）が転じたものと思われる。
シンショウアン（新庄庵）とは、「興徳寺に付属する僧坊で真性（真証）庵のあったところ」としておきたい。
なお、村史には、新庄庵（真照庵）は時期は不明だが廃絶になっているが、本尊は聖観音であった、とある。
国土地理院の二、五万分の一地図には、シンショウアン地名の中・大字は、当然のことながら載ってはいない。

【大庭】
オオニワ。
この小字は、北はシンショウアン小字に接し、八幡社の北東にある、面積の大きな小字である。
オオニワ＝オオバで、語源辞典がいうように、「神社の前の広場」と思われるが、この広い庭では、八幡社の神事や芸能だけではなく、小笠原氏の閲兵も行われたのかもしれない。義経記には、「大庭（おおにわ）に馬の足音六種震動のごとし」とある。
国土地理院の全国地図には、中・大字としてオオニワ地名が１２件、挙がっている。「大庭」地名は１７件となっている。

【薬師前・薬師裏】
ヤクシマエ・ヤクシウラ。
これらの小字は、城山小字群の南の方に、八幡神社の東の方になる。もう少し近づいてみると、オオニワ小字の東～南側にある。
村史は、明治には廃寺になっていたが、かっては薬師寺があった。本尊であった薬師像は現在、興徳寺観音堂内に安置されている、と書いている。
薬師廃寺の前にヤクシマエ小字があり、裏手にヤクシウラ小字があったのであろう。薬師廃寺は南南西を向いていたことになる。
薬師信仰は現世利益の仏として注目され，特に治病や施薬の面で信仰を集めている。江戸時代には、「朝観音、夕薬師」といわれるほど庶民に信仰された（以上は仏教辞典）という。
これだけの信仰を集めていた薬師寺あるいは薬師堂が、なぜ姿を消したのか。これも村史にあるように、慶応四年の神仏分離令によるものであろうか。路傍のお地蔵さまの首に傷のある姿や，ひどい場合は、首の無い姿を見るのはつらい。
国土地理院の二、五万分の一地図には、中・大字として、ヤクシマエ地名でも８ヵ所にあることは、薬師信仰が盛んであったことを思わせる。

【飯田】
イイダ。
この小字は、ヤクシマエ・ヤクシウラ・オオニワ・タナカの小字に囲まれている小さな小字である。
「薬師前」と「薬師裏」を結ぶ、ほぼ中間点に、このイイダ小字はある。ということは、イイダ小字付近に薬師寺ある

いは薬師堂があったのではないだろうか。
　イイダはユ（斎）・イダ（井田）と考える。ユ（斎）は「神聖な」という意味で、イダ（井田）はキダ（刻）の転で、「段丘」をいう。イイダ（飯田）とは、「神聖な場所で段丘になっている所」としたいが、どうであろうか。
　全国地図にはイイダが４６件もある。

「市場・宮の脇（下）・宮（の八幡社）・行屋脇」

【上市場・中市場・下市場】
　カミイチバ･ナカイチバ･シモイチバ。
　これらの小字は、伊豆木の中心地である、三穂小学校の付近に集中している。カミイチバ・ナカイチバ小字は、それぞれ一ヵ所ずつ。シモイチバ小字は三ヵ所にある。
　市場とは、市場＝市で、「定期的に商人が集まって商品の売買、取引をする特定の場所」（国語大辞典）である。地名発生時と思われる中世末から近世では、“定期的”というのは、月六回というのが多く、六斎市と呼んでいたらしい。イチの語源は神の祭祀＝斎（いつき）と関連しているという。伊豆木の場合は、八幡社の東側になる正面にあり、お宮の祭祀との関わりで発生したという推測もできる。
　国史大辞典には次のようにある。
「戦国時代の村落や街道筋には新たに市場集落が成立し、地域経済圏の要をなした。これら市場集落＝市町には、商人・職人・農民が混住し、市場商業と店舗商業が平行して行われるようになった。」と。伊豆木の場合はどうだったのだろうか。
　国土地理院の全国地図の中･大字には、カミイチバ小字だけでも、１２ヵ所の記載がある。
【宮の脇・宮下】
　ミヤノワキ・ミヤシタ。
　この小字は伊豆木八幡社の南側、お宮から右手の脇と八幡社の下の段丘にある。
　ミヤノワキは、「伊豆木八幡社の脇」を、ミヤシタは「お宮の下の段」を意味する。
　国土地理院の二、五万分の一地図には、中・大字として２６件もの記載がある。
【宮・宮の八幡社】
　ミヤ・ミヤノハチマンシャ。
伊豆木八幡社の神社があるのが、ミヤ小字で、その裏手にあるのが、ミヤノハチマンシャである。ミヤノハチマンシャという小字がどうして存在するのかは、分からない。
　国土地理院の全国地図には、さすがにミヤノハチマンシャ地名は無いが、ミヤ地名は中・大字として、４４ヵ所もの記載がある。
【行屋脇】
　ギョウヤワキ。
　この小字は、ミヤ・ミヤノハチマングウ小字とミヤノワキ小字の間にある。伊豆木八幡宮との関係の密なることを伺わせる位置である。
　ギョウヤワキ（行屋脇）も、意味のはっきりとした小字である。つまり、「行屋の脇になるところ」である。
　以下は、民俗大辞典による。
　行屋とは、仏教・修験道やそれらの影響を受けた民俗宗教の行（ぎょう）をする家のこと。精進屋・行堂・篭もり屋などともいうらしい。具体的には、どんなことをするかというと、
「普段は人々の関心を集めることは少ないが、祭祀においては篭もりや神事を執行する聖なる空間として重要な役割を果たす。行屋での篭もりは、日常生活からの離脱・隔離を意味するばかりでなく、肉体的、精神的な苦行の場として心身ともに浄化することを重要な目的とし、と

きに擬似的な死をも意味している。」という。

伊豆木のこの行屋はどこにあるのか。それは、八幡神社そのものである。だから、行屋脇が神社境内にあるといってもいい位置となっている。垢離は、近くの社古寺川で行われたに違いないだろう。

全国地図には、中・大字として、ギョウヤ地名は２件ある。

「洞・宮つるね・石行・堀立・幸坂」

【洞】

ホラ。

伊豆木八幡宮の近くのホラ小字は、二ヵ所にある。一つは神社の裏手、西側に。もう一つは、小さいが谷一つ隔てた山の麓にある。

ホラ（洞）とは何か。少なくとも二種類はある。

①谷（天竜川などの大河の）←沢（弟川など天竜川の支流）←洞（支流の支流）←垰（最上流部）と大きくなっていくのだ、と大平宿の主に聞いたことがある。一つの見解であるが、明瞭であるので、挙げておきたい。

②「山などの崩れた所」（語源辞典）をいう。

伊豆木のお宮の裏手のホラ（洞）は大きい方が①で、小さい方が②に合っていると思うがどうであろうか。

国土地理院の全国地図には、ホラ地名は２６ヵ所も中･大字に挙げられている。「洞」地名だと、２９ヵ所になる。ボラが混じるからである。

【宮つるね】

ミヤツルネ。

この小字は伊豆木八幡社の西になる裏手の尾根上にある。

広辞苑に「つるね（蔓畝）　峯つづき」とあるところをみると、全国的な小字名であると思われる。

ミヤツルネ（宮つるね）とは、「八幡神社まで延びている山背線」ということになる。現地を見ると、確かに水晶山山系の側稜の尾根が神社まで続いている。

全国地図には、ミヤツルネ地名は記載されていない。

【石行】

セキギョウ。

この小字はミヤツルネ小字に繋がる尾根筋になる。谷側には、イバンド・ホラ・ホリタテ・コウサカ・ジョウノコシ・ショウジボラなどの小字があって囲まれている。

セキギョウ（石行）とは何か。これも難しい。

セキ（石）は動詞セク（塞）の連用形が名詞化したもので、敵を防ぐ場所を表しているか。ギョウ（行）は、長く連なることを意味する。

合わせて、セキギョウ（石行）とは、「敵を防ぐための長くつらなって尾根」と解したいが、どうであろうか。

国土地理院の全国地図には、中・大字の中に、セキギョウ地名は無い。「石行」地名は二ヵ所にあるが、いずれもイシキョウとなっている。

【堀立】

ホリタテ。

この小字はセキギョウ小字の周辺の傾斜地や谷底に三ヵ所ある。

ホリタテ（堀立）は、動詞ホリタツ（掘立）の連用形が名詞化したもので、「盛んに掘ったところ」を意味する。城山を守るための堀と思われる。

国土地理院の二､五万分の一地図には、中・大字として、ホリタテ地名は２件あり､いずれも「堀立」の字を宛てている。

【幸坂】

コウサカ。

この小字は二ヵ所にあるが、いずれもホリタテ小字に接している。

コウ（幸）←コウ（溝）と転化したもので、「堀」をいう。サカ（サカ）←サガ（嶮）と清音化したもので、「嶮しい地形」をいう。合わせてコウサカとは、「嶮しい地形になっている堀の部分」と解したい。

全国地図には、コウサカ地名は９件が、中・大字として記載されている。

「寺尾屋敷・北沢・峯・篭目」

【寺尾屋敷】

テラオヤシキ。

この小字は二ヵ所にあり、一つはホリタテ小字とアザカ小字の間にあり、現在も住居がある。もう一つは大きな小字で、キタザワ小字とホリタテ小字の間にある。

テラオヤシキ（寺尾屋敷）の解釈も二通りある。

①「寺尾さんが住んでいた屋敷跡」という、無理のない解釈。

②テラ（寺）←タヒラ（平）で、緩傾斜地をいう。オ（尾）←ヲ（峯）で、ヲカ（岡）から転化したもの。テラオヤシキとは、「緩い傾斜地の岡にあった屋敷跡」と解釈する。

国土地理院の全国地図には、テラオヤシキ地名はないが、テラオ地名は４２ヵ所に記載がある。

【北沢】

キタザワ。

この小字は、箱川との境から、水晶山系の尾根や谷を経て県道田中・乱橋線を越えた所までの広い面積を有する。

キタ（北）←キダハシ（階段）と転化したもので、「階段状の地形」をいう。

キタザワ（北沢）とは、「階段状になっていて谷川が流れている所」としたい。社古寺川の上流部に当たる。

二、五万分の一全国地図には、中・大字のなかに、キタザワ地名は４８ヵ所ある。「北沢」地名になると、６６ヵ所にもなる。キタサワという呼び名が加わるためである。

【峯】

ミネ。

ミネ小字は二ヵ所にある。大きな方は県道田中・乱橋線に貫かれており、小さな方は、カゴメ小字に囲まれている。二ヵ所に共通しているのは、社古寺川が流れている崩落土砂の堆積地であること。

ミネ（峯）といえば、高い所ということを意味するが、現地の地形には当てはまらない。

それでは、ミネとは何を表しているのだろうか。二つの解釈を掲げておきたい。

①ミは美称の接頭語。ネはネ（根）で、麓をいう。ミネ（峯）とは「山の麓」を意味する。

②ミは接頭語。ネはネ（音）で、「社古寺川の川音」をいうか。この付近、近くを流れているので豪雨の時には、川音がとどろいたのではないだろうか。

当然ながら、この地名は全国的には多く、中・大字だけでも、ミネ地名は１１２ヵ所に及ぶ。「峯」を宛てた地名も５５ヵ所もある。

【篭目・鴨目】

カゴメ・コモメ。

それぞれの小字は二ヵ所ずつあって、水晶山系の側稜や社古寺川の開いた谷にある。

カゴメ小字とカモメ小字は、互いに近い所にあって、カモメ（鴨目）←カゴメ（篭目）と転化したものと思われるので、カゴメ（篭目）について、その意味するところを考えていきたい。

カゴメ（篭目）とは、結論を先にいえば、「嶮しい地形となっている所の付近」ということになると思われる。

カゴ（篭）については、語源辞典によれば、二通りの解釈があるが、結論は同じと考えられる。メはメ（目）←ベ（辺）。
①カゴは形容詞コゴシ（凝）の語幹コゴが転化したもので、「嶮しい地形」をいう。
②カゴ←カコでカ（欠）・コ（処）で「岩などの崩壊地形」を示す。
国土地理院の全国地図には、カゴメ地名は１件だけ記載されている。

「阿坂・中林・鳥居前・田中・羽根の下」

【阿坂】

アサカ。

この小字は、ホリタテ・テラオヤシキ・コウサカ小字の南側にあって、城山小字群の外側にある、ともいえる。

アサカは社古寺川が開析した比較的幅の広い谷で、緩い傾斜地となっている。現地を見て、先のアザカグチ（阿坂口）とはやや異なった解釈をせざるをえない。
①アサ（浅）・カ（処）で、語源辞典によれば、アサ（浅）は程度が小さいことで、オソ（遅、鈍）に通じ、段傾斜地をいう。アサカ（阿坂）とは、「緩い傾斜地であるところ」をいう。現在もほとんどが水田になっている。
②ア（接頭語）・サカ（境）で、アサカ（阿坂）とは、「境界地」を意味する。城山と外の地との境界と思われる。

国土地理院の全国地図には、中・大字としてアサカ地名は五ヵ所にある。アザカ地名は３ヵ所で、こちらは全て「阿坂」の字を宛てている。

【中林】

ナカバヤシ。

この小字は、ミヤシタ・イチバ小字群に混じって、伊豆木八幡社の前方にある。現在、三穂小学校のある丘陵地である。

辞典類によれば、ナカ（中）は、「政治的・行政的・経済的中心地」であり、ハヤシ（林）は、樹木の群がり生えている所ではなく、「物事の多く集まっているところ」としたい。

ナカバヤシ（中林）とは、「伊豆木の中心地で中枢の機関や施設が集まっているところ」であろう。

国土地理院の二、五万分の一全国地図には、中・大字としてナカバヤシ地名は１６ヵ所、「中林」地名は１８ヵ所の記載がある。

【鳥居前】

トリイマイ。

この小字は、伊豆木八幡神社の前方で、ナカイチバ小字とシモイチバ小字の間にある。中枢小字群のある丘陵の北側の麓になる。

この鳥居は、八幡神社の鳥居で、地名発生当時には、この小字の西側にあったはずである。

全国地図の中・大字には、トリイマイ地名はゼロで、トリイマエ地名は３ヵ所ある。

【田中】

タナカ。

この小字は、伊豆木中枢部丘陵の北側の麓にある。現在は、ほとんどが住宅地になっている。

タナカ（田中）とは、素直に、「田に囲まれた集落」と解してもいいのであるが、ナカ（中）には、伊豆木の中心部にあることを意識しているというニュアンスを含んでいるように思われるが、どうであろうか。

国土地理院の全国地図には、タナカ地名が３３９ヵ所も中・大字として記載されている。

【羽根の下】

ハネノシタ。

この小字は、小笠原家書院のあるジョウノコシ小字の南側にある。

解釈の非常に難しい地名である。城山に赤土でも載っておれば、ハネ＝ハニで分かり易いのであるが、赤土ではないようだ。そこで、苦し紛れに、次のように考えたがどうであろうか。

ハ（羽）は、ハ（端）で、城山の縁辺のこと。ネ（根）は麓をいう。合わせてハネノシタとは、「城山の麓よりも下になるところ」としたい。

「仲田・中曽根・御樹木・丸田」

【仲田】

ナカダ。

この小字は城山丘陵の南にある。伊豆木中枢部の北になる。小笠原家書院と三穂小学校の間になるが、少し書院よりに位置する。

ナカダ（中田）には、中稲（なかて）の植えてある水田の意味もある（国語大辞典）ようだが、ここで当てはめようとするのは無理。

ナカダ（仲田）とは、「中央にある水田」あるいは「中央にある場所」を意味するが、この中央とは、伊豆木の中央であると同時に、何らかの神事もこの小字で執り行われた可能性がある。

国土地理院の全国地図には、ナカダ地名の中・大字は６７ヵ所もある。

【中曽根】

ナカゾネ。

この小字も小笠原家書院のある城山丘陵と三穂小学校のある伊豆木中枢部丘陵との間に、２ヵ所ある。

ナカ（中）は、政治的・行政的・経済的中心地をいう。ゾネ＝ソネ（曽根）は一般には高い所を意味するが、現地の地形はそうはなっていない。であれば、「石が多く地味のやせた土地」（国語大辞典）しかないように思えるが、地名発生当時の状況を表現しているのだろうか。

ナカゾネ（中曽根）とは、「伊豆木の中心地にある石が多く地味のやせた土地」としておきたい。

二、五万分の一の全国地図には、１５ヵ所が、中・大字としてナカゾネ地名が記載されている。

【御樹木】

オジュモク。

この小字は二つのナカゾネ小字の間とナカゾネ小字とナカダ小字の間にある。

ジュモク（樹木）←シュモク（撞木）の転化したもの。撞木とは、もともと「仏具の一種。鐘・鉦などを打ち鳴らすＴ字形の棒。かねたたき。また鐘をつく棒」（国語大辞典）であるという。これから派生して、Ｔ字路などＴ字形のものも撞木というようになったらしい。

オジュモク小字には、Ｔ字路がいくつもあるが、このことを指しているのではない、と考えている。それはオ（御）の字がついているからである。

やはりここでは、オ（御）に敬意を表して、仏具と考えたい。鐘撞き棒やその他の撞木を製造販売していた所なのか、あるいは原木も栽培していたのかどうかは、よく分からない。ともかく、オジュモク（御樹木）は「撞木に関係する小字」としておきたい。

国土地理院の二、五万分の一全国地図には、「御樹木」地名はもとより、オジュモク地名も記載はない。

【丸田】

マルタ。

この小字は小笠原家書院のある城山丘陵のすぐ南側の低地にあって、マチウラ小字に挟まれている。

マルタとは何を表しているのか。二通りの解釈がある。

①現在のマルタ小字は、ほぼ正方形になっているが、地名発生時には、もう少し

丸みがあったかもしれない。マルタとは「ほぼ円形の土地」であったとする。
②城山に連ねて、そこに城郭の一部として防御用の造作物があったかもしれない。マルタとは、「城郭の一部と見なされる造作物のあったところ」となる。
　国土地理院の全国地図にはマルタ地名は１０ヵ所に、中・大字として記載されている。

「町裏・元広庭・町・大沼・養老寺」
【町裏・町宇羅】
　マチウラ。
　この小字は城山丘陵の南側低地にあって、マチ小字の西側になる。
　マチウラは、文字通り「マチの裏側」となる。この伊豆木の中心地は、正面が東になるので、マチウラ小字はマチ小字の西側になっていることになる。
　国土地理院の全国地図でみると、中・大字の中にマチウラ小字は、１５ヵ所に記載されている。予想通りの数というべきか。
【元広庭】
　モトヒロニワ。
　この小字は城山丘陵の南東麓にある。周辺をマチ小字に囲まれている。
　モト（元）というのは、新に対する旧のことをいうが、この小字では、この解釈は遠いように思える。ここでは、モトはモト（下）で、山の麓と考えたい。
　ヒロニワ（広庭）は「玄関先の広い庭」を意味するが、水窪町の方言で、「広場」のことだ（国語大辞典）という。こちらを採りたい。
　モトヒロニワ（元広庭）とは、「城山丘陵の麓にある広場」を意味する。城の行事で使われていたのであろう。
　国土地理院の二、五万分の一地図には、モトホロニワ地名の中・大字は無い。
【町】
　マチ。
　マチ小字は城山丘陵の南東の低地にある、かなり広い面積の小字で、県道親田・中村線に沿っている。現在は，一部が住宅地であるが、多くは水田になっている。
　マチ（町）の解釈も二通りある。
①「建物が集まっている所」とするのが無難とも思えるが、ここでは「市場の外にあって、市人（いちびと）の居住する場所。商工関係者の居住地」（語源辞典）としておきたい。商工業者が居続けることは少ないと思われるので。
②この小字は、もともと水田地帯ではなかったか、という想定で、「区画した田地」（国語大辞典）とする解釈。
　国土地理院の全国地図には、中・大字として、マチ地名は、なんと１５２ヵ所に挙げられている。語数が少ないので、地名として採用されやすかったのかもしれない。
【大沼】
　オオヌマ。
　この小字は、県道親田・中村線の東側に広がる広大な小字で、中を弟川が流れている。現在はほとんど水田地帯になって、居住者はいない。
　オオヌマ（大沼）とは、「広大な湿地帯」を意味する。こうした場所は要害の地であり、小笠原家書院のある城山を防御するには効果的であったのではないだろうか。
　オオヌマ地名は、全国的にも多く、国土地理院の二、五万分の一地図には、５３ヵ所も中･大字として記載されている。
【養老寺】
　ヨウロウジ。
　この小字は伊豆木中枢部丘陵の東端に位置する小さな小字である。整地された小学校の一隅になっている。

村史によれば、養老寺には江戸時代に『養老寺の桜』として有名な枝垂れ桜があり、小笠原領主の歌も残されているが、寺は織田信忠によって焼き払われてしまったと言われている。それは普光寺が焼かれたときと同時だったと思われる。

国土地理院の全国地図には、ヨウロウジ地名も、「養老寺」地名も，一つも記載されていない。

「横前・阿ら屋・滝ノ花・砂田」

【横前】

ヨコマエ。

この小字は伊豆木中枢丘陵の一段下の低地の北東側に横たわる。すぐ近くの南東側には養老寺跡がある。

ヨコマエ小字については、すでに観音寺跡付近にもあって、一度触れているが、伊那谷南部にとっては重要な地名と考えているので、ここで復習しておきたい。

ヨコマエ（横前）とは、「神聖な地である、養老寺の前に長く横たわっているところ」である。仏事に関わる大事な催しが行われたと考えているが、それ以上のことは、今のところ不明である。

【阿ら屋】

アラヤ。

この小字は県道親田・中村線の西側で、県道田中・乱橋線との交差点にある。二ヵ所に分かれてはいるが、接近した位置にある。また、一部分は、県道親田・中村線と弟川の間の湿地帯となっている。

アラヤといえば、荒屋（荒れ果てた家）か新屋（新築した家が分家）をいうが、いずれも、面積が一戸にしては大きすぎることや、湿地帯を含むことなどからこの小字の説明には合わない。

では、アラヤは何か。ここでも二通りの解釈を挙げておきたい。いずれも語源辞典による。

①アラ（阿ら）はアラ（荒）で、水流の激しいところ。ヤ（屋）はヤツ（菏）の略で湿地のこと。合わせて、アラヤとは、「激しい水流のある湿地」となる。弟川の強雨時の状態を反映しているものと思われる。

②アラはアラ（粗）で、形容詞アラシの語幹で、崖などの崩壊地をいう。アラヤとは、「崖のある湿地」を意味する。西側に崩壊地がある。

国土地理院の二、五万分の一の全国地図には、アラヤ地名が、中・大字として１２７ヵ所にも記載されている。

【滝ノ花】

タキノハナ。

この小字の東の端には、弟川が流れており、ほぼ中央を県道親田・中村線が通っており、南側は社古寺川に近い。

タキノハナとは何か。

タキ（滝）は川の流れの急なところで、ハナ（花）はハナ（端）で、端のことをいう。ここで、端とは、何の端なのか、迷う。この川は社古寺川であるが、社古寺川そのものがタキノハナ小字のほぼ南端となっているので、あるいは、社古寺川の急流の始まりを端というのかもしれない。

ということで、タキノハナには三通りの解釈を考えることができる。

①タキノハナとは、「流れの急な社古寺川が端になっているところ」。少し無理があるかもしれない。

②タキノハナとは、「社古寺川の急流が始まる所か、或いは弟川との合流点」か。

③タキは、急傾斜地の意を含む。そこで、タキノハナとは「端っこが急傾斜地になっているところ」となる。

全国地図にはタキノハナ地名は２ヵ所。

【砂田】

スナタ。

この小字は弟川に沿った低地に二ヵ所あり、現在、多くは果樹園と荒地。

スナ（砂）・タ（処）で、タは場所をあらわす接尾語である。

スナタ（砂田）とは、「砂地になっているところ」を意味する。

国土地理院の二、五万分の一全国地図にはスナタ地名が、中・大字として六ヵ所にある。「砂田」地名は２５ヵ所にのぼる。

「尾崎・牧ノ本・銭亀・桝屋前田」

【尾崎】

オザキ。

この小字は、大きいのとちいさいのがある。間にアラヤ小字があるが、オザキ小字ももともとは繋がっていたものと思われる。

オザキ＝オサキ（尾崎）とは何か。

国語大辞典によれば、オサキとは「地形で、山から下がってくる所。また、その突端の地」である。

伊豆木のオザキは、大部分が水田になっているが、伊豆木中枢丘陵の南側斜面も含んでおり、「丘陵地を下がってきた突端部を含むところ」を意味する。

これも国語大辞典によれば、オザキ地名のある所は、そこに家を建て屋敷を構えることを忌む、習わしがあるというが、伊豆木の場合には当てはまらないようだ。

国土地理院の二、五万分の一全国地図には、中・大字としてオザキ地名は４１ヵ所の記載があり、「尾崎」地名になると八九ヵ所にもなる。オサキ地名が含まれるからである。

【牧ノ本】

マキノモト。

この小字は、伊豆木中枢部丘陵の南側斜面にあって、県道田中・乱橋線に沿う、小さな小字である。

マキノモト（牧ノ本）とは何を意味するのか。二つの仮説を挙げておきたい。

①マキ（牧）は牧場のことで、中近世でもマキを使っていたという。マキノモトとは「牧場のあった丘陵地の麓」を表す。かって、伊豆木中枢丘陵が牧場であった時代があったのかもしれない。ちょうど地名発生の時期に。

②マキは動詞マク（巻）の連用形が名詞になったもの。マキノモトとは、「丘陵地を巻いている斜面の麓」か。この小字が丘陵を取り巻くほどの長さになっていないところに、やや無理があるか。地名発生時にはもっと長かったということも考えられないわけではないが。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、マキノモト地名は１ヵ所、マキモト地名は３ヵ所挙げられている。

【銭亀】

ゼニカメ。

この小字は県道田中・乱橋線を挟んだ洞の狭窄部に近い地形の中にある。伊豆木中枢部丘陵の南側斜面から、社古寺川に林沢川が合流している所までを含む。

ゼニガミとは何か。

ゼニ（銭）←セミ（狭廻）の転化したもので、「狭い所」を表す。カメ（亀）はカハ（川）・メ（目でべの転）と転化したもので、「川の辺」を示す。（以上は語源辞典）

合わせて、ゼニカメとは、「洞の狭窄部で川に近い所」を意味する。現地は、狭窄部といっても、南側の壁は高くはないが、川は社古寺川と林沢川がある。

全国地図にゼニカメ地名は１ヵ所ある。

【桝屋前田】

マスヤマエダ。

この小字はゼニマエ小字の上流側にあり、伊豆木中枢部丘陵の南側の洞の中にある。

マスヤマエダ（桝屋前田）は何を表し

ているのか。以下は語源辞典による。
マスヤはマ（強意の接頭語）・ス（砂）で「砂地」を示す。ヤはヤツ（菟）で「湿地」のこと。マエダは「伊豆木中枢部の前方にある水田」を表す。
マスヤマエダ（桝屋前田）とは、「砂地で湿り気の多い田んぼで、伊豆木中枢部の前方にある」ことを意味するか。
全国地図には、この地名の記載は無い。

「八反田・白木屋・小堤・島屋」

【八反田】
ハッタンダ。
この小字は社古寺川が開析した洞で、マスヤマエダ小字の上流部に当たる。
ハッタンダというのは、「水田が八反歩あった所」の意味であるが、八という数字は瑞祥地名ともなっているので、きちんとした面積ではないかもしれない。
各地にある地名であるが、全国でも、国土地理院の二、五万分の一地図には、中・大字としてハッタンダ地名が２４ヵ所、「八反田」地名は２６ヵ所が記載されている。

【白木屋】
シロキヤ。
この小字は二ヵ所にある。一つは三穂診療所や島垣外農家組合集落センターのある所。もう一つは地域センターの敷地の一部になっている。
シロキヤとは何を意味しているのか。これが難しい。製材や材木の流通に関する何かがあったのかもしれないが、真実とは遠い感じがする。
これもまた、語源辞典によれば、シロ（白）は「赤石山地で緩やかな傾斜地。丘上や山腹の平坦地」のことをいうらしいが、それを裏付ける別の資料が見いだせない。しかしこれしかないかもしれない。キ（木）は場所を表す接尾語。ヤ（屋）は「家屋が数軒集まった集落」をいう。
合わせて、シロキヤとは、「丘の上や山腹の平坦地にある集落」としておきたい。
なお、シロキには、シロ（城）・キ（柵）とも読み取れるので、砦があったかもしれない。このことは、まだ未確認なので、ここでは取り上げない。
二、五万分の一全国地図には、不思議なことにシロキヤ地名は一件も無い。

【小堤】
コツツミ。
この小字は、二つのシロキヤ小字の間の低地にある。現在は大部分が畑・牧草地になっている。
コツツミとは何を意味しているのか。二つ仮説を挙げておきたい。
①コツツミ（小堤）といえば、「水を湛えた小さな堤」ということになるが、残念ながら、現在はそういう池は無い。この地名が生まれた時には、池があったということは、十分に考えられる。
②コはほとんど意味を持たない接頭語。ツツミ（堤）は、動詞ツツム（包）の連用形が名詞化したもので、「微高地などによって周囲を取り囲まれている地」（この部分は語源辞典による）を意味する。
国土地理院の全国地図には、中・大字として、コツツミ地名は１件しか載っていないが、「小堤」地名は９件になっている。コヅツミが入っているためである。

【島屋】
シマヤ。
この小字は県道親田・中村線に沿って延びる洞にある。現在、上流部は果樹園や住宅地になっているが、下流部は水田である。
シマヤとは何か。二通りの解釈ができる。以下、主に語源辞典による。
①シマ（島）とは、「周囲を水路に囲まれ

た耕作地」で、ヤは先に触れたように「湿地」という。合わせて、シマヤ（島屋）とは、「湿地であるが、周囲を水路で囲まれた耕作地のあるところ」としたいが、どうであろうか。
②ヤ(屋)は居住地あるいは集落とする。シマヤとは、「水路に囲まれた居住地のあるところ」とすることもできる。
全国地図には、シマヤ地名も「島屋」地名も一件の記載も無い。

「大明神・小畑垣外・日焼田・林添中田」

【大明神・大明神原・大明神廻り】
ダイミョウジン・ダイミョウジンバラ・ダイミョウジンマワリ。
これらの小字は、県道田中・乱橋線と県道親田・中村線の間に散在する。
大明神は、神号の一つで明神を更に尊んでいう。春日大明神とか稲荷大明神というように、神名の下につけて称える。ここ伊豆木の大明神とは、諏訪大明神(建御名方命）のことである。しかし、この地には,現在、祠など諏訪神社の痕跡は、小字以外には何もない。
大明神原は、かって諏訪神社のあったところで、古老によれば、年寄りから聞いていた話によると、お祀りは花火を挙げて盛大に行われたが、八幡神社に合祀されてしまったという。明治二九年の社寺明細帳によれば、境内地八二坪、本殿五尺×四尺、拝殿は方二間というお宮であったという（村史)。
「大明神廻り」は、「大明神、すなわち諏訪神社の周辺」を意味する。
国土地理院の全国地図には、ダイミョウジンマワリ地名は無いが、ダイミョウジンバラは１ヵ所（二、五万分の一の時又)、ダイミョウジン地名は１６ヵ所にある。

【小畑垣外】
コバタカイト。
この小字は県道親田・中村線沿いで、ダイミョウジン小字とダイミョウジンマワリ小字の間にある。
コバタカイトとは何か。辞典類を参照にして仮説を二つ。
①コバタ（小畑）はコバタ（古畑）の転で、開発の古い熟畑を意味する。コバタカイトとは、「よく耕作してある肥沃な土地で住居跡のあるところ」ではないか。
②コバ（木場）で山から切り出した材木を一時的に貯えておく所。タ（処）は場所を表す接尾語。コバタカイトとは、「山から切り出した木の貯蔵所で、住居跡のあるところ」を意味する。
全国地図には、コバタカイト地名は一つも無い。

【日焼田】
ヒヤケダ。
この小字は県道親田・中村線沿いで、コバタカイト小字とハヤシゾエナカダ小字との間にある。現在は果樹園になっている。
ヒヤケダ（日焼田）とは、「日照りた続くと、水が枯渇しやすいところ」を意味する。タ（田）は、接尾語で場所を表すタ（処）としたい。かっては水田であった可能性もあるが。
国土地理院の二、五万分の一全国地図には、中・大字として、ヒヤケダ地名が、１ヵ所記載されている。

【林添中田】
ハヤシゾエナカダ。
この小字はダイミョウジン小字の一段下の殿林川氾濫原にある。
ハヤシゾエナカダという長い名前の小字にはどういう意味があるのか。語源辞典によって、二例を示したい。
①ハヤシ（林）は「樹木の生えているところ」で、地名発生時には、殿林川に沿った自然堤防に樹木が生えていたのであ

ろう。ナカダ（中田）は、「山などの二つのものに挟まれた間の地」となる。合わせると、ハヤシゾエナカダとは、「殿林川に沿った樹木の生えているところで、二つの段丘に挟まれた低地」という。
②ハヤ（逸）・シ（接尾語）で、ハヤシは傾斜地を表す。ハヤシゾエナカダとは、「傾斜地にそった,二つの段丘に挟まれた低地」ということになる。

「じん田・舟久保・地蔵賀・平畑」

【じん田】

ジンデン。

この小字は「大明神」小字の周辺に、二ヵ所ある。

ジンデン（神田）＝シンデン（神田）で、神田とは、「神社に付属して、その収穫を神社の祭典や造営、または神職の給料などの諸費にあてるための田地」のことで、田租は免除されていた。

このジンデン小字はダイミョウジン小字の近くにあるので、大明神すなわち諏訪神社の所有だったのであろう。

南伊豆木八幡社に関連するような小字は無い。この八幡社の創設は天保１１年以降というから（村史）、この地域の小字名が確定していったのは、それ以前ということになる。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、ジンデン地名が１５件の記載があるが、「神田」地名は９４件にものぼる。多くなっているのは、カンダ・ジンダ・カダ・カミダなどの小字が含まれるからである。

【舟久保】

フナクボ。

県道田中・乱橋線が西向きから北向きに向きを変える前のところの道沿いにある。

フナクボ（舟久保）とは何か。窪地らしいところがはっきりしないが、耕作し続けているうちに、埋まって平坦になったのだろう。ここでも二説を提示しておきたい。
①文字通り「舟の形をした細長い窪地」を意味する。
②フネ←クネ（曲）と転化したもので、フナクボとは、「（等高線状に）曲がった窪地」となる。

国土地理院の二、五万分の一全国地図には、フナクボという地名の中・大字は五ヵ所に記載がある。

【地蔵賀】

ジゾウガ。

この小字は県道田中・乱橋線沿いのフナクボ小字の北側にある。

ジゾウガ（地蔵賀）とは何か。難しい地名である。

ガ（賀）←カ（接尾語で「場所」を示す）と転化したもの（語源辞典）。字面通りに考えれば、「お地蔵様を祀ってあるところ」となる。しかし、現在はお地蔵様は見当たらない。いつの時代かに無くなったのか、それもはっきりしない。

そこで、もう一つの解釈を挙げておきたい。

ジ（地）は「後に加えられたものに対して、基本的・本質的なもの」（広辞苑）である。この場合は、花崗岩が風化してできた砂のこと。ゾウガ（蔵賀）←ソガ←ス（州）・カ（処）で、「砂地」をいう（語源辞典）。ジゾウガとは、「もともと砂地であったところ」となるが、どうであろうか。

【平畑】

ヒラバタ。

この小字は県道田中・乱橋線が通る水晶山側稜の北向き斜面と社古寺川支流が開いた水田と果樹園からなっている。

ヒラバタ（平畑）とは、「山の一部が平

らになっている所の周辺」としておきたい。ヒラは現在耕作地となっている緩傾斜地のこと。バタ（畑）はハ（端）・タ（処）で、「周辺」を意味する。あるいは、逆に「傾斜地周辺の耕作可能な平坦地」の可能性も高い。

全国地図には、中・大字として、ヒラバタは四件、「平畑」は２５件ある。ヒラハタ・ヒラバタケなどの呼び方が混じる。

「胡桃垣外・亀屋・鍋田・藤ノ木」

【胡桃垣外】

クルミカイト。

この小字は社古寺川の谷とその支流の谷が合流するところにある。

カイトは多くの場合、「住居跡」で通るが、この小字については当てはめにくい。そこで、語源辞典に従って、「カイ（峡）・ト（処）で、「山間の小平地」としたい。

クルミは動詞クルム（包）の連用形の名詞化したもので、「取り囲まれた地形」である（これも語源辞典）。

合わせて、クルミカイトとは、「流水に取り囲まれた小平地」を意味する。

しかし、湿地だから、実際に胡桃が栽培されていた可能性も否定できない。

国土地理院の全国地図には、クルミカイト地名の記載は無い。

【亀屋】

カメヤ。

この小字は、社古寺川に沿った低地にある。

カメヤ（亀屋）が何を意味するのか。解釈を二つ挙げておきたい。いずれも語源辞典による。

①カメは、カワ（川）・メ（目で、べの転）を約したもので、「川辺」をいう。ヤはヤツ（菟）の約で「湿地」のこと。合わせて、カメヤとは、「川辺の湿地」を意味する。

②カメ←カミ（噛）と転化したもので、浸食地形を示す。ヤは同じで湿地のこと。合わせて、「（社古寺川に）浸食され、堆積した湿地」を意味する。

二、五万分の一全国地図には、中・大字として、カメヤ地名が１ヵ所にある。宛字は「亀屋」。

【鍋田】

ナベタ。

この小字は、社古寺川の支流が開析した谷で、二ヵ所にある。

ナベタは何を意味するのか。これも辞典類を参考にして、二説を挙げておきたい。

①ナベ←ナメと転化。ナメはナメル（滑）の連用形の名詞化したもので、緩傾斜地をいう。タ（田）は田圃か。合わせて、ナベタとは、「緩傾斜地にある水田」とする。

②ナメをナメル（舐）の連用形とする。「舐める」には、「切り落とす」の意味もあるようで、製本時に使うという。ナメは浸食地形を示す。タはタ（処）。合わせると、ナベタとは、「浸食されたところ」を意味する。

全国地図には、中・大字として、７ヵ所にナベタ地名がある。

【藤ノ木】

フジノキ。

この小字は水晶山系の側稜の尾根で、県道田中・乱橋線に沿っている。

フジノキが何を意味するのか。三通りほど考えられる。

①「藤ノ木」に囚われると、文字通り「植物の藤が生えていた所」となる。しかし、この地域はどこへ行っても藤には出会う。これを地名にするだろうか、という疑問がある。可能性の小さな解釈と思われる。

②フジ←フシ（節）と転じたもので、「高い所」をいう。ノキ（ノ木）はノキ（軒）

で、「家の裏手の土地」を表し、伊那郡や水窪で使われている(語源辞典)という。合わせると、フジノキとは、「小高い丘の裏手にある土地」ということになる。
③もしかしたら、富士信仰の場であったかもしれない。小高い丘を富士山に見立てて信仰の対象にした可能性もある。
全国地図にはフジノキという中・大字は３１ヵ所、記載されている。

「又助田・中峰・中曽根・関岡・祢垣外」

【又助田】
マタスケダ。
この小字は水晶山系側稜の南西側斜面と低地の水田からなる小さな小字である。
これも三穂に多い固有名詞付の土地である。いままで、三穂の小字を扱う場合には、名の所有者とみてきたが、作手の固有名詞を付けてある名もあるという。比較的小規模の百姓名であるといわれている。三穂の小字で固有名詞のついた田畑は、この百姓名と見た方がいいのかもしれない。
こう考えると、マタスケダは「又助さんが耕作していた土地」ということになる。
全国地図には、こうした固有名詞づきの小字名が記載されることは少ない。マタスケダという地名も、もちろん無い。

【中峰】
ナカミネ。
この小字の中を県道田中・乱橋線が通っており、ミネ小字の南側に位置する。西側には水晶山山系の側稜がせまり、東側は社古寺川が開いた深い洞になっている。
ナカミネとは、ミネよりも中心部寄りの所という意味であろうか。ミネは「水晶山系側稜の麓の部分」としてあるから、ナカミネとは、「中心部に近い水晶山系側稜の麓の部分」ということになる。
中心部であると考えるのは、この付近には、セキオカ（関岡）小字があり、ナカソネ（中曽根）・ナカボウ（中坊）など「中」のつく小字もあり、トノバヤシ（殿林）小字もあり、さらに関岡観音堂もあるからである。
国土地理院の全国地図には、ナカミネという中・大字が２６ヵ所もある。

【中曽根】
ナカソネ。
この小字は県道田中･乱橋線を挟んで、西と東に二ヵ所ある。
ずっと東の方にも中曽根小字があった。伊豆木中枢丘陵の北側で、そこでは、ソネとは「石が多く地味のやせた土地」としたが、ここのナカソネでは適用できない。
ここのソネは「山の峰の一段低い所でまた一丘を作っている所」（語源辞典）としたい。
ナカソネ（中曽根）とは、「中心部にあって、山の峰の一段低い小平坦地」ということになろうか。

【関岡】
セキオカ。
この小字は県道田中・乱橋線に沿った,東側の小平坦地にある。
セキ（関）は、通行者を検問する所であるが、地名となっている場合は,中世起源のものが多いという（語源辞典)。
オカ（岡）はソネと同じで、側稜の谷にくだる尾根であるから､セキオカとは、「関所のあった側稜の小平坦地」を意味する。
この付近に、中世末期、伊豆木の中心地の一つがあった、ということを想定しているが、それが間違いであったなら、セキオカも「水源地のある小平坦地」と

訂正しなければならない。
　意外であるが、全国地図には、セキオカは一ヵ所記載があるだけ。
【祢垣外】
　ネガイト。
　セキオカ小字の南側にあり、県道に沿っている。
　ネガイトとは、「側稜の尾根の丘の上の居住地跡のある所」であろう。
　全国地図にはネガイトは記載が無い。
「中坊・殿林・峠・コモデ石山・水上」
【中坊】
　ナカボウ。
　この小字は県道田中・乱橋線の西側斜面で、水晶山主稜の中腹にまで達する広い小字となっている。
　この小字内に関岡観世音大峰山南面堂と付随する墓地がある。
　ボウ（坊）というのは、この観音堂をいうのか、それとも、もう少し多くの坊があったということなのだろうか。この小字の面積の広さから考えると、一堂だけとは思われない。
　国土地理院の二、五万分の一地図には、中・大字として、ナカボウ地名が二ヵ所に載っている。
【殿林】
　トノバヤシ。
　この小字は二ヵ所、いずれも県道田中・乱橋線より西側の水晶山山系側稜の尾根の南側にある。ナカボウ小字の両側にあり、高い方と低い方に分かれている。
　トノバヤシとは何を意味するのか。二通りの解釈を挙げておきたい。
①この付近に伊豆木中心部の一つがあったという想定に従う。トノ（殿）有力者のこと。この有力者は関所の管理に当たっていたかもしれない。ハヤシ（林）は、ハヤ（逸）・シ（接尾語）で、急傾斜地を意味する。トノバヤシとは、「有力者が住んでいた傾斜地」となる。県道に近い小字の方は、現在水田になっているところもあり、居住地であった可能性はある。
②トノ←タナ（棚）と転化したもので、棚状の地を意味する。トノバヤシとは、「傾斜地で棚状になっている所」を意味する。
　国土地理院の全国地図には、トノバヤシ地名は、３ヵ所で中・大字になっている。
【峠】
　トウゲ。
　この小字は水晶山山系の主稜線に接しており、文字通り、箱川に越える峠のあったところであろう。
　全国地図に記載されている、トウゲ地名は、当然ながら八八ヵ所にのぼる。「峠」の字を宛てている中・大字は九四ヵ所になる。トオゲという呼び方が入るために増えている。
【コモデ石山】
　コモデイシヤマ。
　この小字は水晶山系の二つの側稜とその間の谷を含んでいる。
　コモデイシヤマとは何か。これも分かり難い地名である。二通りの解釈を挙げておきたい。
①コモは動詞コモル（籠）の語幹で、「（山などの陰に）入り込んだ地形」を意味する。デ←テ（手）の転で、場所を示す接尾語。コモデとは、「稜線の尾根の陰になる場所」（語源辞典）を意味する。合わせてコモデイシヤマとは、「稜線の尾根の陰になる場所で、岩の多いところ」とする。
②コモデは①と同じ。イシヤマ←イシマ（窟）と転化したもので、谷間をいう。合わせて、コモデイシマとは、「稜線の尾根の陰になる谷間」となる。
　なお、全国地図には、長い地名であるためか、コモデイシヤマ地名は一ヵ所も

無い。
【水上】
ミズカミ。
この小字は水晶山系側稜の間の深い谷で、殿林川の水源の一つと思われる。
ミズカミとは、文字通り、「川の水源になっている所」をいう。
全国地図には、ミズカミは３９ヵ所「水上」地名は４９ヵ所もある。

「馬坂・カジ穴・紺屋・関坂・板屋」
【馬坂】
マサカ。
この小字はミズカミ小字の下流側にあって、深い谷になっている。
マサカ（馬坂）とは、字面で解釈すれば、馬があえぐような坂道ともとれるが、旧道もほぼ等高線に沿っており、馬が苦しむような傾斜地ではない。
マは単なる接頭語で、サカ（坂）は、サ（狭）・コ（処）の転化したもので、「谷間」を意味する（語源辞典）ものと思われる。
国土地理院の全国地図によれば、マサカ地名は、中・大字として５ヵ所、「馬坂」地名は九ヵ所に記載がある。
【カジ穴】
カジアナ。
この小字はマサカ小字の深い谷の下流にあり、県道田中・乱橋線が貫いている。
カジアナとは何を意味するのか。
カジというと鍛冶を連想するが、アナ（穴）との繋がりがよくないので、ここでは採らない。
カジは動詞カジル（囓）の語幹で崩壊地形を表し（語源辞典）、アナは穴状に削られたところをいう。合わせて、カジアナとは、「流水に削られて穴状に崩れたところ」を意味する。
国土地理院の二、五万分の一地図には、カジアナ地名は一つも載っていない。
【紺屋】
コウヤ。
この小字はカジアナ小字の下流側にある。県道田中・乱橋線に沿った崩壊地である。
コウヤとは何か。
辞書類によれば、コウヤ（紺屋）←コウヤ（荒野）で「開墾を進めるために租税を免除された土地」であるという。中世末～近世初に開墾されたところであろう。
なお、コウヤ（紺屋）には、染物屋の意味もある。コンヤ（紺屋）である。しかし、関所が近いとはいえ、ここに染物屋があったとは考えられないし、中世には染物屋は紺掻と呼んでいたというのが気になって、取り上げないことにした。
国土地理院の全国地図には、中・大字として、コウヤ地名は１１４件も記載されている。「興野」「興屋」「高野」などの当て字が多い。「紺屋」地名になると、１０件と少なくなる。
【関坂】
セキザカ。
この小字は県道田中・乱橋線の新旧道に沿った緩傾斜地にある。
セキザカは何を意味するのか。
セキ（関）はすぐ近くにある関所のことをいう。サカ（坂）は傾斜していて勾配のある所。合わせて、サキザカ（関坂）とは、「関所に近い登りの坂道」と意味するのではないだろうか。関所を通過するために準備をしておいた方がいいだろう、という意味もあるか。
国土地理院の二、五万分の一地図には、２ヵ所にセキザカ地名が挙げられている。
【板屋】
イタヤ。
この小字はコウヤ小字の下流側にあり、

県道田中・乱橋線の両側に広がる大きな小字である。

イタヤとは何か。仮説を二つ。

①イタ←イタム（傷）の語幹で浸食地形をいう。ヤ←ヤツで湿地のこと。イタヤとは、「崩落堆積した湿地」となる。

②素直な解釈で、「板材を取り扱った業者の居住地」とする。

全国地図にはイタヤは３９件の記載。

「畑添・新屋敷・祢宜垣外・姥田・葭田」

【畑添】

ハタゾエ。

この小字は県道田中・乱橋線に囲まれた洞にある。

ハタゾエ（畑添）とは何を意味するのか。ソエ（添）は、「山などの斜面」（国語大辞典）としたい。ハタ（畑）には二通りの解釈がある。

①「畑など耕作地」を意味する。

②動詞ハタク（叩）の語幹から、「崩壊地形」を表す（語源辞典）。

ハタゾエとは、①「畑のある傾斜地」となり、②「崩壊地である斜面」となる。

国土地理院の全国地図には、ハタゾエ地名は、なぜか一つも載っていない。

【新屋敷】

シンヤシキ。

この小字は、県道田中・乱橋線を挟んだ小さな小字である。かっては一つの中心地だったと目されるセキオカ小字に近い。

シンヤシキ（新屋敷）とは、語源辞典によれば、近世の分村集落名で、「新たに屋敷地とした所」を意味する。

国土地理院の二、五万分の一地図には、中・大字としてシンヤシキ地名は六四ヵ所に、「新屋敷」地名は１３３ヵ所に記載されている。「新屋敷」が多いのは、アラヤシキの読みも含まれるからである。

【祢宜垣外】

ネギガイト。

この小字もセキオカ小字に近い所にあり県道田中・乱橋線の両側に二ヵ所ある。

ネギガイト（祢宜垣外）は、文字通り、お宮の宮司である祢宜が、複数住んでいた場所である。

どこのお宮の祢宜かというと、それは現在は存在していない諏訪神社で、「大明神」や「大明神原」の小字にあったお宮と思われる。

二、五万分の一の全国地図にはネギガイト地名は記載されていないが、ネギヤ地名は、中・大字として６ヵ所に載っている。

【姥田】

ウバタ。

この小字は、水晶山山系から延びる深い谷であるマサカ小字からかなり下流の洞にある。イタヤ小字の下流側に位置している。

一般には、山姥伝説に関わる地名とされているが、ここでは、まだ聞いてはいない。

ウバ（姥）とは、動詞ウバウ（奪）の語幹で、崩崖などを意味する（語源辞典）。

ウバタ（姥田）とは、「崩落堆積した場所にできた水田」を意味するか。現在もほとんどが田圃になっている。

国土地理院の全国地図には、ウバタ地名は１件だけ、中・大字として記載されている。「姥田」地名は３件となっている。

【葭田】

ヨシダ。

ここ小字は、上流側にウバタ小字と下流側にジンデン小字と、挟まれている

一般的には、葦は「悪し」に通じるとして避けられ、ヨシが使われるようになっている。

ヨシダ（葭田）をどのように解釈した

らいいのか迷うが、ここでは二説を挙げておきたい。
①ヨシは美称で、意味のない好字として使われていると考える。ヨシダとは単なる「水田」を意味する。
②ヨシダとは、「かっては葦が生えていた水田」をいう。
国土地理院の全国地図には、ヨシダ地名は、１３４件と多い。

「鳥出・狐塚・小屋垣外・番場・小丸山」

【鳥出】

トリデ。

トリデ小字は、四ヵ所、水晶山系の側稜の末端の突出部にある。その一つは、県道田中・乱橋線が大きく方向を転換して戻る、その突出部にある。

トリデとは何か。

トリ（鳥）は、動詞トル（取）の連用形が名詞化したもので、「切り取られたような地形」（語源辞典）をいう。デ（出）は「物の突き出た所」（広辞苑）である。

合わせて、トリデとは、「側稜が切り取られたように突き出たところ」であろう。四ヵ所のひとつひとつが、全て当てはまるわけではないが、全体をみると、尾根の突出部にあることがわかる。

国土地理院の二、五万分の一の全国地図には、中・大字として、トリデ地名は五件、取り上げられている。「鳥出」地名となると１ヵ所ではあるが。

【狐塚】

キツネヅカ。

この小字は二ヵ所、いずれも水晶山系側稜の末端部分にある。

キツネヅカとは、多くは、「狐の住む丘」（国語大辞典）と理解されている。諏訪大明神の神使は蛇と狐といわれている。「大明神」小字の近くに、キツネヅカ小字があるということに関連しているのかもしれない。

しかし、別の解釈もあるので、その一つを挙げておきたい。それは、キツネ←キツレ←クヅレ(崩)と転化したもので、キツネヅカとは、「崩れた所がある丘」という説明も成立する可能性がある。

なお、国土地理院の全国地図には、キツネヅカという中・大字は１４ヵ所にある。

【小屋垣外】

コヤカイト。

この小字は南伊豆木八幡宮の東側の段丘の一角にある小さな小字である。

コヤ（小屋）は、仮小屋とか野小屋とか呼ばれている開拓のための小屋ではないか(語源辞典)、という解釈に従いたい。

コヤカイト（小屋垣外）とは、「開墾のために造られた仮小屋のあったところ」と解したい。

なお、国土地理院の全国地図には、コヤカイト地名は載っていない。

【番場】

バンバ。

この小字は、「大明神」小字に接しており、南伊豆木八幡宮の段丘の北側の斜面にある。

バンバ（番場）の解釈は幾通りもありそうだが、ここでは二つに絞っておきたい。以下は語源辞典による。
①バンバとは、「神社の参道」をいう。この場合の神社は、南伊豆木八幡宮ではなくて、大明神の諏訪神社である。
②バンバ＝ババ＝ハバで、「傾斜地」を意味する。この段丘の北側には崩壊したらしい跡がある。

全国地図には、バンバ地名が、６７件あり、「番場」地名も１７件、記載されている。

【小丸山】

コマルヤマ。

この小字は県道田中・乱橋線の尾根と皆網伊豆木八幡宮の段丘の間にある洞に三ヵ所、散在し、頂上が丸い小さな丘になっている。

コマルヤマ（小丸山）は字面通りで、竜丘・川路など他地区と同様、「小さな頂上の丸い丘」を意味する。

国土地理院の二、五万分の一地図には、中・大字として４ヵ所、記載されている。

「大久保・川上林・金洞・立畑」

【大久保】

オオクボ。

この小字は水晶山山系の側稜の尾根近くにあり、県道田中・乱橋線に沿っている、小さな小字である。

オオクボ地名は全国的にも多く、中・大字の中に、オオクボは３３７ヵ所と非常に多い。この地域にもかなりある。

オオクボとは、大きな窪地ではなくて、オオ（大）は美称の接頭語で、意味はない。オオクボとは、「尾根に近い山間の小平地」であろう。

【川上林】

カワカミバヤシ。

この小字は水晶山山系の側稜にあり、オオクボ小字と並んでいる、小さな小字である。

カワカミとは、川の上流の方だから斜面の上の方をいう。ハヤシ（林）には二つの解釈があるので、カワカミバヤシには二説があることになる。

①ハヤシを、「樹木の生えている所」から一歩進めて、「植林した所」とすると、カワカミバヤシとは、「側稜の尾根に近いところの植林地」となる。中世末～近世にかけて、果たして植林が行われていたかどうか。

②ハヤシはハヤ（急）・シ（接尾語）で、「急傾斜地」とする。カワカミバヤシとは、「側稜の尾根に近い急傾斜地」となる。素直な解釈といえようか。

しかし、全国地図には、このカワカミバヤシという、中・大字は無い。

【金洞】

キンボラ。

この小字は水晶山山系の側稜で尾根筋を県道田中・乱橋線が通っているが、その尾根の南側の山麓に近い所にある、小さな小字である。

キンボラとは何か。よくわからない地名の一つ。わからない、といってそのまま通過するわけにはいかないので、仮説を二つ提示したい。

①キン（金）←キビ（厳）。キビボラ→キンボラと音便転化したもの。ニ、ビ、ミ、リは撥音便になりやすいといわれている。キビは、形容詞キビシ（厳）の語幹で、山が嶮しいさまを表す。キンボラとは、「山がけわしい洞」を意味する。

②花崗岩地帯であるので、雲母がきらきらとして、金のように見えた。それは金ではないことを承知しながら、瑞祥地名として「金洞」とした。こうも考えられるのではないだろうか。

全国地図には、キンボラ地名は、なぜか一つも記載されていな。

【立畑】

タテバタ。

この小字は、水晶山系側稜を通る県道田中・乱橋線の尾根の南側斜面に、二ヵ所ある。

タテバタとは何か。二つの解釈を挙げる。

①タテは動詞タツ（立）の連用形が名詞化したもの。低地から斜面を仰げば、急傾斜地が立っているように見える、ことをいうのではないだろうか。ハタは動詞ハタク（叩）の語幹で、叩き落とされたような崩壊地を表す。合わせると、タテ

バタとは、「崩落のあった急傾斜地」を意味する。
②タテは①と同じで側稜の尾根から低地まで続く急傾斜地をいう。ハタ（畑）の方は、この地形からみて、焼畑としたい。タテバタとは、「焼畑が行われていたことのある急傾斜地」とする。
全国地図には、タテバタ地名はないが、「立畑」地名は２ヵ所にある。

「天白林・裏沢・唐沢・蛇石」

【天白林】
テンパクバヤシ。
この小字は水晶山系側稜の県道田中・乱橋線が通る尾根の南側斜面が低地に接するところにある。
天白信仰は東海地方から三遠南信に広がっている。天白神の性格は複雑であるが、上川路のテンパク小字では、その斜面上の位置から推して、風神とみた。この上川路のテンパクバヤシも洞は巽の方角に開いており、風神らしい様子を見せている。ただ川路にもあるテンパクや我が家の屋敷神である天白山神は水神の様相を示している。
テンパクバヤシ（天白林）とは何か。「天白神を祀っていた急傾斜地」としたい。なお、ハヤシ（林）は、ハヤ（急）・シ（接尾語）で、急傾斜地とした。
なお、全国地図の中には、タンパクバヤシ地名は無い。

【裏沢】
ウラサワ。
この小字は水晶山系側稜の尾根から南側に下る傾斜地にあって、南端は加羅沢川になっている。
ウラサワ（裏沢）とは何か。
ウラ（裏）はウラ（末）で、川の源流をいう。あるいは、この場合は川の源流になっている尾根といった方がいいかもしれない。サワ（沢）は、山間の湿地で水のある所。
ウラサワとは、「川の源流で水のあるところ」としたい。この小字の下流側半分は、現在、水田になっており、自然の湧水を利用している。
ここ度地理院の全国地図には、ウラサワという中・大字は１ヵ所、あるだけである。

【唐沢・馬沢唐沢】
カラサワ・マザワカラサワ。
これらの小字は、水晶山系稜線の尾根近くにあって、ウラサワ小字の上流部に位置する。マサワカラサワ小字は唐沢小字の更に上流部になる。
カラ（唐）はカラ（涸）で、水が乏しいこと。カラサワ（唐沢）とは、「水が乏しい沢」を意味する。
マザワカラサワとは何か。
マ（馬）はマ（真）の意をもつ接頭語で、マサワとは、「程度の甚だしい沢」を意味する。合わせて、マザワカラサワとは、「地形的には本来の沢にはなっているのだが、水が涸れている沢」を表す。
国土地理院の二、五万分の一地図には、中・大字として、カラサワ地名は５６ヵ所にあるが、マザワカラサワ小字は、当然ながら無い。

【蛇石・へび石】
ヘビイシ。
ヘビイシ小字は加羅沢川上流部で、水晶山系側稜の間の谷間にある。
国語大辞典には、蛇石の項に「蛇の形に似ている、中から蛇が出る、そこで蛇を祀る、蛇にかまれたときに祈る、などの伝承をもつ石」とある。しかし、ヘビイシ小字のある所は、これらの説明が生きてくるほどに、里に近い所ではない。
では、ヘビイシとは何か。難しいが、

これも二通りの解釈を挙げておきたい。
①「蛇がたくさんいる、石の多い土地」とするのが無難と思われるが、どうであろうか。
②ペグマタイト中にある雲母の塊を蛇石と呼んでいた。この雲母の塊を火中に投ずると、結晶の隙間に入っていた空気が膨張して、蛇のように延びる。

全国地図の中には、ヘビイシ中・大字は四ヵ所に記載がある。

「尺丈洞・百田・桜ヶ坪・猿つなぎ」

【尺丈洞】

シャクジョウボラ。

この小字は水晶山山系の加羅沢川上流部にあり、二つのヘビイシ小字に接する。

シャクジョウ（尺丈）は、シャクジョウ（錫杖）のこと。遊行僧が持ち歩く杖で、銅や鉄などで造られた頭部の輪形に環が、六個または十二個通してあり、音が出る仕組みになっている。このしゃくしゃくという音から錫杖の名がつけられたともいわれる。この音が山野遊行の際、禽獣や毒蛇の害から身を守る効果があり、托鉢のときに門前で来訪を知らせる意味もあるという。お地蔵様の持物でもある。

この小字の形が、錫杖に似ていることから名付けられたものと思われる。

シャクジョウボラ（尺丈洞）とは、「地形が錫杖に似た形をしている洞」を意味している。シャクジョウボラは、細くて鋭い谷となっている。

全国地図には、シャクジョウボラ地名の記載は無い。

【百田】

ヒャクダ。

この小字は水晶山系側稜の尾根にある。シャクジョウボラよりも上流で、里からは遠く、田圃などあろうはずがない。

ヒャクダとは何を意味しているのか。これも分かり難い地名である。

ヒャク（百）←ビャクと転化したもので、ビャクは関東地方や山梨県の方言で、「山崩れ」を意味するという（国語大辞典）。タは接尾語で、タ（処）だから、場所を示す。

ヒャクダ（百田）とは、「山崩れがあった場所」としたい。気になるのは日本方言辞典や長野県方言辞典には載っていいないということ。しかし、これ以外には考えようがないと思うがどうであろうか。

国土地理院の全国地図には、ヒャクダ地名は、中・大字として、２ヵ所に挙げられている。当てられている字も「百田」となっている。

【桜ヶ坪】

サクラガツボ。

この小字も水晶山系側稜の間にあり、ヒャクダ小字の尾根の北側の谷になる。

サクラガツボとは何を意味するのか。語源辞典によって、みていきたい。

サクは副詞ザクリの語幹であるザクと同じで、「山腹の崩れた所」の意。ラは場所を示す接尾語。ツボ（坪）は、動詞ツボム（窄）の語幹で、「深くえぐられた地形」をいう。

合わせると、サクラガツボとは「山腹の崩れた、深い谷間」を意味する。

全国地図には、サクラガツボ地名の記載はない。

【猿つなぎ】

サルツナギ

この小字は、水晶山山系の主稜の尾根近くにある。周辺には、「鎌取場」「鎌取場猿つなぎ」の小字が繋がっている。

サルツナギとは何か。文字通りに考えれば、複数の猿が手をつないでいる姿を想像するが、これだけでは地名にはなりにくい。そこで、やや無理気味であるが、二通りの解釈を掲げておきたい。
①サル（猿）は動詞サル（去）の連体形

で、土石が元の位置から離れていく状態を意味するか。ツナギはツナグ（繋）の連用形の名詞化したもの。サルツナギとは､｢崩壊地形が繋がっている所｣となる。②ツはノにあたる古い助詞。ツナギはツ（ノ）ナギ（薙)。サルツナギとは、「猿のいる薙ぎ」を意味する。

「鎌取場猿つなぎ」小字もあるので、①の方が適切と思われる。

「牛ころび・ヨキ峠・曲道・山伏塚」

【牛ころび】

ウシコロビ。

この小字は箱川との境で、水晶山系主稜線の二つの峯に接している。

ウシコロビは文字通りに解釈してもいいのではないだろうか。

コロビはコロブ（転）の連用形が名詞化したもので､「倒れる」の意。ウシコロビとは､｢牛が倒れるほどの急傾斜の坂道｣ということになる。

現在も、この尾根筋に添った山道があり、地名発生当時にも荷物運搬の手段として牛が利用されていたのであろうと思われる。

国土地理院の全国地図には、ウシコロビ地名は、記載がない。

【ヨキ峠】

ヨキトウゲ。

ここ小字は水晶山系の主稜線の一つの峰を含む、伊豆木側の急傾斜地にある。

ヨキトウゲとは何を意味するのか。ヨキは動詞ヨキル（過）の語幹で､「横に避けた地」を意味する（語源辞典）という。なお、今はヨギル（過）というが、古くはヨキルといったようだ。ヨキトウゲとは､｢大きな峰を避けるようにして迂回している山道｣としたい。高い峰を登り下りすると､体力を消耗するし､時間もかかる｡それに急傾斜地は転倒しやすい。こうした事態を避けるために､峰を避ける尾根道が、今でもヨキトウゲ付近を通っている。

全国地図には、なぜか、ヨキトウゲ地名は載っていない。

【曲道】

マガリミチ。

この小字も水晶山系主稜線に接しており､伊豆木から箱川に抜ける峠路にある。

マガリミチも文字通りの理解が正しいと思われる。即ち、マガリは動詞マガル（曲)の連用形が名詞化したもので､｢川、山裾、道路などの曲がった地形｣（語源辞典）をいう。

マガリミチ（曲道）とは、「ほぼ等高線に沿って曲がっている山道」とういことになる。

この地名も、どこにあっても不思議ではないが、なぜか二、五万分の一の全国地図には記載がない。あまりにも当然すぎるので、地名には敬遠されたか。

【山伏塚】

ヤマブシヅカ。

この小字は水晶山系主稜線を箱川に越える峠の近くにある。

山伏塚は山伏を葬ったという伝説のある塚で、竜丘の山伏塚のように、その形が無くなっても地名として残っている場合も多い。

山伏塚には、山伏が自ら塚に入って死ぬ入定塚、刑死した山伏の塚、それに病死や遭難等で死んだとされる塚があるが、ここ伊豆木の山伏塚は、峠路に近いという周辺の地理的状況から、病死か遭難死であったろうと思われる。いずれも、死後に祟ったとする点では一致しており、御霊信仰にもとづいて山伏塚が築かれたものと思われる。

山伏の霊魂は、一般人のそれよりも強力だから、塚を築いて祀ることで御霊を

鎮め、かえって現世利益をもたらす神に転じようとしてところから、山伏塚が広まっていったのであろうという（以上は民俗大辞典）。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、ヤマブシヅカ地名は記載されていない。小字にはたくさんあるのに、中・大字にまで広げることがなかったということは、どうしてであろうか。

「鎌取場・滝ヶ洞・茶臼山・狢洞」

【鎌取場・鎌取場猿つなぎ】

カマトリバ・カマトリバサルツナギ。

これらの小字は、サルツナギ小字とともに、水晶山系主稜線の近くの広い範囲にほぼ固まっている。

カマトリバとは何を意味するのか。

カマトリバ←カマトギバで、鎌研場とするには躊躇がある。あまりにもこの小字は大きすぎる。

カマトリバ←カミトリバと転化したと考える。カミトリバ（噛み取り場）である。動詞カミトルの連用形が名詞化したもので、「えぐり取られたような地形」を意味する。合わせて、カマトリバ（鎌取場）とは、「えぐり取られたような地形の所」となる。

カマトリバサルツナギ（鎌取場猿つなぎ）が意味するのは、「えぐり取られたような崩壊地形が繋がっている所」である。

二、五万分の一全国地図には、これらの小字は記載されていない。

【滝ヶ洞】

タキガホラ。

この小字は水晶山系主稜線に接しており、立石との境にある。

タキ（滝）は、一般的には、「急な斜面を激しい勢いで下っている水の流れ」（国大辞典）であるが、ここでは、尾根に近いから水流はほとんど無い。そこで、岐阜の方言に準じて「側稜と側稜の間の洞」としたい。

タキガホラとは、「側稜と側稜の間の洞」であろう。ホラの代わりに、「行き詰まりの谷」としてもいい。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、タギガボラ地名が１ヵ所あり「滝ヶ洞」の字を宛てている。タキガホラ地名は記載が無い。

【茶臼山】

チャウスヤマ。

この小字は水晶山系の側稜の尾根の末端にある。上流側にはサルツナギ小字群がある。

茶臼というのは、葉茶をひいて抹茶にする時に使う石臼のことである。

茶臼の付く山はかなりの数になる。全国地図には、チャウスヤマ地名の中・大字が四八ヵ所もある。近くでも、赤石山脈の茶臼岳、三河境の茶臼山などがある。いずれも、どっしりとした感じの山である。

この伊豆木の茶臼山は、側稜の尾根の末端だから、どっしりした感じはない所に不安があるので、二通りの解釈を示しておきたい。

①半分は茶臼の形に見えるので、チャウスヤマとは、「茶臼の形をした尾根のあるところ」とする。

②チャウス←ツブス（潰）の連体形か。関東南部の方言にチャブス＝ツブスがある。チャウスヤマとは、少し無理もあるが、「潰したような崩壊地のある山」とならないだろうか。

【狢洞・むじなほら】

ムジナガホラ・ムジナホラ。

これらの小字も、水晶山系側稜がつくる谷間にある。一つは崩落堆積地で水田が多く、もう一つは急傾斜地の谷になっ

ている。
　これらも解釈は二通り。
①文字通り、「アナグマかタヌキが生息している洞」をいう。ムジナはアナグマの異称であり、タヌキの誤称であるという。
②ムジナはムシ・ナ（接尾語）。ムシは動詞ムシル（毟）の語幹で、崩壊地のこと。ムジナホラとは、「崩壊地のある洞」。
　全国地図には、ムジナホラ地名もムジナガホラ地名も記載は無い。

「風原・半ノ田・高越・中溝口・堂城」

【風原】
　カザハラ。
　この小字は立石境の伊豆木側にあり、水晶山系側稜の間の洞にある。この洞は南東←北西方向に開けている。
　カザハラとは、「風の強いところ」の意と思われる。その風の向きは巽の風であろう。巽の風は、この地域では強風として怖れられている。
　しかし、この急傾斜地で、風にはどんな役割があったのだろうか。おそらくは、焼畑が行われていたのではないだろうか。焼畑には強風は避けなければならないが、風はあった方がよかったに違いない。カザハラの語感には、防がなければならないような風を感じることはない。
　国土地理院の全国地図には、中・大字としてカザハラ地名は１ヵ所挙げられている。

【半ノ田】
　ハンノタ。
　この小字は道路を挟んで、妙正寺の反対側の一段と高い所にある。カザハラ傾斜地の下側になる。
　ハンノ（半ノ）←ナンノウ（半納）と転化したもので、「災害その他により年貢が半減され、これが恒久化した土地」（語源辞典）ではないだろうか。
　ハンノタ（半ノ田）とは、「土砂崩落によって、年貢が半減されそれが恒久化した耕作地」となる。今でも耕作されていない傾斜地も広く、納得できる解釈と思える。
　国土地理院の二、五万分の一地図には、ハンノタ地名は一件も記載が無い。

【高越】
　タカコシ。
　この小字は水晶山系側稜の最終末端部の二ヵ所にあり、一部には住宅跡がある。
　タカコシとは何か。語源辞典を参考にみていきたい。
　タカは形容詞タカシ（高）の語幹で「高い所」をいう。コシ（越）はコス（漉）の連用形の名詞化したもので「水の湧き出る所」を意味する。
　以上から、タカコシ（高越）とは、「高い所にあるが、水が湧き出る所」とする。
　全国地図には、タカコシ地名は、中・大字として、１件の記載がある。

【中溝口】
　ナカミゾグチ。
　この小字は南伊豆木八幡宮の西側の洞にある。
　ナカミゾグチ（中溝口）とは何か。
ミゾ（溝）は、「細長く流れる川」をいい、クチ（口）はクチル（朽）の連用形の名詞化で「湿地」または「崩壊地」を表す（語源辞典）。
　すなわち、ナカミゾグチとは、「加羅沢川の細い流れのある洞の中頃にある湿地」を意味するものと思われる。
　なお、全国地図には、ナカミゾグチ地名は無い。

【堂城】
　ドウジョウ。
　この小字は加羅沢川の大きな洞のなかにある。
　ドウジョウ（堂城）とは何を意味するのか。仮説を二つ挙げておきたい。

①「村堂＝惣堂のあった所」ではなかったか。立石境に近い、この地に南伊豆木の惣堂があっても不思議ではない。現在は第八組合センターがある。
②ドウ←タフス（倒）で「傾斜地」のこと。ジョウ＝デフで「～になった所」で「傾斜地になっている所」を意味する。
全国地図には、ドウジョウ地名は３１ヵ所の中・大字がある。

「戸井田・打越・八百目・社久地」

【戸井田】

トイダ。

この小字はドウジョウ小字の上流部で、水晶山系側稜がつくる洞の末端部にある。

トイダとは何か。

トイ（戸井）＝トヒ（樋）で、水路のこと。古くは人工のものに限らず水の流れる所をいったという。加羅沢川の支流である。ダ（田）は耕作地または田圃のこと。

トイダ（戸井田）とは、「水路のある耕作地」を意味する。

国土地理院の二、五万分の一地図には、中・大字として、トイダ地名は７ヵ所に記載されている。

【打越】

ウチコシ。

この小字は、立石との境界にあり、ハンノダ・トイダ・ドウジョウ小字の下流部にあり、小字内には妙正寺がある。

ウチコシ（打越）とは、何を意味するのか。語源辞典類によりながら、解釈を二つ挙げておきたい。
①「打越」←「境打越」と転化した。境打越とは、「中世、所領の境界を越えて横領したこと」をいう。伊豆木の立石境にあり、境界争のあった所か。
②ウチは動詞ウツ（打）の連用形が名詞化したもので、「切り取られたような地形」をいう。コシ（越）はコス（漉）の連用形で、「水が湧き出る所」である。ウチコシとは、「崩壊地もある湿地もある所」を意味する。

国土地理院の全国地図をみると、ウチコシ地名は、中・大字として５５ヵ所も記載されている。「打越」地名だと７９ヵ所にも及ぶ。中世の境界紛争が多かったということを意味しているのであろうか。

【八百目】

ハッピャクメ。

この小字も立石境に接し、北側はウチコシ小字になっている。現在は一軒の住宅と大部分が荒地となっている小字である。

八百目とは、八百匁のことと思われる。目＝匁で、近世における銀貨の量目の単位であるという。一匁＝三、七五グラムである。

八百目とは、年貢か収穫量の銀換算値かと思われるが、この小字に当てはまりそうにない。

ここは立石境で、ウチコシ小字は境界紛争を想定しての解釈をした。同じように、八百目についても境界の係争があって、その解決に関わった費用と土地ではなかったか。やや勇み足か。

八百目は、小字のスケールであるためか、全国地図にハッピャクメ地名の記載はない。

【社久地】

シャグチ。

この小字も立石に境を接している。イチノツボ小字を挟んで二ヵ所にある。

シャグチとは何を意味するのか。ここでも、語源辞典に添って二説を掲げる。
①シャグ（社久）←ジャクで、崩壊地をいう。チ（地）は場所を表す接尾語。合わせると。シャグチとは、「崩壊地のあっ

た所」をいう。現在は安定しているようにみえるが、地名発生時には、崩れた所もあったのだろう。
②シャ（社）←動詞シャル（曝）の語幹で、崩壊地を意味する。クチ（久地）は、街道の出発点をいう。県道親田・中村線と県道田中・乱橋線をつなぐ道が、ここから出ている。
　全国地図にはシャグチ地名は記載が無い。

「清水・文平垣外・腰前・一の坪」

【清水】
　シミズ。
　この小字は、県道親田・中村線と県道田中・乱橋線をつなぐ道路の脇にある。
　シミズ（清水）とは、文字通りで、「飲料水の湧き出ている所」であろう。
　飲料水の補給地がここにあるということは、この県道親田・中村線から県道田中・乱橋線に向かう道路を利用する旅人が多かったことを意味する。
　伊豆木には、他に清水坂があり、下瀬にも一ヵ所、立石には三ヵ所も、シミズ小字がある。
　国土地理院の二､五万分の一地図にも、中・大字として、シミズ地名が２３６ヵ所も記載されている。「清水」地名となると２８１ヵ所に達する。清水を利用したのは、旅人だけではなく、土地の人達も日常の生活で利用していたのであろう。

【文平垣外】
　ブンペイガイト。
　この小字は加羅沢川が開いた大きな洞の中にある。周辺にはドウジョウ・ウチコシ･シミズ･コシマエの小字があって、これらに囲まれている。
　ブンペイガイト（文平垣外）とは、文平さんの屋敷もあって、その周辺には彼が耕作する土地もあった、それを含めていうのではないかと思われる。
　文平も作手で、文平垣外も百姓名だったのであろう。
　当然のことながら、全国地図には、この地名は載ってはいない。

【腰前】
　コシマエ。
　この小字は県道親田・中村線の北側にあって、中を加羅沢川が流れている。周りには、ドウジョウ・ブンペイガイト・ベッショなどの小字がある。
　コシ（越）には二通りの解釈がある。
①コシ（腰）で、水晶山系側稜の「麓」をいう。
②動詞コス（漉）の連用形が名詞化したもので、「水が湧き出る湿地」とする。
　マエ（前）は、前は何の前なのかがはっきりしない。語源辞典によれば、「とくに神社、仏閣の前方」だという。南伊豆木八幡宮は、地名発生時にはなかったはずであるが、八幡宮が遷座してくる前に別宮か別院があった可能性もある。マエとは、その別宮か別院のことかもしれない。あるいはドウジョウもマエと考えられないこともない。
　国土地理院の全国地図には、コシマエ地名は３ヵ所に載っているが、「腰前」地名は一ヵ所もない。

【一の坪】
　イチノツボ。
　この小字は県道親田・中村線が加羅沢川と交差する付近にある。周辺の小字には、シャグチ・コシマエ・ベッソ・ヒロタなどである。
　「一の坪」とあれば、躊躇しながらも、条里制のなごりと考えざるをえない。坪とは、条と里によって仕切られた方六町の区画の各辺を六等分して仕切った区画をいう（国語大辞典）。３６等分したそのおのおのに数字をかぶせて､「一の坪」｢二の坪」～「３６の坪」としたらしい。そ

の「一の坪」だけが小字名として残ったということであろうか。

他には考えにくい地名である。

国土地理院の二、五万分の一全国地図には、中・大字として２０件の記載がある。一町歩の面積でも中・大字として残るというのは、「一の坪」に瑞祥を見ているためではないだろうか。だから残したいという思いがつよかったのだろう。

「広田・石坪・別所・別曽」

【広田】

ヒロタ。

この小字はイチノツボ小字の南側にあって、立石境に接し、県道親田・中村線の東側にある。

ヒロタといえば、広い田んぼということになるが、この小字は広くはない。

ヒロ（広）←ヒラ（平）と転化したもので、ヒロは緩傾斜地を意味する。タ（田）は耕作地のこと。つなげると、ヒロタ（広田）とは、「緩く傾斜している耕作地」を意味する。

国土地理院の二、五万分の一全国地図には、ヒロタという中・大字は２５ヵ所に記載されている。

【石坪】

イシツボ。

この小字は加羅沢川が削った低地になっていて、右岸は水田になっている。

ツボ（坪）は動詞ツボム（窄）の語幹で、「つぼんだ地形」「深くえぐられた地形」をいう。イシ（石）は「石の多いところ」である。

以上から、イシツボとは、「深くえぐられて石の多い所」を意味するか。

国土地理院の全国地図には、イシツボ地名は載っていなし。

【別所・別所腰前】

ベッショ・ベッショコシマエ。

ベッショ小字は二ヵ所にあり、その間にベッショコシマエ小字がある。ベッショ小字の一つは現在、南伊豆木八幡宮の鎮座するところで、もう一つのベッショ小字は、その南の方にある。

近くにある同名の小字だから、意味する所も同一と考えていい。ベッショとは何を意味するのか。二つの考え方を挙げておきたい。

①ベッショは「古代、蝦夷の虜囚を各地に移住させた所」で、古代の輔衆郷で鍛冶も行われていたとする研究者もいる。ベッショ小字から鉄滓が出ていることから、いつの時代か、はっきりしないが、ここで鍛冶が行われていたことは確かであろう。そこでベッショとは「かって鍛冶が行われていた所」とするが、ベッショとう語と鍛冶の繋がりがはっきりしないのが難点。

②ベッショとは「寺院の別院か神社の別宮があったところ」をいう。現在の南伊豆木八幡宮が遷座してくる前のことか。

ベッショコシマエ（別所腰前）は、「寺院か神社の前の方」を意味する。この小字が近くにあるので、ベッショは②である可能性が強い。しかしそれは地名発生時のことで、それ以前に鍛冶が行われていた可能性はある。そのころ、ベッショと呼んでいたのかどうか。

国土地理院の二、五万分の一地図には、ベッショ地名は、中・大字として１１６ヵ所にものぼる。「別所」地名はさらに１２５ヵ所にもなる。

【別曽・別曽原】

ベッソ・ベッソハラ。

これらの小字は、県道親田・中村線の南東側の斜面にある。ベッソ小字は一ヵ所、ボッソハラ小字は二ヵ所になる。斜面の傾きは南西方向であったり、北西方向であったりする。

ベッソ・ベッソハラは、ベッショと同様で鍛冶地名といわれている。鉄滓が出たとなれば、それは確かと思われる。

しかし、別の解も示したい。ベツ←ヘツ←動詞ヘツル（剥）の語幹で「斜面」のこと。ソ（曽）はソ（岨）「でけわしい所」。ベッソとは、「斜面で嶮しい所」。

全国地図には、ベッソ地名は３ヵ所が中・大字として挙げられている。

「君崎・法界・小原・愛宕脇・包丁畑」

【君崎】

キミサキ。

この小字は、アタゴワキ小字の一部に食い込んでいる形になっている。付近は緩い傾斜地になっていて、南側には土砂が流されたような浅い谷がある。

キミサキとは何を意味しているのか。これも分かりにくい地名。キミ（君）←キビ←ヒビ（輝）が転化したもので、「割れ目。小さな谷」を意味する（語源辞典）。サキ（崎）＝サキ（先）で「端っこ」のこと。

合わせて、キミサキとは、「小さな谷の端っこ」を意味するか。

国土地理院の全国地図には、キミサキ地名は一つも無い。

【法界・法界畑】

ホウカイ・ホウカイバタ。

これらの小字は、県道親田・中村線と県道田中・乱橋線に向かう道との交差点付近にある。柳桜のある交差点である。

ホウカイ（法界）とは何か。「崩壊」を思わせる地形にはなっていない。

ホウ←ホ（秀）が長音化したもので、「高くなった所」をいう。カイ（界）は、カヒ（交）で、「道路の交差点」と考えたい。合わせて、ホウカイとは、「道路の交差点の近くで高い所のある場所」としたいが、どうであろうか。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、ホウカイ地名は１ヵ所にある。

【小原】

コハラ。

この小字は、南伊豆木八幡宮と柳桜交差点の間にある、かなり広い小字で、ほとんどが桑園になっている。

コハラ（小原）とは何か。

コ（小）は、ほとんど意味を持たない接頭語か。ハラはハラ（開）で、「開墾地」を意味する。

コハラとは、「開墾地」ということになるが、南伊豆木八幡宮の近くにあるので、「神聖な地」という意味も含まれているかもしれない。とすると、コハラとは、「神聖な地でもある開墾地」とうことになろうか。

国土地理院の二、五万分の一地図には、中・大字として、１１件が挙げられている。

【愛宕脇】

アタゴワキ。

この小字は「大明神原」小字の西隣にあって、現在は果樹と桑園になっている緩傾斜地にある。

アタゴワキを文字通り解釈すれば、「愛宕様の傍ら」となる。傍らにあるのは「大明神原」だから、この諏訪社のあった大明神原に愛宕様も祀られていたものと思われる。

愛宕様はお地蔵様を本尊としており、日本古来の信仰である塞の神信仰と同様の性格を持つといわれている。立石境が近いとはいえ、まだかなりの距離があるので、塞の神とかかわるかどうかは疑問。

全国地図にはアタゴワキ地名も無い。

【包丁畑】

ホウチョウバタ。

この小字は、県道親田・中村線の南東側の急傾斜地にある。現在は一部が果樹

園になっているが、畑地ではない。
　ホウチョウバタとは何か。ホウ（包）は動詞ホホム（含）の語幹で「包み込まれたような地形」をいう。チョウ（丁）は方言であるチャブス（潰）の連用形チャブが名詞化したものか。ホウチョウバタとは、「段丘の縁で包み込まれたような地形で崖のある所」となる。
　全国地図には、この地名は無い。

「元清左ヱ衛門畑・洗井原・新井田・堤入」

【元清左ヱ門畑】
　モトセイザエモンバタ。
　この小字があるのは、三穂の地域センターや三穂保育園がある丘陵である。広い小字であり、果樹園と桑園もあるが、荒地もかなりの面積になる。
　「モト（元）」が枕につくのは珍しい。地名発生時には、この畑は、清左ヱ衛門の手を離れていたということであろう。
　清左ヱ衛門がどんな人であったかは、全くわからない。
　全国地図には、もちろん、このモトセイザエモン地名は無い。

【洗井原】
　アライバラ。
　この小字は社古寺川が林沢川を合流させて流れる流路の南側に広がる。現在は整地されて、ほとんどが水田になっている。
　ハラ（原）は、ハラ（開）で、「開墾地」をいう。アライ（洗井）には二通りの解釈がある。
①アラ（荒）・ヰで、「荒れる川」をいう。これだと、アライバラは「荒れた川が流れる開墾地」となる。
②アラ（粗）・ヰで、「崖になっている川」となり、アライバラは、「崖のある川がながれている開墾地」となる。少し回りくどいか。

【新井田】
　アライダ。
　社古寺川はアライバラ（洗井原）小字で林沢川を合流させ、さらに、このアライダ小字で支流を合流させている。この支流は直線的な流路になっていて、いつの時代からか、開発を受けている様子が見て取れる。
　アライ（新井）は「新しい川筋」をいう（語源辞典）。アライダ（新井田）とは、「川筋が新しくなった水田地帯」ということになる。
　アライを「荒井」（暴れ川）としたり、アラ（粗）・ヰ（井）で「崖になっている川」と解することもできるが、ここでは採らない。
　国土地理院の二、五万分の一地図には、中・大字として、アライダ地名は一件だけだが、「新井田」地名は１３件となっている。ニイダという呼び方が多いからである。

【堤入】
　ツツミイリ。
　この小字は、県道親田・中村線の西側にあり、現在は水田になっている。
　ツツミ（堤）とは、「水があふれぬように包む土手とか堤防」のことであるが、水田であれば、畦がその役割を果たしている。この畦が、果たして地名になるだろうか。
　ツツミ（堤）には、もう一つの意味がある。それは、「溜め池とか沼」をいう。しかし、このツツミイリ小字には、現在、溜め池も沼も無い。溜め池を築くには、余りにも低地にすぎる。この小字の中をいまは弟川の支流が流れている。
　そこで、こんなことを想定してみた。
　かって、地名が発生した頃、ここに自然の水深の浅い、比較的大きな沼があっ

た。この沼の中を弟川の支流が流れていた。この沼への入口が、ツツミイリ小字にあったのではないか。ここから北の方、弟川の上流には、広い面積をもつオオヌマ（大沼）小字もある。

ツツミイリとは、「沼へ支流が流れ込む口」ということになるが、どうであろうか。

全国地図には、ツツミイリとう地名は無い。

「鳥平・割掛・塚垣外・石原田」

【鳥平】

トリダイラ。

この小字は、三穂地域センターの東側の一つ谷を越えた丘陵にある。コウスケボラ（幸助洞）小字を割るように入り込んでいる。現在は、主に果樹園と桑園になっている。

トリダイラとは何を意味するのか。

ダイラ（平）は、「山の中腹から麓のあたり」で、その通りの位置になっている。トリ（鳥）には三通りの解釈がある。

①トル（取）の連用形で、「切り取られたような地形」をいう。この小字の南部の中央部の谷が深く、切り取られたような浸食地形になっている。

②トリ←トロと転化したもので、トロトロという副詞から、「湿地」を意味する。

③同様に、トリ←トロと転化したもので、形容詞トロシ（鈍）の語幹から、「緩傾斜地」をいう。（以上は語源辞典による）。

トリダイラ小字の、どの部分に注目するかによって、解釈は異なってくるが、面積の最も広い部分についての命名であれば、③ということになる。

すなわち、トリダイラ（鳥平）とは、「丘陵の中腹から麓にかけての緩い傾斜地」を意味している、とうことになる。

国土地理院の全国地図には、なぜか、トリダイラ地名の記載は無い。

【割掛】

ワリカケ。

この小字は、弟川に近い低地にある。

ワリカケとは何か。

ワリガケ（割掛）は、分割、配分することであるが、何のための分割だろうか。江戸時代には割地という制度があったらしい。国語大辞典によれば、「一村の農地を耕作者の数に区分して割り当て、一定期間各自に耕作させ、満期の後に分割しなおすこと」だという。貢租の負担や地味の良否を平均化するために行われた制度で、川欠地など生産力の不安定なところで行われたらしいが、ワリカケ小字は、この割地を行った名残と思われるが、どうであろうか。

やや不思議な感じもするが、このワリカケ地名も、国土地理院の全国地図には記載が無い。

【塚垣外】

ツカガイト。

この小字は、社古寺川が開いた谷の中にある微高地である。周辺は、アライダ（新井田）小字の水田地帯になっている。

ツカガイト（塚垣外）とは、「土が少し盛り上がって高くなっている住居跡」であろう。伊那谷南部でツカといえば、古墳ということになるが、ここには無かったものと思われる。

国土地理院の二、五万分の一地図には、ツカガイト地名は一件も記載されてはいない。

【石原田】

イシハラダ。

この小字は、県道親田・中村線と弟川を挟んで二ヵ所にある。広い方の東側のイシハラダ小字は、水田になっている。もう一つの西の方にある小さな小字は、社古寺川が作った洞の中にある微高地で、

ツカガイト小字の下流側にあり、果樹園と住宅地になっている。

イシハラダ（石原田）とは、「小石のたくさんある、ごつごつした平地」を意味する。ダ（田）は、場所を示す接尾語。水田になっている所も、かっては石の多い河原だったと思われる。

二、五万分の一の全国地図には、イシハラダ地名が、中・大字として４ヵ所、記載されている。

「青木・娘田・川坂・牛ヶ洞」

【青木】

アオキ。

この小字は、社古寺川の開析した氾濫原にあり、微高地になっている。「塚垣外」「石原田」小字の下流側にある。

アオキ（青木）とは何か。

アオ←アフグ（仰）と転化して、傾斜地とする考え方もあるが、現地の傾斜角度が小さいので、ここでは取り上げ難い。

アオ←アワ（泡、沫）と転化したもので、「湿地」を意味する。キ（木）は、キ（処）で場所を表す接尾語と考える。合わせて、アオキとは、「湿地」をいう。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、アオキ地名が７９ヵ所と、多くの所で採り上げられている。

【娘田】

ムスメダ。

この小字は、弟川右岸の氾濫原に広がる広い小字である。現在は、ほとんどが水田になっている。

ムスメダが何を意味するのか、非常に難しいが、無理ながらも、国語大辞典に従いながら、一つの解釈だけ挙げておきたい。

ムス←ムシ←ムス（蒸）の連用形で、「湿気があって暑さがこもるように感じられること」。メは接尾語で、「形容詞の語幹、動詞の連用形などに付いて、そのような度合、加減、性質、傾向の意味を添える」。

ムスメダ（娘田）とは、ムシメダが転化したもので、「むしむしとした感じが強い湿地帯にある水田」と考えるが、どうであろうか。

国土地理院の全国地図には、ムスメダ地名は、一件も記載されていない。

【川坂】

カワザカ。

この小字は、弟川右岸にあって、弟川と県道親田・中村線の間にある。

カワザカ（川坂）とは、普通に考えれば、「川が流れ、傾斜して勾配のある所」となるが、川が流れておれば、勾配はあるはずで、あまりにも当たり前にすぎるのではないか、とう気がする。

そこで、もう一つの解釈を挙げておきたい。

サカをサカ（逆）とする。つまり「川の流れが逆巻くこと」を意味する。カワザカ小字付近は、氾濫原の幅が広くて、勾配が緩くなっている。その下流は狭窄部になっているので、かっては、水量が多いときに逆巻いたこともあったかもしれない。そこで、カワザカ（川坂）とは、「逆流することもあった川のあるところ」と解するのはどうであろうか。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、カワザカ地名は四件、「川坂」地名は六件の記載がある。

【牛ヶ洞】

ウシガホラ。

この小字は、川路境にあり、コボラ小字とフジヤマ小字に挟まれている。

ウシガホラは、牛牧場でもあれば別だが、動物の牛とは関係があるとは思えない。それではウシガホラとは、何を意味するのであろうか。

仮説を二つ提示したい。
①ウシ（牛）←ウチ（内）と転化したもので、山谷の小平地をいう。ウシガホラとは、「山の中の小さな平坦地のある洞」である。
②ウシ（牛）←フチ（縁）で、伊豆木の周辺部をいう。ウシガホラとは、「伊豆木の周辺部にある洞」となる。
全国地図には、中・大字として、ウシガホラ地名が１ヵ所に記載されている。

「大洞口・高本・鍛冶屋・庚申塚・高松」

【大洞口】
オオホラグチ。
この小字は、弟川氾濫原とジュウオウドウ（十王堂）小字の間にある。工場予定地の大きな道が北辺をかすめている。
オオホラグチとは、文字通り、「大きな洞の出入口」になっている。オオヌマ（大沼）小字の氾濫原に開口している形になっている。
国土地理院の二、五万分の一の全国地図には、中・大字として、オオホラグチは一件もないが、オオボラグチ（大洞口）地名は１件だけ記載されている。

【高本】
タカモト。
この小字も、弟川氾濫原とジュウオウドウ小字丘陵の間にある。
タカモト（高本）とは、「ジュウオウドウ（十王堂）小字にある川路境にある高い山の麓」を意味する。
全国地図には、中・大字として、タカモト地名は３件、「高本」地名は５件記載されている。コウモトという呼び名が入って多くなっている。

【鍛冶屋】
カジヤ。
この小字は、高松峠を経て川路に通じる街道に添った北側にある。
カジヤ（鍛冶屋）とは、字面通りで、「鍛冶屋さんが住んでいた所」としたい。しかし気になることもあるので、もう一つの解釈を挙げておきたい。気になることというのは、この小字には崩壊地が見えているからである。以下、語源辞典によって見ていきたい。
カジヤ（鍛冶屋）とは、カジ・ヤとする。カジは動詞カジル（囓、掻）で、「引っ掻かれたような地形」をいう。ヤはヤツ（菟）の一字音化で「小さな谷地形」をさす。合わせて、カジヤとは、「崖のある小さな谷」という解もあり得る。
国土地理院の二、五万分の一地図には、中・大字として、カジヤ地名は８２ヵ所にもなる。

【庚申塚】
コウシンヅカ。
この小字は、高松峠より南の方にあり、川路境に添っている。
この小字の中に庚申塚があり、そこには「庚申供養石塔」が一基、建てられている。
庚申講の祭神は、仏教では青面金剛、神道では猿田彦だといわれているが、蚕神、作神、治病神などの神も祀られていることがある。一般に庚申信仰が拡大したのは室町時代中期以降で、月待・日待の習俗と結合して仏教的な庚申待に転化して庚申塔の造立も見られるようになった。近世に入ってからは、神道による独自の展開をみせ全国に拡大していったという（民俗大辞典）。
国土地理院の全国地図には、コウシンヅカ地名は、中・大字として、３ヵ所記載されている。「庚申塚」地名は４ヵ所になっているのは、コウシンツカという呼び名が入るからである。

【高松】
タカマツ。

この小字は、川路境の丘陵地帯にある、大きな小字で、前の高松峠を通る旧道が残っているところもある。

タカマツ地名は、全国にも多く、二、五万分の一地図には６９ヵ所も記載されている。瑞祥地名とみなされているためと思われる。

タカマツとは、「丈の高い松のある所」の意であるが、タカマ（高間）・ツ（場所の接尾語）で、「高い所」も捨てがたい。

「川路坂・飼付洞・姥田・山神洞」

【川路坂】

カワジザカ。

この小字は、川路境の丘陵にあるが、境からは離れたところにある。

カワジザカとは、「川路へ至る登り坂の道」である。川路にある坂道ではない。川路坂は竜峡中学の南側を通って国道一五一号線に出る道にある。

全国地図には、当然のことながら、カワジザカ地名は無い。

【飼付洞】

カイツケガホラ。

この小字は、川路境に延びる広い小字である。この付近丘陵地では最も標高が高く、傾斜も緩くなっている。現在も果樹園と桑園が多い。

カイツケガホラとは何を意味するのか。

以下、語源辞典に添ってみていきたい。カイ（飼）はカイ（開）で、開墾地をいう。ツケ（付）は、動詞ツク（付）の連用形で「あるものの傍」をいう。

合わせると、カイツケガホラ（飼付洞）とは、「開墾地の傍にある洞」ということになる。

可能性は少ないが、もう一つの考え方も挙げておきたい。カイツケとは、「鳥などを飼い慣らすこと」である。カイツケガホラとは、「小鳥を捕らえて飼い慣らした洞」であったかもしれない。

全国地図には、カイツケガホラ地名は一件の記載も無い。

【姥田】

ウバダ。

この小字は、川路境の丘陵地帯にある。西の氾濫原にはムスメダ（娘田）小字があり、対称的な意味があるのかもしれない。あるいは、後になって対称的な漢字に転化していることも考えられる。この小字は傾斜地にあり、現在でも田圃は無い。

ウバタとは何か。考え方は二つ。以下は語源辞典による。

①ウバ（姥）は動詞ウバフ（奪）の連体形ウバヒから転化したもので、「「崩壊地形」をいう。タ（田）は場所を表す接尾語。以上から、ウバタとは、「崩壊地のある所」をいう。

②ウバ（姥）←ウハ（上）の濁音化したもので、「高い所」を意味する。ウバタとは、「高い丘陵地」をいう。

国土地理院の二、五万分の一地図には、中・大字としてウバタ地名は１ヵ所、「姥田」地名は３ヵ所に載っている。後者が多いのは、ウバダ地名の存在による。

【山神洞】

ヤマノカミホラ。

この小字も、川路境と弟川氾濫原に挟まれた傾斜地にある。

ヤマノカミホラ（山神洞）とは、「山の神がおわすと信じられている場所」をいう。もしかしたら、山の神の祠があったり、大山祇神の石碑があるかもしれない。

山の神は、山に宿り、山林並びにそこに棲息する生物を領有すると信じられた神霊の総称。神道では大山祇神とその娘木花開耶姫をあてて、山神社、大山祇神社の名で祭祀しているが、一般では山の神の名で小祠・磐座・大木または特徴の

ある樹木を依代としてまつっているほか、幣帛または常盤木をもって山中の随所で祀る。山の神は祖先神・田の神と同一視される。農民が信仰する山の神は、春に山から里に下って田の神となり、秋の収穫がすむと山に帰って山の神となる。(以上は民俗大辞典)

国土地理院の二、五万分の一の全国地図には、中・大字として、７０ヵ所に記載されている。

「呑破・大平又田・下田・重り岩」

【呑破・呑破飛田】

ノミヤブリ・ノミヤブリトビタ。

これらの小字は、弟川左岸の氾濫原から川路境の丘陵の斜面にある。傾斜地には「呑破」小字が、その下の氾濫原には「呑破飛田」小字がある。これらの小字の上流部は砧峠になっている。もう一ヵ所ノミヤブリ小字があるが、これは、先の小字の弟川下流側にあり、氾濫原と川路境の丘陵地までを含めた広い範囲になっている。

ノミヤブリとかノミヤブリトビタとは何を意味するのか。

ノミ（呑）は、ノビ（延）の転化したもので、「長く延びた地形」を意味する（語源辞典）という。ここで長く延びているのは川路境の丘陵の尾根に達する谷のことであろう。

今は比較的安定しているように見えるこれらの谷であるが、かって土石流が発生した谷であると思われる。それが小字名として残っているのではないだろうか。土石流が弟川左岸の氾濫原に押し出して、ノミヤブリトビタ小字になった可能性が高い。この「飛田」小字は、広い弟川左岸の氾濫原のなかで、今でもここだけが水田にはなっていないことからも、土石流の押し出した所であることを示唆していると思われる。もう一ヵ所、南側のノミヤブリ小字も、今でもなお、荒地となっている所がある。

ノミヤブリとは、「かって土石流が発生して長く延びたような地形になった谷」をいい、ノミヤブリトビタは、「土石流が押し出した所」という。タ（田）は水田ではなく、場所を表す接尾語であろう。

国土地理院の全国地図には、ノミヤブリ地名もノミヤブリトビタ地名も載っていない。

【大平又田】

オオヒラマタダ。

この小字は、弟川左岸の氾濫原から、川路境の丘陵地の尾根にまたがる小字である。ノミヤブリの下流側にあって、現在、大部分は水田であるが、一部は荒地となっている。

オオヒラマタダ(大平又田)とは何か。

オオ（大）は美称であろう。ヒラ（平）は傾斜地のこと。マタ（又）は谷が合流していることをいうのではないだろうか。タ（田）は場所を表す接尾語。

以上を繋ぐと、オオヒラマタダは、「傾斜地になっていて、谷が合流している所」になる。こうした小字名が生まれるということは、ここにも土石流があったのかもしれない。

全国地図には、オオヒラマタダ地名は記載がない。

【下田】

シモダ。

この小字は、二ヵ所にあり、川路境の丘陵の尾根から、弟川と県道親田・中村線の低地まで広がっている。ここは弟川の狭窄部で、氾濫原にも水田はなく、荒地になっている。

シモダとは、「下の方にある場所」であろうか。下の方というのは、川路境の尾根からみてのことであろう。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、シモダ地名は７７ヵ所に、「下田」地名は８４ヵ所に記載がある。

【重り岩】

カサナリイワ。

この小字は、シモダ小字の弟川下流にある。狭窄部になっているので、岩が露出している所も多いと思われる。「岩が重なっている所」をいうか。

全国地図に、カサナリイワ地名は無い。

「通り洞・杓子洞・水神戸・境ノ沢・芦ヶ入・うるし田」

【通り洞】

トオリボラ。

この小字は、川路境の丘陵地の尾根から西にのびる斜面上にある。川路にも同名の小字があり、伊豆木のトオリボラとつながっている。

トオリボラとは、「丘陵地を横断する道路がある洞」であろう。

ありふれた地名と思われるのに、全国地図には、このトオリボラ地名は載っていない。

【杓子洞】

シャクシボラ。

この小字は、川路境の尾根から弟川まで延びており、川路の同名の小字と繋がっている。トオリボラ小字とともに古い小字名かもしれない。シャクシボラ小字は、スイジンド小字を挟んで二ヵ所にある。

シャクシボラとは、川路では「地形が杓子に似た洞」としたが、どうであろうか。

全国地図にはシャクシボラ地名の記載は無い。

【水神戸】

スイジンド。

この小字は、弟川の両岸に懸かっており、シャクシボラ小字の南側にある。

スイジンド（水神戸）とは何を意味するのか。

ド（戸）は狭窄部のこと。スイジンドとは、文字通り、「水神様が祀られている弟川の狭窄部」をいう。

水神は、水に関わる多種多様な神の総称である。ここの水神は、水害がないように祀ってある水神と思われる。

国土地理院の二、五万分の一の全国地図には、スイジンド地名が、中・大字として一ヵ所に記載されている。当てられている字は、伊豆木と同じ「水神戸」である。

【境ノ沢】

サカイノサワ。

この小字は弟川の右岸で、下瀬との境界にある。

この伊豆木のサカイノサワ（境ノ沢）とは、文字通り、「下瀬との境となっている沢のある所」をいう。

全国地図には、中・大字として、７件の記載がある。

【芦ヶ入】

アシガイリ。

この小字は、弟川右岸の夜明け山丘陵地帯にあり、三つの峰を含む広い小字になっている。

アシガイリとは何を意味しているのか。

語源辞典によって、二説を挙げておきたい。

①アシ（芦）はアシ（悪）で、「立ち入りが難しい所」をいう。イリ（入）は、「山と山との間の沢」のこと。合わせると、アシガイリとは、「嶮しくて立ち入りが困難な山と山との間の沢」ということになる。

②アシ（芦）はアズ（坍）が転化したもので、崩れ地を意味する。アシガイリと

は、「崩れ地のある山と山との間の沢」を意味する。

全国地図にはアシガイリ地名は無い。

【うるし田】

ウルシダ。

この小字は、県道親田・中村線の西側にあり、水田の多い低地にある。

ウルシダとは、「湿地帯にある水田」を意味するか。ウル（潤）・シ（場所を示す接尾語）とする。

全国地図にはウルシダ地名は３ヵ所。

「中屋・幸助洞・笹見・夜明」

【中屋】

ナカヤ。

この小字は、伊豆木中枢部丘陵の南で、谷一つを隔てた丘にある。

ナカヤとは何か。

ヤ（屋）は集落をいう。ナカ（中）については、考え方が二つ。語源辞典に添ってみていく。

①ナカは「二つのものに挟まれた間の地」で、二つのもというのは、この場合は、谷のこと。ナカヤとは、「谷と谷にはさまれた丘にある集落」をいう。

②ナカは「辺境と中央の間」のこと。これだと、ナカヤとは、「中央部と山間地の間にある集落」となる。

国土地理院の二、五万分の一の全国地図には、ナカヤという中・大字は６４ヵ所もある。

【幸助洞】

コウスケボラ。

この小字は県道親田・中村線に添って、その西側に広がる広い小字である。

コウスケ（幸助）は固有名詞と考えられるから、コウスケボラとは、「幸助さんが所有していたか、あるいは耕作していた土地のある洞」となる。

幸助がどんな人であったかわからないと、この小字も見えてこない。

全国地図には、勿論のこと、コウスケボラ地名は載っていなし。

【笹見】

ササミ。

この小字は、夜明山山系の尾根続きの丘陵地帯にある広い小字である。現在、果樹園や桑園もあるが、荒地も多い。

ササミとは何を意味しているのか。語源辞典によりながら、仮説を二つ挙げておきたい。

①ササ（笹）はササ（細）で、「細かい」の意。ミ（見）はミ（廻）で「屈曲した地形」をいう。合わせて、ササミとは、「細かく屈曲した地形の所」と解する。

②ササ（細）は「細かい砂地」。ミは漠然とした場所を表す接尾語。合わせると、ササミとは、「細かな砂地となっている場所」となる。風化した花崗岩地帯をいうか。

国土地理院の二、五万分の一地図には、ササミという中・大字が２ヵ所に記載されている。

【夜明】

ヨアカシ。

この小字は、立石との境に面しており、トウショウボウ（東照坊）小字を挟んで二ヵ所にある。

ヨアカシとは、「夜を寝ないで明かすこと」（国語大辞典）であるが、この地名は何を意味しているのだろうか。

近くには、ベッソ（別曽）やベッショ（別所）という鍛冶地名といわれている小字がある。しかし、このヨアカシが製鉄に関わって火を守りながら徹夜することと考えることは難しい、と思えるがどうであろうか。

ヨアカシとは、「日の出を待つ、民俗行事が行われた場所」と思われる。ここは立石との村境であり、こうした民俗行事

が行われる惣堂があっても不思議ではない。

日の出を待つということは、太陽神に関する祭祀の一環と思われるが、こうした祭祀は、現在ほとんど残っていないようだ。正月の初日の出を拝むこと、彼岸の社日参り、お日待ち、日の伴、天道念仏、天道花、お火焚き神事などに痕跡が残っているという。

全国地図には、ヨアカシ地名は一件もない。

「別所下・稲洞・平山・菊ノ原・樽ヶ沢」

【別所下】

ベッショシタ。

この小字は、東照坊小字の丘陵の斜面にある。

ベッショシタ(別所下)だから、「ベッショ小字の下」という意味になるが、ベッショ小字は、ヨアカシ小字を挟んだ向こう側にある。かっては、東照坊も一部あるいは全部がベッショ小字になっていたのかもしれない。

【稲洞】

イネボラ。

この小字は、伊豆木と境を接しており、その境に夜明山がある。現在はほとんどが山林で、果樹園や桑園は一部に限られている。

イネボラは何を意味するか。語源辞典で見ていきたい。

イネ（稲）←イナ（稲）と転化したもので「砂地」をいう。砂の古語であるヨナが転化したものという。スナ→ウナ→イナと転化したとする説もある。

イネボラ（稲洞）とは、「砂地になっている洞」であると思われる。

国土地理院の全国地図には、イネボラ地名も「稲洞」地名も記載されていない。

【平山】

タイラヤマ。

この小字は、三穂南部丘陵地帯の中段にある。イネボラ小字とニシボラ小字に間にある小さな小字である。現在は荒地になっている。

タイラヤマとは、「林地で山中にある平らな場所」をいう。この小字の発生当時、林になっていたと想定した上での解釈である。

国土地理院の二、五万分の一の全国地図には、中・大字として、タイラヤマ地名は四ヵ所、「平山」地名は１０２ヵ所となっている。「平山」が多いのは、ヒラヤマという呼び方が多いためである。

【菊ノ原】

キクノハラ。

この小字は、南西部が立石境に接し、北東部はイネボラ小字の丘陵に続いている。南側にも小さなキクノハラ小字がある。

キクノハラは瑞祥地名と思われるが、何を意味しているのだろうか。語源辞典に添って見ていきたい。

キク（菊）は動詞ククム（含）の語幹で、「(何かに)包み込まれたような地形」をいうらしい。ここでは、何かは谷か傾斜地をいうと思われる。

ノハラについては、二通りの解釈がある。

①ノ（格助詞）・ハラ（原）で未墾の入会草刈地をいうか。キクノハラとは、「谷に囲まれた丘で、未墾の草刈地」となる。

②ノハラ（野原）で、原野のこと。原野とは広辞苑によれば、「雑草・低木の生えている荒野」をいう。キクノハラとは、「谷に囲まれた丘で、雑草・低木の生えている荒野」を意味する。

全国地図にキクノハラ地名は無い。

【樽ヶ沢】

タルガサワ。

この小字はコンゴウオモテ小字とニシガホラ小字の間の急傾斜地にある。

タルガサワとは何か。語源辞典によれば、次のようになる。

タルは雨の時には滝のようになる谷で、サワも谷を意味する。

タルガサワとは、「雨の時には滝のようになる谷」を意味する。

二、五万分の一の全国地図には、中・大字として、タルガサワ地名が３ヵ所、「樽ヶ沢」地名は４ヵ所、記載がある。

「金剛表・屋な上・蜂ノ巣・可に堀場」

【金剛表】

コンゴウオモテ。

この小字は、立石境と阿知川に接している。ほとんどが急傾斜地となっている。

コンゴウオモテとは何か。これも語源辞典によって見ていきたい。

コンゴウ（金剛）は修験道の金剛蔵王菩薩信仰と関わる地名でもあるが、ここでは採り上げない。口碑でも残っておれば別であるが。

コンゴウは古語コゴシ（凝）から、「岩がゴツゴツ重なって嶮しい地形」をいうらしい。オモテ（表）は、「日光がよく当たる山の南面」か、「川に面した所」を意味する。

コンゴウオモテとは、「岩がゴツゴツ重なって嶮しい急傾斜地の、日光がよく当たる南面」、あるいは「阿知川に面した嶮しい急傾斜地」ということになる。

全国地図には、コンゴウオモテ地名は記載が無い。

【屋な上】

ヤナウエ。

この小字は、阿知川に面した急傾斜地の中ほどの所にある。「樽ヶ沢」「蜂ノ巣」「西ヶ洞」「可に堀場」等の小字に囲まれている。

ヤナウエとは何を意味しているのか。よく分からない小字である。

ヤナは柳樽の略で、樽のことをいう。下伊那郡や水窪の方言でもあるという（国語大辞典）。タル（樽）は、「樽ヶ沢」のタルで、「雨の時には滝のようになる谷」を意味する。ウエ（上）は「谷の奥」のこと（語源辞典）。

ヤナウエ（屋な上）とは、「雨の時には滝のように流れる谷の奥」と解したい。

国土地理院の全国地図には、ヤナウエ地名は載っていない。この地域の地名であるためと思われる。

【蜂ノ巣】

ハチノス。

この小字は、下條村との境で阿知川に接している急傾斜地にある。

ハチノスは何を意味しているのか。分かりにくい地名の一つ。

ハチ（蜂）は動詞ハツル（削）の語幹ハツが転化したもの、と考えられる。ノスには二通りの考え方ができる。

①ノ（格助詞）・ス（洲）で、「押し流されて堆積した土砂」（語源辞典）とする。合わせて、ハチノスとは、「急傾斜地が崩れて押し流され、阿知川原に堆積した土砂のある所」となる。河原に堆積した土砂は、阿知川に再び流されてしまうので、地名となるほどの期間、土砂が残っていたのかどうか、気になる。

②ノスは動詞ノス（伸）の終止形で「しわや縮みをのばして平らにする」（国語大辞典）こと。このことから、ハチノスとは、「急傾斜地が崩落して、凹凸が削られて滑らかになった所」を意味する。

全国地図には、中・大字としてハチノス地名は５ヵ所に記載されている。

【可に堀場】

カニホリバ。

この小字は、阿知川左岸の南向き急傾

斜地にある。
　カニホリバとは何か。これも語源辞典によってみていきたい。
　カニ←カネ（矩、曲）の転で、「曲がった地形」をいう。ホリは動詞ホル（掘）の連用形が名詞化したもの。バは「場所」。
　以上から、カニホリバとは、「等高線が曲がりくねった急傾斜地で、崩落跡のある所」を意味する。
　全国地図には、カニホリバ地名の記載は無い。

「井戸入・西ヶ洞・ホウジガタ・田境」

【井戸入】
　イドイリ。
　この小字は阿知川左岸の急傾斜地の中ほどのところにある。
　イドイリとは何か。イドもイリも既に何回か繰り返し登場しているので、それに倣いながら見ていきたい。
　イド（井戸）は、ヰ（井）・ド（処）で、「泉や流水から水をくみ取る所」をいう。イリ（入）は、上流をいう。
　合わせると、イドイリとは、「流水などから水を汲み取る所の上流部」をいう。飲料水の上流部は汚染されないようにしなければならない。という意味で、地名化しているのであろう。
　しかし、全国地図には、なぜか、イドイリ地名は載っていない。

【西ヶ洞】
　ニシガホラ。
　この小字は、北側は伊豆木境に、東側は川路境になっている広大な小字である。
　ニシガホラの解釈についても、二説を挙げておく。
①ニシガホラとは、文字通り、下瀬の中心部である山神社から見て、「西の方にある洞」を意味する。
②ニシは動詞ニジル（躙）の語幹が清音化したもので、じりじりと押しつぶすことを意味する（語源辞典）。ニシガホラとは、「崩壊したり浸食されたりしている所が多い洞」を意味する。
　国土地理院の全国地図の中・大字には、ニシガホラ地名は無いが、「西ヶ洞」地名は２件、記載がある。いずれもニシガボラと呼んでいるようだ。

【ホウジガタ】
　この小字は、下條境に近い、国道一五一号線の西側に広がる、南向きの傾斜地になっている。
　ホウジガタとは、何を意味しているのだろうか。
　ホウジはホウジ（牓示）で「領地・領田などの境界を示すために、杭・石・札などを立てること。またその立てたもの」（国語大辞典）であるという。カタ（方）は、「場所」（語源辞典）を表す。
　以上から、ホウジガタとは、「下條との境界近くに、杭（あるいは石か札）を立てた所」であろう。阿知川との間にカワハラ小字があるのが、気になるが。
　全国地図にはホウジガタ地名は記載が無い。あまり耳にしたことのない地名ではあるが、ゼロというのはどうしてなのか分からない。

【田境】
　タザカイ。
　この小字は、下條境の阿知川に近い、南向きの傾斜地にある。
　タザカイとは何を意味しているのか。ほとんどが傾斜地なので、「田んぼの境」ではない。解釈は二通り。語源辞典によって見ていきたい。
①タ（田）はテ（手）で、単に語調を調える接頭語。サカはサカ（坂）で、傾斜している所。イはヰ（井）で、「泉や流水から水を汲み取る所」のこと。合わせて、タザカイとは、「傾斜地にある、泉や流水

から水を汲み取るところ」を意味する。この解釈によって、イドイリ小字との繋がりもよくなる。
②タは同じように接頭語と解する。サカイは下條との境界をいう。弾正垣外という小字一つを超えて阿知川となっていて、下條境と少し離れているのが気になる。弾正垣外小字が後から入ってきたのだろうか。
　全国地図には、タザカイ地名の記載は一件も無い。

「弾正垣外・川原・志茂・古屋敷・居垣外」

【弾正垣外】
　ダンジョウカイト。
　この小字は、阿知川に面した緩い傾斜地にあり、現在も数軒の家々がある。
　弾正といえば、弾正台のことで、「律令制で内外の非法をといただし、風俗を粛正することをつかさどる役所」（国語大辞典）だという。かって、都では、その役にあった弾正殿が伊賀良庄まで落ちてきたいたのだろうか。それとも弾正は詐称であったか。
　ともかく、ダンジョウガイトとは、「弾正殿が住んでいた住居跡」であろうと思われる。
　全国地図には、「弾正垣外」地名は無い。

【川原】
　カワラ。
　この小字は、屈曲している阿知川添いにある。
　カワラとは、「川辺の水がかれて、砂、小石の多い平地。川沿いの平地」（国語大辞典）とあるが、ここでは、「阿知川添いの土地」としておきたい。この小字には、傾斜地も多く、必ずしも平地とは言い切れないからである。
　国土地理院の二、五万分の一の全国地図には、中・大字として、カワラ地名は１２６ヵ所、「川原」地名だと１３２ヵ所に記載がある。後者が多いのはカワハラの呼び方も入るからである。

【志茂】
　シモ。
　この小字は、イガイト小字とフルヤシキ小字の間にある、ほぼ平坦な土地となっている。
　シモとは何か。二説を挙げておきたい。
①シモ（下）で、当然すぎるかもしれないが、「高い所にくらべて、低い方の土地」をいう。
②シモ（霜）で、「霜害の生じやすい場所」を意味する。小字内に道路が二本あり、この道を通って冷気が下降したのではないかと考えることもできる。小字内には桑園もあり、霜害に苦しんできた土地であろうと想定することもできる。こうした地域では、「霜」という文字は忌避されてきた。そのために、「シモ」「志茂」「下」の字が使われている。
　国土地理院の全国地図では、中・大字として、シモ地名が１００ヵ所に挙げられている。

【古屋敷】
　フルヤシキ。
　この小字は、シモ小字の下側にあって、立石に向かう道路が通っている。
　フルヤシキとは、「かって屋敷のあった所」を意味する。フルはシン（新）の反対語である。
　国土地理院の二、五万分の一地図にも、中・大字として６７件も記載がある。固有名詞ではないからではないか、と考えている。

【居垣外】
　イガイト。
　この小字は、シモ小字の一段高い丘にある。

イガイトとは何か。これも語源辞典でみていきたい。仮説を二つ。
①イは接頭語で、語調を調え、意味を強める。イガイトとは、「居住地に適した居住地跡」ということになろうか。
②イはイ（斎）で、「清浄な、神聖な」という意味。イガイトとは、「神聖な居住地跡」となる。この小字のすぐ北東にはミヤシタ小字があり、さらに北東側には、ミヤバヤシ小字があって、山神社に関係して神聖な場所であったのだろう。
全国地図にはイガイト地名は無い。

「深沼・宮下・仏久免・清水」

【深沼】
フカヌマ。
この小字は国道一五一号線の両側にあり、ミヤシタ小字を挟んで、二ヵ所に分かれている。北隣にはミヤバヤシ小字もあり、その中には山神社がある。
フカヌマとは、何を意味しているのか。
フカ（深）はフケ（沮）が転じたもので、「湿地」のことをいう（語源辞典）。ヌマ（沼）はヌマ（要害）で、「攻防の上で重要な地点」（国語大辞典）をいう。
以上から、フカヌマとは、「攻防の上で重要な湿地」を意味する。こうした村境の重要な地に、山神も勧請したのであろう。また、東側の丘陵には、下瀬の中心地を想定させる、ウチハラ（内原）小字がある。
駄科にもウチヌマ（内沼）小字があり、ナカノムラ（中ノ村）小字やタカミ（高見）小字があって、その地を「重要な地」と解したことがあった。
国土地理院の二、五万分の一地図には、中・大字として、６ヵ所あり、いずれも「深沼」という漢字が宛てられている。

【宮下】
ミヤシタ。
この小字の中を、国道一五一号線が貫いており、フカヌマ小字に挟まれている。
ミヤシタとは、字面通りで、「山神社の下の方にある土地」ということになる。
或いは、次のような解釈も可能であるので、挙げておく。「副詞シタシタはシトシトに通じ、しっとりと湿っている様子をいう」（語源辞典）。このことから、ミヤシタとは、「お宮に近くで、湿っている土地」と解する。
国土地理院の全国地図には、中・大字として、ミヤシタ地名は８４ヵ所、「宮下」地名だと１０２ヵ所にものぼる。後者が多いのは、ミヤシモ・ミヤゲなどの呼び名が加わるからである。

【仏久免】
ブツクメン。
現在は、この小字の中を国道一五一号線が走っている。周辺には、ウチハラ・ミヤシタ・フカヌマ・シミズ等の小字があり、シミズ小字のさらに東にはオオショウジ（大正寺）がある。
ブツクメンとは、何を意味しているのか。解釈は二つ。
①ブツ（仏）は、仏寺のことしかない。東側のシミズ小字の向こうには、オオショウジ（大正寺）小字がある。ブツとは、この大正寺のことであろう。クメン（久免）←クメ（供米）で、「神仏に供える米を作る田」（語源辞典）をいう。合わせて、ブツクメンとは、「大正寺の仏様に供える米を作る田」ということになる。
②ブツは①と同じ。クメン（久免）はクメン（工面）で、「工夫して金銭や物を集めること」（国語大辞典）。この場合は、ブツクメンとは、「大正寺の経費を捻出するための耕作地」となるが、どうであろうか。
全国地図には、ブツクメン地名は無い。

【清水】

シミズ。

この小字は、現在、国道１５１号線が中を通っている。ブツクメンとオオショウジ小字の間にある。

シミズ（清水）は、飲料に適した湧水である。近隣の住民たちもこの泉を利用したに違いないが､旅人たちにとっても、貴重な存在であった。主要街道筋には、こうした湧水があって、小字名として残っている。

全国地図には、中・大字として、シミズ地名は２６５ヵ所、記載されている。

「久保・ドドメキ・湯ノ瀬・ぬおと・古寺」

【久保】

クボ。

クボ小字の中を、国道一五一号線が通っている。

クボ地名はどこにでもある地名で､二、五万分の一の全国地図では、中・大字として、２６５ヵ所にも記載されている。

伊那谷のクボは、ほとんどが､「三方が傾斜地に囲まれ、一方だけが開いた、えぐられたような窪地」が多い。ここ下瀬のクボもそうした地形になっている。

【ドドメキ】

この小字は、国道一五一号線にまたがっているが、万歳大橋の下になる。阿知川が鋭く屈曲している。

ドドメキ地名は、全国地図の中・大字には三ヵ所記載があるだけであるが、伊那谷には多い。

ドドメキはドドメク（轟）の連用形が名詞化したもので､「川の音が響き渡ること」をいう。とどろく、ともいう。日葡辞書にも Dodomeqi とあるので、かなり昔から使われていた言葉であることがわかる。

阿知川も、曲がりくねっている箇所なので、水量が多いときの水音もすさまじかったに違いない。

【湯ノ瀬】

ユノセ。

この小字は、阿知川べりにあり、ドドメキとオオショウジとヌオト小字に囲まれている。

ユノセとは何か。セ（瀬）とは､「川などの浅くて徒歩で渡れるところ」(広辞苑)であり、ユは温泉のこと。合わせてユノセ（湯ノ瀬）とは､「湯が湧き出て、阿知川を徒歩で渡れる所」を意味する。

竜丘にもユノセ（湯ノ瀬）はあるが、こちらは､天竜川右岸にある｡「湯が湧き出て天竜川の水流の急な所」となる。

国土地理院の二､五万分の一地図には、中・大字として、２ヵ所に記載がある。

【ぬおと】

ヌオト。

この小字は、阿知川に面しており、ユノセ、トゲゾロ、ヒナタなどの小字に三方を囲まれている。

ヌオトは珍しい地名で、全国地図にも記載が無い。ヌオトとは何を意味するのか。語源辞典に従って見ていきたい。考え方は二通り。

①ヌはヌ（沼）のことで、湿地を意味する。オトはオトス（落）から、「傾斜地。崖」を意味する。合わせてヌオトとは、「崖地で、麓が湿地になっている所」をいう。

②ヌは①と同じ｡オトはヲ(峰)・ト(処)で､ヌオトとは､「尾根が張り出していて、麓が湿地になっている所」を意味する。

崖が阿知川河畔まで張り出しており、その麓は、当然のことながら、湧水で湿地帯となっている。

全国地図には、さすがに、ヌオト地名は記載が無い。

【古寺】

フルテラ。

この小字は、阿知川左岸に面した国道一五一号線付近にある。現在、大泉寺のあるオオショウジ(大正寺)小字に近い。

フルテラとはフルデラとも言い、「古びて荒れた寺」(広辞苑)だというが、この場合は、「寺院があったと言われている所」であろう。すでに「大正寺」小字が、近くにある。ここで二寺が並んでいたとは思えないからである。

全国地図の中・大字としてフルテラ地名は２件しかないが、「古寺」地名は１１件ある。コデラの呼び名が入るからか。

「大正寺・さん満正・トゲゾロ・道添・白ナギ」

【大正寺】

オオショウジ。

この小字は、下瀬のウチハラ丘陵の西向き斜面にある。

この小字内には、現在、大泉寺がある。現在は無住であるが、勧請したのは上松家二代目の庄屋権左衛門であったと村史にはある。この二代目が亡くなったのが、慶安２年（１６４９）であるから、オオショウジ小字の発生は、一六〇〇年以前と思われる。大正寺と大泉寺との関係は不明である。また、近くにあるフルテラ（古寺）との関係もはっきりとはしていない。

全国地図には、中・大字として、オオショウジ地名は、２ヵ所にあるが、一ヵ所は平仮名で、もう一ヵ所は「大小路」の字が宛てられている。

【さん満正】

サンマショウ。

この小字は、オオショウジ小字の東側に一ヵ所、もう一ヵ所がさらに東側にあり、現在でも墓地がある。

サンマショウ←サイマイショ(三昧所)と転化したもので、「墓地」を意味する。サンマイ（三昧）とは、本来は、「雑念を離れて心を一つの対象に集中し、散乱しない状態をいう。この状態に入るとき、正しい智慧が起こり、対象が正しくとらえられるとする」(国語大辞典）という。その場のことを三昧所というらしいが、すでに中世には、墓地の意に転じていたらしく、日葡辞書には、Sanmai は、ハカドコロのことで、「寺院の墓地。あるいは共同墓地」となっている。

全国地図には、サンマショウ地名は一件もないが、川路や竜丘にも、サイマイショ小字やサンマショ小字はある。

【トゲゾロ】

この小字は、阿知川左岸沿いから、ウチハラ丘陵の上部に達する広い小字になっている。

トゲゾロとは何か。

トゲはトゲ（棘）のように、「鋭く突き出ている状態」であろう。ゾロは「山地のくずれたところ」(国語大辞典）であるが、かってはこの地域の方言として使われていたこともあるのではないだろうか。

以上から、トゲゾロとは、「鋭く突き出ている、崩壊した谷のある所」としたい。そうした谷が、トゲゾロ小字内に三箇所ほどある。

全国地図にはトゲゾロ地名は、一つも載っていない。

【道添】

ミチゾエ。

この小字は、阿知川の左岸添いにあり、川と斜面の中腹を走る道路の間にある。

ミチゾエは文字通り、「道路に添った斜面」であろう。

ソエは、動詞ソエル（添）の連用形が名詞化したもので、「主なものにそうこと。そえること。またそえるもの。山などの

斜面」（国語大辞典）であるという。
国土地理院の二、五万分の一地図には、中・大字として、ミチゾエ地名は五件挙げられている。
【白ナギ】
シロナギ。
この小字は、ハシバ小字の北側斜面にある。
シロナギとは、「白っぽい色をした崩壊地のある所」を意味するものと思われる。ここも領家帯の花崗岩が風化して、白っぽい色になっていたのであろう。ナギ（薙）は、崖や崩壊地のこと。
全国地図にシロナギ地名は無い。

「橋場・赤が平・南羽場・牛首・モモゾロ」

【橋場】
ハシバ。
この小字は、阿知川左岸で、トゲゾロ小字とアカガヒラ小字の間にある。
ハシバ（橋場）とは「橋が架けられていた所」であるが、ここでどんな橋が架けられていたのかは分からない。
中世の橋は僧や寺院が指導して架けられた橋が多い、という。大正寺や古寺も架橋に関与していたのであろうか。
ハシバの解釈に、もう一つある。それは、「階段状の地形になっている所」（語源辞典）である。
国土地理院の全国地図には、中・大字として、３８ヵ所に記載がある。
【赤が平】
アカガヒラ。
この小字は、阿知川左岸で内原丘陵の南側の急傾斜地にあり、ハシバ小字とミナミハバ小字に挟まれている。北側にはシロナギ小字があり、アカとシロの対比で名付けられた可能性もある。
アカガヒラとは、何を意味しているのだろうか。仮説は二つ。語源辞典に添ってみていきたい。
①アカは「湿地」を意味する。アカ（垢）の転化とするか、仏教用語のアカ（閼伽）との関連か、あるいは、アクタ（芥）の転化と見るか。いずれにしても、「湿地」を意味しているものと思われる。ガ（ヶ）は格助詞。ヒラ（平）は、「傾斜地」をいう。古事記のアマツヒラサカのヒラであるという。合わせて、アカガヒラとは、「湿地のある傾斜地」となる。急傾斜地の麓には、湿地が多い。
②アカ←動詞アカツ（散）の転で、「バラバラに散る状態」すなわち、「崩壊地形」をいう。ガヒラは①と同じ。すると、アカガヒラとは、「崩崖のある傾斜地」となる。
全国地図には、アカガヒラ地名は、記載が無い。
【南羽場】
ミナミハバ。
この小字は、阿知川左岸から内原丘陵の頂上まで広がる広い小字で、三ヵ所に分散している。かっては、この三ヵ所を繋ぐ広い地籍であったと思われる。
ハバは「急傾斜地」を意味する。ミナミハバとは、「丘陵の南側に急傾斜地のあるところ」をいう。
ハバ地名は、伊那谷には多いが、ミナミハバ地名となると、全国地図にも載っていない。
【牛首】
ウシクビ。
この小字は阿知川左岸にあって、内原丘陵の側稜が南側に突き出ている地形になっている。
ウシクビとは何か。
ウシクビとは、「牛の首状の狭く長い尾根」（語源辞典）をいう。南側に突き出ている尾根の形を牛の首に見立てたと思わ

れる。
　国土地理院の全国地図には、中・大字として、ウシクビ地名が５ヵ所にある。
【モモゾロ】
　この小字は、内原丘陵の東端にあり、果樹園と桑園がある。
　モモゾロとは何を意味するのか。語源辞典によってみていきたい。
　モモは、モモ（百）で美称。ゾロは「細かい石の土地」という。モモゾロとは、「細かい石ばかりの、いい土地」を意味するか。
　モモにもゾロにも崩壊地の意味があるが、この小字内に崖はほとんど無い。
　全国地図にはモモゾロは載っていない。

「奥原・ジウドノ畑・蛇洞・沢塚・内原」
【奥原】
　オクハラ。
　この小字は、内原丘陵の東端に位置する大きな小字である。
　オクハラとは何か。
　オク（奥）は、内原丘陵の中心からみれば、奥に当たる東の方を意味するものと思われる。ハラ（原）は開墾地のこと。オクハラとは、文字通り、「下瀬の中心地から奥の方になる東端部にある開墾地」を意味する。
　なお、ハラ（原）には、神聖な場所という意味もあるというのが気になる。」
　国土地理院の全国地図には、中・大字として２ヵ所に記載がある。
【ヂウドノ畑】
　ジュウドノハタ。
　この小字は二ヵ所にあるが、いずれも小さな小字である。一つはオクハラ小字に囲まれるように、もう一つは、ウチハラ小字とオクハラ小字の中頃にある。
　ヂウドノハタとは何を意味するのか。難しい地名である。二つのヂウドノハタ小字の間に、ジャウドという小字がある。相互に影響を及ぼし合って生まれた地名と思われる。
　さて、ヂウドノハタであるが、解釈は二通りある。
①ヂウ←ジブ（治部）と転化したもので、「治部殿畑」がヂウドノハタとなったと考える。治部省は律令制八省の一つ。ヂウドノハタとは、「かって治部省の役人であったか、そのように称しているだけであったのかわからないが、その人、治部殿の所有する耕作地」とする。
②ヂウド←ジョウド（浄土）と転化。ジウド（浄土）・ノ（格助詞）・ハタ（耕作地）で、ヂウドノハタとは、「浄土のような美しい景観がみられる耕作地」とも考えられる。
　全国地図には、ジュウドノハタ地名は、むろん、記載されていない。
【蛇洞】
　ジャボラ。
　この小字は二ヵ所、内原丘陵の西端とその北側斜面の中腹にある。この二つのジャボラはかっては繋がっていたものと思われる。
　ジャボラとは何か。
　ジャ（蛇）は大きな蛇をいう。しかし大蛇伝説でもない限り、「大蛇のいる洞」ではないだろう。
　ジャは「ザレ、ゾレに通じ、崖地を示すものが多い」（語源辞典）という。伊豆木には、ジャバミ（蛇場見）小字があった。それも崩壊地であった。ジャボラ（蛇洞）とは、「崩壊地のある洞」をいう。
　全国地図には、中・大字として、１ヵ所に記載がある。
【沢塚】
　サワヅカ。
　この小字は、内原丘陵の西端にあり、ウチハラ小字の北側に位置する。

単純ではあるが分かりにくい地名で、全国地図にも、サワヅカ地名は一件も記載されていない。

サワヅカとは、「一部は内原丘陵で、一部は沢になっている土地」とするしかないか。

【内原】

ウチハラ。

この小字は内原丘陵の中心部分になっていて、ミヤバヤシ小字やオオショウジ小字と接している。

ウチハラとは、「下瀬の主要部をなす土地」を意味する。

全国地図には、中・大字として、ウチハラ地名は七ヵ所に記載がある。

「日向・宮林・打越・福多恵・石ヶ坪」

【日向】

ヒナタ。

この小字は、二ヵ所、内原丘陵の北と西端にあり、ミヤバヤシ小字に接する。

ヒナタとは、文字通り、「日当たりのいいところ」を意味する。二ヵ所とも、日当たりの良い場所にある。

国土地理院の二、五万分の一地図の中・大字には、ヒナタ地名は１４１ヵ所もあり、「日向」地名となると１７７ヵ所にものぼる。後者が多いのは、ヒムキ・ヒアテ・ヒュウガなどの呼び方が混じるからである。

【宮林】

ミヤバヤシ。

この小字は、国道一五一号線から内原丘陵に至る斜面上にあり、村社山神社が鎮座する。祭神は大山祇神。

ハヤシ（林）は、「樹木の群がり生えている所」（国語大辞典）であり、ミヤバヤシとは、これも文字通り、「お宮があり、樹木の群がり生えている所」である。宮の森とか鎮守の森･神の森などと呼ばれ、お宮のある森はほとんど伐採されることもなく、大事にされてきている。

国土地理院の全国地図にも、中・大字として、ミヤバヤシ地名は、３ヵ所に記載されている。

【打越】

ウチコシ。

この小字は、弟川右岸の川路境にあり、国道１５１号線が通っている。

ウチコシ（打越）とは何を意味するのか。

語源辞典に依れば、「谷から山頂への道を登った向こう側」という意味もあるが、もう一つの意味である、境界争いによって発生した地名とみたい。

ウチコシ(打越)とは、「中世において、所領の境界を越えて横領すること。境打越」（国語大辞典）であろう。

現在、弟川右岸にあることから、川路側に横領されていた土地と思われる。ウチコシ小字は、伊豆木の立石境にもある。こちらは伊豆木側が横領された形になっている。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、５５ヵ所のウチコシ地名が記録されている。「打越」地名となると、７９ヵ所に及ぶ。

【福多恵】

フタエ。

この小字は弟川右岸の氾濫原にあり、旧道に添っている。

川路側にもフタイ小字はあり、弟川左岸の氾濫原のほとんどを含んでいて、広い小字になっている。川路のフタイ（二タ井）については、用水路が改修されて、上と下に井水ができた頃からフタイと呼ぶようになった、としている。

フタエ（イ）とは、「川を塞ぐような地形になっていて、水の集まる所」である。フタはフタグ（塞）の語幹。エ（イ）は

ヰで「水の集まる所」をいう。
　下瀬のフタエ小字は、発生当時はもっと広がっていたはずである。
【石ヶ坪】
　イシガツボ。
　この小字は、弟川右岸の氾濫原の中ほどにある。
　イシガツボとは何を意味しているのか。
　イシ（石）は、「小石の多い所」か。ガは格助詞。ツボ（坪）は動詞ツボム（窄）の語幹で「えぐられた地形」（語源辞典）という。以上から、イシガツボとは、「小石の多い、えぐられたような所」か。
　全国地図には、中・大字としてイシガツボ地名は、２ヵ所に記載されている。

「井免・渡リ瀬・トイガ入・アラガ平」
【井免】
　イメン。
　この小字は、弟川に接して、その右岸にある。
　イメン（井免）とは、「弟川を含めた井水を維持管理する費用にあてるために、租税が免除されていた耕作地」と思われる。
　イは井水のこと。メン（免）は、「中世荘園で、領主に対する年貢を免除された田」（語源辞典）とされている。
　不思議なことに、全国地図には、イメン地名は一件も記載されていない。小字はあっても、中・大字にはなりにくい地名なのかもしれない。
【渡リ瀬】
　ワタリセ。
　この小字は、弟川右岸にあって、川に張り付くように広がっている。
　ワタリセとは何か。分かり易い地名である。
　ワタリは動詞ワタル（渡）の連用形が名詞化したもので、徒渉点をいう。セ（瀬）は「川などの浅くて徒歩で渡れるところ。あさせ」（語源辞典）である。
　以上から、ワタリセとは、「弟川の川幅が広がっていて徒歩で渡れるところ」を意味する。
　これもどうしてか、わからないが、全国地図にはワタリセ地名は記載が無い。
【トイガ入】
　トイガイリ。
　この小字は、内原丘陵の北西側の急傾斜地にある。
　トイガイリとは何を意味するのか。普通には、水路の樋門をいうが、この小字の下流側にある水田は、現在でも自然の湧水を使っている。それに国道１５１号線を高架で渡している井水は、トイガイリ小字とは反対側の内原丘陵の南側に引いている。だから、水路の樋門という解釈は、ここでは合わない。
　では、どう考えたらいいのだろうか。仮説を二つ、国語大辞典を参考にしながら、提示しておきたい。
①トイ←動詞ドエル（方言）の転じたもの。ドエルとは、下伊那地方では「蒸し暑くなること」であるが、京都・滋賀では「土砂などが崩れる」ことを意味する。下伊那地方でも、かってこうした意味にドエルを使っていたことがあったのではないか、という仮説である。カは格助詞で、イリは「上の方」をいう。以上から、トイガイリとは、「崩壊地のある場所の上の方」をいう。傾斜地全体を含んでいる言い方と思われる。
②トイ←ドイ（土居）←ドテ（土手）と転化したもの。ドテ（土手）は愛知の方言では「土地の傾斜面」をいい、上田では「崖」をいう。ガイリは①と同じ。とすると、トイガイリとは、「傾斜地の上の方」を意味する。
　全国地図にはトイガイリ地名は無い。

【アラガ平】
アラガヒラ。
この小字は、弟川右岸の広い地域にわたり、上端は内原丘陵の頂上部に近い。
アラガヒラの解釈も二つ。語源辞典によれば、
①アラはアラ（荒）で、急流をいう。ガは格助詞で、ヒラは傾斜地。アラガヒラとは、「弟川の急流がある傾斜地」となる。弟川の狭窄部は流れが激しい。
②アラはアラ（粗）で崩壊地をいう。アラガヒラとは、「崩壊地のある傾斜地」となる。
全国地図には、アラガヒラ地名は一件も記載されていない。

「木戸ヶ洞・ヤセツルネ・銭亀洞・・ジャウド」

【木戸ヶ洞】
キドガホラ。
この小字は、弟川右岸の緩い傾斜地にあり、旧道を見下ろし、内原丘陵に登る道路の周辺に広がる。
キドガホラは、字面通りで、「木戸のあった洞」を意味する。問題は、キド（木戸）が何であったかである。
キド（木戸）とは、キ（柵）・ト（門）で「柵に作った門」（国語大辞典）をいう。
内原丘陵が牧場であった時代があったとすれば、牧場の入口の柵とも考えられないわけではない。しかし、ここが川路境に近いということから、別の意味に考えたい。
このキドは街道の警備門であったと思われる。キドガホラ小字は旧道を見張ることのできる場所にある。旧道と少し離れているのが気になるが、かっては、旧道まで小字が広がっていたかもしれない。
とすると、キドガホラとは、「街道の警備門である柵があった洞」となる。
全国地図にはキドガホラ地名は無い。

【ヤセツルネ】
この小字は、内原丘陵北端の縁にある。
ヤセツルネ小字は、他に川路と市田で確認できているが、伊那谷南部には、かなりの数があると思われる。しかし、不思議なことに、全国地図には記載が無い。
ヤセは動詞ヤセル（瘠）の連用形が名詞化したもので、「細いこと」をいう。ツルネ（蔓畝）は、「蔓のように長く伸びて連なった小高い所」（国語大辞典）であるが、長野県の方言では、尾根のことをいうらしい。
ヤセツルネとは、他の地区と少し意味が異なるが、「細い尾根が伸びている所」としたい。内原丘陵から伸びる、小さな側稜の尾根が四本、弟川に伸びている。

【銭亀洞・銭が免洞】
ゼニガメホラ。
これらの小字は、内原丘陵の北西側の傾斜地にある。弟川右岸である。弟川に接する所は急傾斜地になっているが、上の方は、丘陵地の一部で、ほとんどが果樹園となっている。
ゼニガメ小字は伊豆木にもあるが、他ではまだ目にしていない。全国地図にも記載がないので、あるいは、三穂の特徴的な小字なのかもしれない。
ゼニガメホラとは何を意味するのか。語源辞典によって見ていく。
ゼニ（銭）は、セミ（狭廻）で、「狭い所」をいう。ガメ（亀）←カハ（川）・メ（「辺」の転）で、「川に近い所」のこと。以上から、ゼニガメホラとは、「弟川の狭窄部に近い所」を意味する。

【ジャウド】
ジョウド。
この小字は、内原丘陵の北端にあり、ゼニガメホラ小字の上の方に位置する。
ジョウドとは何か。

ジョウドは「浄土」のことか。オオショウジ（大正寺）とも何らかの関係があったと思われる。因みに浄土宗とは、「阿弥陀仏の本願を信じ、その仏の名号を称えることによって、すべての人が極楽浄土に往生することができると説く宗派」（国史大辞典）である。

ジョウド小字から北方を見ると、右手に仙丈岳や赤石連峰、左には南駒ヶ岳など木曽山脈があり、その間に、民家などがきらきらと日光をはね返している。この景観を、極楽浄土に見立てたものと思われる。

全国地図でも、中・大字のナカニ、ジョウド地名は７ヵ所が記載されている。

「平山・ゑのこ・天龍向・ドロブ・藤下げ」

【平山】

ヒラヤマ。

この小字は、内原丘陵の東端にある。小字全体が緩い傾斜地になっていて、現在は、ほとんどが果樹園、一部が桑園になっている。

ヒラ（平）は、ヨモツヒラヤマのヒラで、「傾斜地」のこと。ヤマ（山）は、長野県の方言で、「耕作地。畑」をいう。

以上から、ヒラヤマ（平山）とは、緩い傾斜地となっている耕作地」を意味するが、地名発生当時は、未墾地であった可能性もある。その場合には、「緩い傾斜地にある森林」となる。

国土地理院の二、五万分の一地図には、中･大字として、９９ヵ所に記載がある。

【ゑのこ・ゑのこぶち】

エノコ・エノコブチ。

エノコ小字は、弟川右岸の急傾斜地にあり、エノコブチ小字は天竜川右岸の急傾斜地にある。

なお、弟川左岸の川路側にも、エンノコロブチ小字がある。

エノコ←イヌノコと転化シタモノデ、エノコは、川路ではエンノコロと呼んでいる植物で、ネコヤナギの花穂をいう。彼岸参りの花の一つでもある。

エノコとは、「ネコヤナギがたくさん生えている所」で、エノコブチとは、「流れの淀んだ川の、ネコヤナギがたくさん生えている崖」を、それぞれ意味する。

なお、全国地図には、エノコ地名は載っていない。エノコが方言だからか。

【天龍向】

テンリュウムキ。

この小字は、天竜川右岸の急傾斜地にある。

テンリュウムキとは、これも文字通りで、「天竜川に向かっている所」を意味する。

全国地図にテンリュウムキ地名が無いのは当然のことか。

【ドロブ】

この小字は、内原丘陵の東側の傾斜地、天竜川右岸にある。

ドロブとは聞いたこともない地名であるが、何を意味するのだろうか。以下、語源辞典によって見ていきたい。解釈は二通り。

①ドロはドロ（泥）で、「湿地」をいう。ブ←フ（生）は「草木が茂っている所」のこと。以上から、ドロブとは、「草木が茂っている湿地」をいう。丘陵の傾斜地で天竜川に近いところには湧水があって湿っている。

②ドロ←トロ（瀞）で、「淀み」をいう。ブ←フ（生）で、「～になっている所」のこと。合わせて、ドロブとは、「天竜川が淀んだ淵になっている岸辺」を意味するか。

全国地図には、中・大字として三ヵ所に載っている。因みに当てられている漢

字は、「土呂部」「土路部」「泥浮」。
【藤下げ】
フジサゲ。
この小字は、内原丘陵の頂部にあり、そこから天竜川の川辺までの広い地域にわたっている。
フジサゲの解釈は三通り。
①素直に解釈すれば、「たくさんの藤の花が下がっている所」となる。
②フジ（藤）←フチ（縁）と転じたもので、「丘陵部の縁が低くなっている所」とする。川辺までの急傾斜地は、後で付加させたものか。
③サゲ（下）は「傾斜地」のこと。フジサゲとは、「藤の多い傾斜地」か。
全国地図にはフジサゲ地名は無い。

「地鍬・越前・米山・風呂屋・岩本」
【地鍬・上地鍬】
チクワ・カミチクワ。
これらの小字は立石にあり、県道親田・中村線に沿った細長い小字である。
チクワとは何を意味するのか。これも難しい地名である。二つの仮説を挙げる。
①チはミチ（道）の上略形で、「道路」を意味する（国語大辞典）。クワ（鍬）←キハ（際）と転じたもので、「わき。そぼ」の意である。とすると、チクワ（地鍬）とは、「道路の脇」ということになる。
②クワ（鍬）は、クエ（崩）と同系統であるため、「崖」の意味がある。そうなれば、チクワとは、「道路にそった崖」となる。
カミチクワは、「チクワの上の方にある土地」ということになるか。
なお、全国地図にはチクワ地名は無い。
【越前】
コシマエ。
この小字は、水晶山山系の側稜の麓部分にあり、立石寺の東方にあたる。
コシマエ（腰前）小字は、伊豆木にもあった。この立石のコシマエも、地理的状況は伊豆木のそれと変わらない。そこで、コシマエは何を意味しているのか、伊豆木のコシマエをなぞっておくことにする。
①「立石寺の前方に当たる北東の方にある、水晶山系側稜の麓」を意味する。
②「立石寺の前方に当たる北東の方にある湿地帯」とする。
【米山】
コメヤマ。
この小字は、立石寺の東側から県道親田・中村線にまで広がる大きな小字である。
コメヤマとは何か。解釈は二通り。
①村史による。米山城があった所で、糧米を貯蔵していた場所ではないか、という。「コメを貯えていた城のあった所」ということになろうか。
②コメ（米）←ゴマ（護摩）と転化したものと考える。護摩は真言密教の修法の一つであり、立石寺は真言宗の寺院であるから、近くに護摩壇があっても不思議ではない。コメヤマとは、「護摩壇があった所」という解釈も可能である。
国土地理院の二、五万分の一地図には、中・大字として、コメヤマ地名が２８件、「米山」地名は３６件と、比較的多い。
【風呂屋】
フロヤ。
この小字は、二ヵ所にある。一つはコメヤマ小字の南側の低地に、もう一つはサンノウヤマ小字とテラ小字の間に。
フロヤとは何か。
語源辞典によれば、フロ（風呂）←フクロ（袋）と転じたもので、フロは「袋状の地形」をいう。ヤ（屋）はヤツ（菟）の略で、「湿地」のこと。
以上から、フロヤ（風呂屋）とは、「袋

状の低湿地」となる。
　なお、全国地図には、フロヤ地名は一件の記載も無い。
【岩本】
　イワモト。
　この小字は、県道親田・中村線に接して、その北側にある。コメヤマ小字の下方になる。
　イワモトとは何か。これも語源辞典による。
　イワ（岩）は「小石混じりの地」をいう。モト（本）はモト（下）で、「山の麓」のこと。合わせると、イワモトとは、「小石混じりのコメヤマの麓」となろうか。
　全国地図には、中・大字として、イワモト地名は３２ヵ所にある。

「後沼・陰田・西林坊・滝井坊・池ノ坊・田門坊・西ノ坊・桜本」

【後沼】
　ウシロヌマ。
　この小字は、県道親田中村線と立石寺に至る中心道路が交差する、北側にある。
　ウシロヌマのウシロとは、何のウシロ（後）をいうのか、はっきりしない。南側の下の方にあるテラ（寺）小字と思われるが、北東方向の米山城も可能性がある。
　ウシロヌマ（後沼）とは、「寺小字の後ろ側にある湿地」としておく。
　なお、全国地図にはウシロヌマ地名は一件も無い。
【陰田】
　ヒカゲダ。
　この小字は、フロヤ小字に二方向を囲まれている、小さな小字である。
　ヒカゲ（陰）は、ヒカゲ（日影）で、「日の当たる地」をいう。カゲは古語で光りを意味していた。だから、日の当たらない土地ではない。タ（田）はタ（処）で場所を示す接尾語。
　ヒカゲダ（陰田）とは、「日の当たる土地」となる。
　全国地図にはヒカゲダ地名は無い。
―以下は立石寺の僧坊名と関わると思われる小字である。村史にはあるが、この小字図にない僧坊は、梅本坊・とうじ坊・弥うち坊・上田門坊・内山坊・威光坊。
【西林坊】
　サイリンボウ。
　この小字は、立石寺の中心道路の東側にあって、立石寺に最も近い最上部にある。
　立石寺の坊の一つであるが、名称の由来は固有名詞と思われるが、分からない。
【滝井坊】
　タキイボウ。
　この小字は、サイリンボウ小字の西側、中心道路の反対側に位置する。
　これも立石寺の坊の一つがあったところ。これも名称の由来は不明。
【池ノ坊】
　イケノボウ。
　この小字は、タキイボウ小字の下で、南側になる。
　これも立石寺の坊の一つから名付けられた小字である。
【田門坊】
　タモンボウ。
　この小字は、イケノボウ小字の更に下となる南の方に位置する。
　やはり立石寺の坊の一つから名付けられた地名であろう。
【西ノ坊】
　ニシノボウ。
　この小字は、現在の日枝神社境内にある。
　「西ノ坊」は立石寺の僧坊であると思われるが、日枝神社の勧請の前に、すで

に立石寺があったということであろうか。よくわからない。

これらの立石寺の坊のなかで、全国地図に記載されているのは、ニシノボウ地名の３ヵ所だけである。

【桜本】

サクラモト。

この小字は、県道親田・中村線と立石寺へ向かう中心道路の交差点の北西隅にある。立石寺仁王門のある所。

村史をみると、この付近に「桜本坊」があったと記されている。このサクラモト地名は、かってあった坊の名前が、瑞祥地名であったために、小字として残ったものと思われる。

国土地理院の全国地図にも、中・大字として、８ヵ所に記載がある。

「箱垣外・寺・砂原・林添・不動洞」

【箱垣外】

ハコガイト。

この小字は、日枝神社に達する直線道路の東側に張り付いている。

ハコガイトとは何を意味するのか。

ハコガイト小字は、立石の条里制の中で、最もはっきりしている坪であると、村史に記載されている地区の中にある。

ハコガイトとは、「条里制が残っていて、箱形の坪がはっきりしている所」とするのはどうであろうか。

全国地図にはハコガイト地名は一つも載っていない。

【寺】

テラ。

この小字は、立石寺の境内と他に二ヵ所ある。一つは立石寺の北北東方向に、もう一つは立石寺仁王門のところに。三つとも、それほど大きな小字ではないが、かっては、立石寺を中心にした、ひとつながりの大きな小字であったと思われる。

国土地理院の二、五万分の一地図には、中・大字として、十三ヵ所が挙げられている。

【砂原】

スナハラ。

この小字は、伊豆木境に近い、コシマエ小字の南側、最北のテラ小字の北側になる、小さな小字である。

スナハラ（砂原）とは、文字通り、「砂地で、未墾の入会草刈地」かと考えるが、小字の面積が、やや小さいのが気になる。小字名発生当時には、もっと広かったかもしれない。

国土地理院全国地図には、中・大字として、スナハラ地名は、２５ヵ所に記載がある。

【林添】

ハヤシゾエ。

この小字は、タテホラ小字の急傾斜地の下側にあって、傾斜が緩くなっている。周辺には、「寺」、「山王山」、「不動洞」などの小字がある。

ハヤシゾエとは何を意味しているのか。二説を挙げる。

①ハヤシ（林）は、「樹木の群がり生えている所」（国語大辞典）で、群がり生えているのは、人が手を入れないためとも考えることができる。下瀬の山神社はミヤバヤシ（宮林）小字の中にある。この小字のまわりにも、テラ・サンノウ・フドウなどの小字があり、人手の入りにくい場所があったものと思われる。ハヤシゾエとは、「樹木が群がり生えている森に添った所」を意味する。

②ハヤシ（林）は、ハヤ（逸。急）・シ（接尾語）で、「急傾斜地」をいう（語源辞典）。この小字の西側には、水晶山山系側稜の急傾斜地がある。ハヤシゾエ（林添）とは、「急傾斜地に添った所」と解することもできる。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、ハヤシゾエ地名が２ヵ所に記載されている。

【不動洞】

フドウボラ。

この小字は、ハヤシゾエとタテホラの小字に挟まれて寺井の谷の中に位置する。

フドウボラとは、「不動明王を祀る洞」である。

護摩壇の本尊でもある。密教の盛行とともに尊崇され、平安末期には、浄土教の人々にも臨終にある人の煩悩を剣で断ち切ってくれる仏として信仰されるようになったという（国史大辞典）。

全国地図には、フドウボラ地名は無いが、フドウドウ（不動洞）地名は中・大字として１件だけ記載されている。

「山王山・立洞・経ノ上・峰・木割場」

【山王山】

サンノウヤマ。

この小字は、日枝神社の境内にある。

山王は日枝大社の別称であるが、比叡座のことを山王と称したことによる。日枝大社は比叡山の東麓である大津市坂本にある。祭神は、大山咋神と後に併祀された大物主神である。山王大権現といえば、この二神をいうか。

サンノウヤマとは、「山王大権現を祀る森」としておきたい。

山王信仰は、「無仏時代の愚かな衆生を解脱に導き、また病悩を癒すという利生の現実性と普遍性から、山王信仰は貴族はもとより最下層の民の崇敬をも獲得し、やがて各地に分祀されていった」（民俗大辞典）という。

各地に分祀されていった結果であろうか。全国地図の中・大字に、サンノウヤマ地名は１０ヵ所ある。

【立洞】

タテホラ。

この小字は、水晶山系側稜の尾根の末端部にある。ハヤシゾエ小字の緩傾斜地の西側にある急傾斜地となっている。

タテホラとは何か。

タテはタツ（立）の連用形が名詞化したもので、「台地などの高くなった所。あるいは、低地に臨んだ丘陵の端」（以上は語源辞典）であるという。

タテホラとは、「洞の緩傾斜地に臨んだ急傾斜地丘陵の末端」のことをいうか。

全国地図には、タテホラ地名は、一つも無い。

【経ノ上】

キョウノウエ。

この小字は、タテホラ小字の北側にある急傾斜地で、テラヤマ小字の尾根が伸びてきた末端部に当たる。北側はミネ小字の緩傾斜地に接する。

キョウノウエとは、何を意味するのであろうか。二通りの解釈を示したい。

①キョウ（経）はキョウ（境）で、緩傾斜地と急傾斜地の境をいう。キョウノウエとは、「緩急傾斜地の境界の上の部分、つまり緩い傾斜地に移る前の急傾斜地」をいう。

②キョウ（経）はキョウ（峡）で、峡谷地形となっているミネ小字の上方の急傾斜地」のこと。

全国地図には、キョウノウエ地名は、一件の記載も無い。

【峰】

ミネ。

この小字は、伊豆木境にある。水晶山山系の側稜の小さな尾根が、この小字の北端にあり、伊豆木との境界になっている。

ミネ（峰）とは、文字通り、「側稜の小さな尾根がある所」であろう。

この簡単な地名は、各地にあり、国土

地理院の全国地図をみると、中・大字になっているミネ地名は、１１２ヵ所に及ぶ。

【木割場】

キワリバ。

この小字も、水晶山山系の側稜の一つにあり、伊豆木境の尾根の南側にある小さな小字である。

キワリ（木割）とは、「木、特に薪用の木を割ること。また、その人」（国語大辞典）であるという。

キワリバ（木割場）とは、文字通り、「薪にする木を割っていた所」となる。この付近は柴山の入会地で、ここで薪を作ることを、みんなで決めていたのではないだろうか。

全国地図には、キワリバ地名は無い。

「寺山・堤ヶ洞・トンド山・三本松・小垣外」

【寺山】

テラヤマ。

この小字は、立石寺の北西方向にある、広大な小字で、水晶山系の側稜の尾根と谷を含む。

テラヤマ（寺山）とは、「立石寺の寺領となっている山」と解するのが、自然。

しかし、もう一つの解釈もありうると考えている。語源辞典によれば、テラ←タラと転じたもので、タラには、「ゆるやかな地形」、あるいは「崩壊地形」を表すこともあるという。このことが正しければ、テラヤマとは、「崩壊地のある山」ということになる。しかし、語源辞典のいう原資料が見つからないままになっていることが気になる。

国土地理院の二、五万分の一地図には、中・大字として、テラヤマ地名が６７ヵ所に記載されている。

【堤ヶ洞】

ツツミガホラ。

この小字は、水晶山系の側稜の二つの尾根に囲まれた洞になっている。

村史によれば、ここには立洞川の水源に堤があって大崩落が起きたことがあったという。崩落の三日ほど前に、深見へ急ぐ娘の姿があったという。ツツミホラとは「溜め池のある洞」である。

別の解釈も挙げておきたい。ツツミ（堤）は、動詞ツツム（包）の連用形が名詞化したもので、「山などによって周囲を取り囲まれた地」とも考えられる。ツツミガホラとは、「二本の側稜によって取り囲まれた洞」を意味する。

全国地図には、ツツミガホラ地名は一つも記載されていない。

【トンド山】

トンドヤマ。

この小字は、水晶山山系の側稜の尾根と谷を含む小字となっており、現在は、近くを林道が通っている。

国語大辞典によれば、トンド＝ドンドで、ドンドとは、「水が音をたてて流れるさま。また、そのひびきを表す語。どうどう」とある。

トンドヤマとは、「谷川が流れくだるひびきが聞こえる山」となる。杣人たちの耳に響くほどの音が当たりに聞こえていたということだろうか。

全国地図には、トンドヤマ地名は無い。

【三本松】

サンボンマツ。

この小字は、水晶山山系の側稜の谷間になっている。

三本木といって、同じ所から枝が三つ股になって出ている木は、山の神木として、伐ることを避けたという（国語大辞典）。この立石のサンボンマツ（三本松）も三つ股になっていた松で、神木として

大事にされていたのではないだろうか。
サンボンマツとは、「神木とされていた三本松のあった所」であろう。
国土地理院の全国地図には、このサンボンマツ地名が３７ヵ所にもある。
【小垣外】
コガイト。
この小字は、日枝神社の南東側にあり、ニシノボウ小字とネギヤ小字の間にある。
コには、語源辞典によれば、二通りの解釈がある。①字音コウ（高）の約で、「高い」の意。②カミ（神）→コウ→コと転化したもの。
コガイトとは、①「高い所にある住居か住居跡」、②神聖な場所にある住居又は住居跡」となる。
全国地図には、中・大字として、コガイト地名は、３ヵ所に記載されている。

「祢宜屋・日向・加美・東殿垣外・高腰」
【祢宜屋】
ネギヤ。
この小字は、二ヵ所にある。一つは日枝神社のすぐ前、もう一つは神社の南西方向に離れて位置している。
ネギ（祢宜）とは、神主の下、祝の上に位する神職のことというが（広辞苑）、一般的には、神職の総称として用いられている。このネギヤ（祢宜屋）とは、「日枝神社の神官の住居あるいは住居跡」ということになる。
ネギヤ地名はこの地域の各地の神社の近くに、今なお小字として残っている所が多い。
国土地理院の全国地図には、中・大字として、６ヵ所に挙げられている。
【日向】
ヒナタ。
この小字は、日枝神社の前、南側にある。現在、三穂第九組合集落センターのある所。
ヒナタ（日向）とは、素直には、「日当たりのよい所」である。この小字がある緩傾斜地は南東に面しているので、日当たりはいい。
国土地理院の二、五万分の一地図には、中・大字として、ヒナタ地名は１４１ヵ所もの記載がある。「日向」地名となると、さらに１７７ヵ所にのぼる。
【加美】
カミ。
カミ小字は、日枝神社から南、ほぼ一五〇米ほどのところにある。
カミとは「神」のことで、「日枝神社に近い、神聖な場所」を意味するか。
国土地理院の全国地図には、中大字として、カミ地名が１１０ヵ所も記載されている。うち、「加美」地名は４ヵ所しかなく、多くは「上」「神」などの字が宛てられている。
【東殿垣外】
ヒガシトノガイト。
この小字は、県道親田・中村線の直線部分の北側にあり、カミ小字に囲まれている。
ヒガシトノガイトとは、ヒガシ（東）という固有名詞をもった有力者の住居跡と考えることもできるが、村史の図面をみると、「西殿垣外」があるので、「東側にあるトノと呼ばれた有力者の居住地」ということになる。
この有力者は、甲賀城の関係者と思われるが、詳しいことは分からない。
当然のことであるが、ヒガシトノガイト地名は、全国地図には無い。
【高腰】
タカコシ。
この小字は、水晶山山系の側稜の麓にあり、カミ小字の西側に位置する。
タカコシとは、何を意味しているのか。

語源辞典によって考えてみたい。

タカの解釈は二通り。①タカには、限界とか限度を意味する場合があり、「台地の端」を示す。②タカ←タガで、動詞タガフ（違）の語幹。食い違った地形で、「棚状の段丘」をいう。

コシにも二通りの解釈ができる。①静岡の方言で、「麓」のこと。②動詞コス（漉）の連用形が名詞化したもので、「水が湧き出る所」をいう。

これらのタカとコシを組み合わせることで、四通りもの解釈ができてしまうが、「棚状の段丘になっていて湧水のある所」とするのが現地に最も適合しているか。

国土地理院の二、五万分の一地図には、タカコシ地名は１ヵ所にある。そこの宛てられている漢字は「高越」となっている。

「清水ヶ洞・角垣外・釜ヶ洞・西・清水」

【清水ヶ洞】

シミズガホラ。

この小字は、水晶山山系側稜に挟まれた谷となっている、広い小字である。

シミズガホラ（清水ヶ洞）とは、「飲料となるような湧水の出る所」と思われる。

この小字の下流域は桑園になっていて、道路も通っているが、この小字発生当時に、多くの旅人が通ったとは思われないので、杣人たちが利用した、きれいな清水だったのだろうか。

全国地図に、シミズガホラ地名はのっていない。一件ぐらいはあると予想していたのであるが。

【角垣外】

スミガイト

この小字は、シミズガホラ小字の西隣にあり、林道下瀬西山線に面している。

スミガイトとは何か。

語源辞典によって、二通りの解釈を挙げておきたい。

①スミ（角）はスミ（隅）で、奥のことから「平地の隅」をいう。スミガイトとは、「平地の隅の方にある住居か住居跡」を意味する。

②スミ（角）はスミ（炭）で、木炭の製造・販売にかかわる地名。スミガイトとは、「炭焼き人の居住地あるいは居住地跡」をいう。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、スミガイト地名が１ヵ所だけある。それには、「角谷戸」の字が宛てられている。

【釜ヶ洞】

カマガホラ。

この小字は、スミガイト小字の西隣にあるが、水晶山山系の側稜尾根近くまで伸びる長い谷になっている。

カマガホラとは何か。

カマ（釜）は、崖がえぐられているようになっている所をいう（語源辞典）。カマガホラとは、「斜面が抉られているようになっている洞」を意味する。

国土地理院の二、五万分の一地図には、中・大字として、カマガホラ地名は、１ヵ所、記載されている。そして、「釜ヶ洞」の字が宛てられている。

【西・上西・中西・下西】

ニシ・ウエニシ・ナカニシ・シモニシ。

これらの小字は立石の緩傾斜地の最西端になり、それより西側は水晶山山系の急傾斜地となっている。ウエ・ナカ・シモと傾斜地の高い方から低い方へと並んでいるが、ニシ小字は、ナカニシ小字の東側になっている。

これらの小字は何を意味しているのであろうか。仮説を二つ。

①「立石の中心部からみて、西の方にある所」と解するのが、素直であろう。上・中・下と分かれているのが気になるが、

ニシ小字が最初に名付けられて、上・中・下は後で発生したのであろうか。
②ニシ（西）は、動詞ニジム（滲）の語幹が清音化したもので、「湿地」をいう（語源辞典）。ウエニシは「上の方にある湿地」ということになる。この細長い谷を谷川が流れているし、湧水も多いように見受けられる。
全国地図に中・大字として、ニシ地名は１６２ヵ所にもなる。
【清水】
シミズ。
この小字は、立石中心部から西の方に外れた所にある。
自然湧水の多い所と思われるが、家庭用として利用されたのであろうか。
全国地図には、中・大字として、シミズ地名は２３６ヵ所にも記載されている。

「東沢端・井端・井免・道添・上手」
【東沢端】
ヒガシサワバタ。
この小字は、立石緩傾斜地の西部にある。急傾斜地シミズガホラ小字の南である下流側にあり、ナカニシ小字とイバタ小字に東西を挟まれている。
東沢というのは、立洞沢と本山沢の間にある小さな谷川と思われる。
ヒガシサワバタとは、「東沢という谷川が傍らを流れている土地」ということになろうか。
このヒガシが何のヒガシなのかは、はっきりしないが、西側にあるニシ小字群のヒガシという意味しか、思いつかない。
当然というべきかどうか、全国地図には、ヒガシザワ地名の記載はない。
【井端】
イバタ。
この小字は、ヒガシサワバタ小字の東側にあり、シミズガホラ小字の下の方の緩傾斜地に位置する。
イバタ（井端）とは、文字通り、「流水の傍ら」を意味する。流水は、イバタ小字の南側を流れているものと思われる。イバタ小字は現在でも水田にはなっていない。この水路の水を利用しているのは、イバタ小字の南側にあるカニハラ小字の水田と思われる。
国土地理院の全国地図には、意外にも、イバタ地名は載っていない。
【井免・井免田】
イメン・イメンダ。
これらの小字は、立石緩傾斜地の北部にあって、カミ小字とイバタ小字の間となる。
イメン（井免）とは、「井水の管理のために免租になっている水田を中心とした土地」を意味する。管理する井水というのは、立洞沢川から分流させているものと思われる。
イメンダ（井免田）小字は、現在でも水田ではなく畑地になっている。イメンダとは、「井水の管理で免租されている耕作地」としておきたい。
これも不思議に思えるが、全国地図には、イメン地名もイメンダ地名も、一ヵ所も載ってはいない。
【道添】
ミチゾエ。
この小字は、イバタ小字とイメン小字群とに囲まれている。
ミチゾエ（道添）といえば、「道路に添った所」となる。しかし、ミチゾエ小字の北側と南側に道路は通っているが、いずれも離れている。かって、この小字がどちらかの道路にまで広がっていたのだろうか。
もう一つの解釈を語源辞典によって、挙げておく。
ミチ（道）は動詞ミツ（満）の連用形

が名詞化したもので、「ぎりぎりのところまで迫る」こと。ゾエ（添）は動詞ソウ（添）の、これも連用形が名詞化したもので、「斜面」を意味する。ミチゾエとは「土砂がぎりぎりのところまで迫ってきた傾斜地」をいう。

ミチゾエ（道添）は下瀬地区にもあったが、全国地図にも、中・大字として五ヵ所が挙げられている。

【上手】

ワデ。

この小字は、立石緩傾斜地の西よりに位置し、イメン、シミズ、キブネなどの小字に囲まれている。

ワデとは、「上の方」をいうが、何を基準にしての上なのか、はっきりしない。斜面は南東を向いているので、南東方向にあるのは、甲賀城か貴船である。

「五百畑・貴船・五石免・大畑・溝ノ尾」

【五百畑】

ゴヒャクバタ。

この小字は、日枝神社の真南にあり、ワデ小字とキブネ小字に囲まれている。

ゴヒャクバタ（五百畑）とは何を意味しているのであろうか。よくわからない地名の一つ。

ゴ（五）はゴウの短縮形で、ゴウは川音の擬音語で、「川」のことをいうらしい。ビャクは関東地方の方言で、「山崩れ」を意味する（以上は語源辞典）。ハタ（畑）はハ（端）・タ（処）で、「傍。近く」の意。以上から、ゴヒャクバタは、「土石流が押し出してきた末端部」を意味する、と考えるのはどうであろうか。立洞沢川には何回か土石流が発生しているようで、堤ヶ洞が崩れたのも、その一つと考えられる。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、１ヵ所だけであるが、ゴヒャクバタ地名が載っている。

【貴船】

キブネ。

この小字も、日枝神社のほぼ南の方にあり、立洞沢川による土石流被害を受けている地域と思われる。

キブネとは、「貴船神社のあった所」を意味する。貴船神社は、京都の貴船山の中腹にあるお宮で、そこから立石に勧請したと思われる。しかし、村史によれば、祭神は水神の罔象女神（みずはのめのかみ）となっている。この神を主祭神として祀る大社はない。京都の貴船神社の祭神は、同じ水神の高龗神（たかおかみのかみ）である。神仏分離の波に洗われて、日本書紀の神を祭神にしたものと思われる。

国土地理院の二、五万分の一地図には、中・大字として、キブネ地名が、１１ヵ所に記載されている。

【五石免】

ゴコクメン。

この小字は、ゴヒャクバタ小字の下流の方にある。

ゴコクメン（五石免）とは、どういうことであろうか。

「五石が免租される土地」とするのが、最も素直な解であるが、この小字の面積はほぼ一反歩とちょっと。米であれば、全収量がぎりぎり五石ぐらい。とすると、完全な免租地ということになる。あるいは、かってはもう少し広い面積であって、五石分が免租になっていたのかもしれない。少し疑問もあるが、このままにしておく。

なお、全国地図には、ゴコクメン地名は一ヵ所もない。

【大畑】

オオハタ。

この小字は、ワデ小字の下流側にある

が、大きな小字ではない。

オオ（大）は、動詞アオグ（仰。扇）の語幹で、「傾斜地」を意味する（語源辞典）。とすると、オオハタとは、「傾斜地にある畑、あるいは傾斜地の末端」を意味する。土石流の災害と関わる地名に思えるが、はっきりはしない。

国土地理院の全国地図には、オオハタ地名は７５ヵ所も、中・大字として挙げられている。

【溝ノ尾】

ミゾノオ。

この小字は、オオハタ小字の下流側にある。

ミゾノオとは、「水路の末端部」となるが、具体的に何を意味しているのかは分からない。

全国地図には、ミゾノオ地名が１件。

「播磨垣外・中垣外・竹鼻・溝瀬・鳶田・石原田」

【播磨垣外】

ハリマガイト。

この小字は、立石緩傾斜地のほぼ中央にある。

ハリマガイトとは、「播磨殿の居住地あるいは居住地跡」をいうか。播磨殿とは、甲賀城に関わる人物であろう。

全国地図に、ハリマガイト地名は載っていない。

【中垣外】

ナカガイト。

この小字は、北側にあり、立石緩傾斜地のほぼ中央に位置する。

ナカ（中）は、政治的・経済的な中心地を意味する。ナカガイト（中垣外）とは、「立石の中心的な役割を果たしている住居あるいは住居跡」か。

国土地理院の二、五万分の一地図には、中・大字として、ナカガイト地名は、１２ヵ所に記載されている。

【竹鼻】

タケノハナ。

この小字は、立石緩傾斜地の中心部にあり、ナカガイト・ハコガイト・サクラモト・ミゾセ・トビタなどの小字に囲まれている。

タケノハナとは、何を意味するのであろうか。辞書類によって、みていきたい。解釈は二通り。

①タケ（竹）はダケで西日本の方言に多い「崩壊地」のこと。従って、タケノハナ（竹鼻）とは、「崩壊堆積地の末端部」を意味する。これも立洞沢川の土石流と関わる小字名と見る。

②タケはタケ（嶽）で、「信仰と関係ある山の称」である。タケノハナ（竹鼻）とは、「立石寺か日枝神社の境内の末端部」とする。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、タケノハナ地名は、２８ヵ所。

【溝瀬】

ミゾセ。

この小字も、立石緩傾斜地の中心部にあって、タケノハナ小字の下流側にある。

ミゾセ（溝瀬）とは何か。

ミゾセ（溝狭）と考えれば、ミゾセとは、「両側を流れている水路の間隔が狭い所」となるが、どうであろうか。この小字の中で、ミゾの流れが急であったり、瀬というほどに幅が広かったりすることは考えられないからである。それにしてもはっきりしない地名である。

国土地理院の二、五万分の一地図には、中・大字として、ミゾセ地名は、１ヵ所挙げられている。

【鳶田】

トビタ。

この小字は、県道親田・中村線に北側

が接しており、タケノハナ小字とウメタ小字の間にある。

トビタとは何か。解釈は二つ。

①トビは動詞トブ（跳）の連用形で「崩壊地」をいう。トビタ（鳶田）とは、「山崩れがあって周辺が土石流で埋まり、田圃になった所」をいう。

②トビはドブ（泥）と関係して、「湿地」のことをいう。トビタとは、「湿地にできた田圃」か。

全国地図の中・大字として、トビタ地名は、四ヵ所にある。

【石原田】

イシハラダ。

この小字は、トビタ小字の下流側にある小さな小字である。

イシハラダ（石原田）とは、「小石の多い、開墾田」か。

全国地図にはイシハラダ地名は４ヵ所。

「柵口・中町田・梅田・下の平・大垣外」

【柵口】

マセクチ。

この小字は、甲賀城の北側にある。

マセ（柵）はマセ（籬）で、「竹や木で作った目の粗いかきね」（国語大辞典）である。マセクチとは、「竹や木で作られた垣根の出入口」を意味する。城門の近くは、こうした垣根で囲われていたものと思われる。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、マセクチ地名は記載が無いが、「柵口」地名は１ヵ所あり、マセグチと呼んでいる。

【中町田】

ナカマチダ。

この小字は、マセクチ小字のすぐ東側にある小さな小字である。

マチダ（町田）とは、国語大辞典によれば、「区画によって区分された田。また、区分された特別の田。神領の田。一説に麻知によって豊凶を占う田」とある。これに依りながら、ナカマチダとは何か、考えていきたい。解釈は二つ。

①ナカマチダ（中町田）とは、「かって、この立石を区分けしたが、そのときの政治的な中心地であった所」か。甲賀城を政治的な中心地と考えたがどうであろうか。

②ナカマチダとは、「貴船神社か日枝神社の神聖な神領田」をいうか。あるいは、この田で麻知による豊凶の占いの神事が行われたかもしれない。

全国地図には、ナカマチダ地名は載っていない。

【梅田】

ウメダ。

県道親田・中村線の南側にある広い面積の小字と甲賀城の近くに小さな小字の２ヵ所がある。

ウメタ（梅田）は、ウメ（埋）・タ（処）を瑞祥地名に転化させたものと思われる。タ（田）は、田んぼとしてもいいが、ここでは場所を示す接尾語としておきたい。

ウメダとは、「加羅沢川の土石流で埋められた所」であろう。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、ウメタ地名は一ヵ所しかないが、「梅田」地名は２３ヵ所になる。ウメダという呼び方が多いためである。

【下の平】

シモノヒラ。

この小字は、マセクチ小字とジョウギワ小字の間にある小さな小字である。

シモノヒラ（下の平）とは何か。二通りの解釈ができる。

①「立石緩傾斜地の下の方の台地」とする。ヒラ（平）は「台地」とした。

②シモノヒラ小字は東西の両端が道路になっており、この道を通して、緩傾斜地

の放射冷却によって作り出された冷気が下りてくることも十分に考えられる。そうなると、シモノヒラ（下の平）とは、「霜害にかかりやすい台地」となる。

全国地図には、シモノヒラ地名は無いが、「下の平」地名は中・大字の中に１ヵ所が記載されている。

【大垣外】

オオガイト。

この小字は、立石緩傾斜地の東部にあり、二つのジョウギワ小字に挟まれている、小さな小字である。

オオ（大）には、「重要な。主要な」という意味があり、オオガイト（大垣外）とは、「立石の有力者が住居か住居跡がある所」となろうか。

国土地理院の二、五万分の一全国地図には、中・大字として、オオガイト地名は１３ヵ所に記録されている。

「城際・唐沢・蟹田・羽脇垣外・赤羽根」

【城際】

ジョウギワ。

この小字は、甲賀城の北に長く伸びる地帯に三ヵ所ある。加羅沢川右岸の微高地である。

ジョウギワ（城際）とは、文字通り、「甲賀城の傍」ということになるが、とてもソバとは言えないほど北に延びている。加羅沢川右岸の、この微高地帯に甲賀城の砦が延びていたのだろうか。

全国地図にはジョウギワ地名は載っていない。

【唐沢】

カラサワ。

この小字は、水晶山系の水を集めて流れる加羅沢川に沿った二ヵ所にある。加羅沢＝唐沢である。

カラ←ガラで、「物のくずれ落ちる音」（国語大辞典）をいう。カラサワ（唐沢）とは、「加羅沢川が荒れて、浸食したり土砂を堆積させたりした所」を意味するものと思われる。

しかし、任那のカラ（伽羅）、朝鮮、中国をさすカラ（唐）が全く関係ないとは言い切れない。もしかしたら渡来人の居住地であったかもしれない。

国土地理院の二、五万分の一地図には、中・大字として５６ヵ所も記載がある。

【蟹田】

カニダ。

この小字は、ハワキガイト小字とカラサワ小字に挟まれた、細長い小字であり、加羅沢川にも接している。

カニダとは、何を意味するのか。

カニ（蟹）←カナ（掻薙）と転化したもので、「掻き薙がれたような土地」をいう（語源辞典）らしい。ダ（処）は場所を表す接尾語。となると、カニダ（蟹田）とは、「崩壊地のある所」となる。

もう一つ、カニ（蟹）←カヒ（峡）の転化も考えられる。これを採れば、カニダとは、「狭い谷になっている所」ということになる。

全国地図にカニダ地名は無いが、「蟹田」地名は６ヵ所にある。カニタとかカンダとか呼んでいる。

【羽脇垣外】

ハワキガイト。

この小字は、県道親田・中村線と加羅沢川の間にある広い小字である。

ハワキガイトとは何を意味するのであろうか。語源辞典などを参考にしながら、考えられる二説を挙げておきたい。

①ハワキガイト（羽脇垣外）は、ハ（端）・ワキ（湧）・ガイトで、「段丘の末端で、湧水のある居住地あるいは居住地跡」とする。

②ハワキガイト←ハバキガイトで、ハバは崩壊地をいい、キは場所を表す接尾語。

以上から、ハバキガイトとは、「崩壊地のある居住地あるいは居住地跡」となるか。この小字の中を加羅沢川が流れている。

全国地図には、ハワキガイト地名は、記載が無い。

【赤羽根】

アカバネ。

この小字は、加羅沢川左岸の傾斜地にある。

アカバネとは、何か。これも語源辞典等を参照にして、二通りの解釈をしておきたい。

①アカ（赤）はアカ（垢）で、湿地のこと。バネ（羽根）←ハネ（撥）で、「切り落とす」の意。合わせると、アカバネとは、「崩壊している部分もある湿地」。

②三河の方言で、アカハネとは、「赤く禿げた山地」をいう。

全国地図にアカバネ地名は２９ヵ所。

「針原・番匠・堀・城垣外・土井場・斧垣外」

【針原】

ハリハラ。

この小字は、伊豆木境にあり、ほぼ真ん中を加羅沢川が流れている。

ハリハラ（針原）とは何か。

ハリハラ（蓁原）といえば、一般的には開墾地というが、ここでは、別の解を考えたい。

ハリはハリ（張）で、「張り出した所」をいう。ハリハラとは、「台地が張り出している所のある開墾地」か。この小字の地形には、張り出しがある。

国土地理院の二、五万分の一地図には、中・大字として、４ヵ所に記載がある。

【番匠】

バンジョウ。

この小字は、甲賀城と加羅沢川との間にある広い小字である。

バンジョウの解釈は二つ。

①バンジョウ（番匠）とは、大工のこと。バンジョウとは、「大工さんの作業場や住居のあった所」ということになる。

②バンジョウ←バンショ（番所）と転化したもの。甲賀城を守るための番所が置かれた所と考える。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、１０ヵ所が挙げられている。

【堀・堀端】

ホリ・ホリバタ。

ホリ小字は、甲賀城の東端にあって、寺沢川が流れており、ホリバタ小字は甲賀城の本丸（城）と西ノ丸（土井場）の間の堀になっている。

ホリ（堀）とは、「甲賀城の堀で、地を細長く掘り、寺沢川をながしている所」。

ホリバタ（堀端）は、「甲賀城の本丸と西ノ丸を隔てる堀のほとり」となる。

国土地理院の二、五万分の一地図には、ホリ地名は３１ヵ所、ホリバタ地名は３ヵ所に記載がある。

【城・城垣外】

ジョウ・ジョウガイト。

これらの小字は、甲賀城内にある。

ジョウ（城）は、ここでは、甲賀城の本丸をいう。ジョウ（城）とは、もともと「防備の塁をめぐらしたところ」（広辞苑）である。

ジョウガイト小字は、寺沢川の堀と本丸との間にあり、ジョウガイト（城垣外）とは、ここでは、「城の垣根とその外側の急傾斜地」をいう。

全国地図には、ジョウガイト地名は無いが、ジョウ地名は４６ヵ所にもある。

【土井場】

ドイバ。

この小字内には、村史によれば、甲賀城の西ノ丸がある。

ドイ（土井）＝ドイ（土居）で、「城の

周囲の土の垣。城壁」（広辞苑）をいう。ドイバ（土井場）とは、「甲賀城の周囲の土の垣」をいう。

全国地図には、中・大字として、ドイバ地名は、１ヵ所にある。

【斧垣外】

オノガイト。

この小字は、甲賀城の西側にある。

オノガイトとは何を意味しているのであろうか。仮説を二つ。

①オノ（斧）は、ヲ（峰）・ノ（助詞）で、「小高い所」をいう（語源辞典）。これに従えば、オノガイトとは、「小高い所にある住居あるいは住居跡」となる。

②オノ（斧）は、斧など鉄製品のことで、オノガイトとは、「斧など鉄製品の製作や修理をする鍛冶屋の住居あるいは住居跡」とすることはできないだろうか。

全国地図にはオノガイト地名は無い。

「田屋・橋場垣外・辻羽場・南辻・下垣外」

【田屋】

タヤ。

タヤ小字は、立石緩傾斜地の最南部にあり、阿知川に面している。周辺の小字には、ハシバガイト、ハリマガイト、オノガイト、ドイバなどがある。

タヤ（田屋）とうのは、一般的には、「山間地などで、遠くにある田畑に出向いて耕作する期間、一時居住するために建てた小屋」（国語大辞典）であるが、ここは、立石の中心地に近く、山間地ではない。では、タヤとは何か。

タヤとは、タヤ（他屋）ではないだろうか。国語大辞典によれば、他屋とは、「婦人が月経または出産の時にこもる小屋」である。タヤ（他屋）は、諏訪や北設楽郡には、方言として残っているという。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、タヤ地名は７４ヵ所にもある。小屋の地名としては多いということになる。

【橋場垣外】

ハシバガイト。

この小字は、立石南部の阿知川に面した、タヤ小字とツジハバ小字の間にある。

ハシバガイト（橋場垣外）とは、いうまでもなく、「阿知川に架かる橋場のあった所にある居住地あるいは居住地跡」ということになる。

この橋は、阿知川右岸にある立石と結ぶ重要な橋であったと思われる。

全国地図には、ハシバガイト地名は記載が無い。

【辻羽場】

ツジハバ。

この小字は、ハシバガイト小字の西隣にある。

ツジ（辻）とは、「道路が十字形に交叉している所」（広辞苑）をいうようであるが、十字形でなくとも、三叉路でも辻と呼んでいる。道が重なる辻は、神聖であると同時に危険に満ちた場所でもある。

ツジハバ（辻羽場）とは、「道が重なる所にある崖」を意味する。

全国地図には、ツジハバ地名の記載は無い。

【南辻】

ミナミツジ。

この小字は、ツジハバ小字に半分ほど囲まれている。

ミナミツジ（南辻）とは、「南の方にある辻」を意味する。辻は、先に書いたように、特別な意味を持っている。昔は、ここでも、厄落としで茶碗が割られたことであろう。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、ミナミツジ地名は、１ヵ所挙げ

られている。
【下垣外】
シモガイト。
この小字は、立石中心部の南西部にあり、北にはシミズ小字、南にはミナミツジ小字、西にはニシマセグチ小字、東にはツジハバ小字があって、囲まれている。
この小字には、小高い丸山がある。
シモガイト（下垣外）とは、何を意味しているのか。解釈は三通り。
①「立石中心部から離れた所にある居住地」をいう。シモには、「中心から離れた部分」の意がある（語源辞典）。
②シモは動詞シモル（滲）の語幹で湿地を示す（語源辞典）。シモガイトとは、「湿地もある居住地」になる。
③「晩霜を受けやすい土地にある居住地」という。
国土地理院の全国地図には、中・大字として、７ヵ所に記載がある。

「清水・西柵口・小淵・蟹原・又田」
【清水】
シミズ。
この小字は、県道親田・中村線の南側にある。西側にはニシマセグチ小字が、北側にはワデ小字がある。
シミズ（清水）は、「飲料に適した湧水のある所」である。
この小字は、現在の県道沿いにあるから、旅人も利用したと思われるが、おもに近くの住民達のための生活水であったのだろう。
国土地理院の全国地図には、中・大字として、シミズ地名は２３６ヵ所に記載されている。
【西柵口】
ニシマセグチ。
県道親田・中村線と阿知川の間にある、細長い小字である。
甲賀城の北側にマセグチ（柵口）があり、「竹や木で作られた垣根の出入口」とした。ここの西柵口は、甲賀城の柵口に対応して、「甲賀城の西の方に備えてある垣根の出入口のある所」と考えるのが自然である。ただ、垣根程度のもので、何を防ぐことができたのか、という疑問は残る。
全国地図には、ニシマセグチ地名は、載っていない。
【小淵】
コブチ。
この小字も阿知川に面しており、その西端を立洞川が流れている。
コブチとは何か。語源辞典によって解釈を二つ挙げる。
①コ（小）は、字音コウ（高）の約で、「高い」の意。フチ（淵）はフチ（縁）で、「川べり」をいう。合わせると、コブチとは、「高い所、崖の上の川べり」を意味する。
②コは、コウ、ゴウの約で「川」のこと。コブチ（小淵）とは、「阿知川の川べり」をいう。阿知川の曲流点で、雨の時など川音が大きくなるのであろう。
国土地理院の二、五万分の一地図には、中・大字として、コブチ地名は１１ヵ所に記載がある。
【蟹原】
カニハラ。
この小字は、立洞沢右岸にあり、第十組合集会所がある。
カニハラとは何を意味するのだろうか。沢蟹が多い所ともとれるが、ここでは、別の解を挙げておきたい。
カニ（蟹）はカナ（掻薙）の転化したもので、「掻き薙がれたような土地」（語源辞典）をいう。カニハラ（蟹原）とは、「崩壊したところもある開墾地」を意味するものと思われる。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、カニハラ地名は２ヵ所だけ記載されている。宛てられている漢字は、「蟹原」である。

【又田】

マタダ。

この小字は、立石緩傾斜地の南西部にあり、阿知川にも近い。コブチ、カニハラ、ヒガシサワバタ、シモニシなどの小字に囲まれている。

マタ（又）は、語源辞典には「二股状に分かれた谷の分岐点」となっているが、この小字にでは逆になっている。この小字は、東側に立洞沢があり、西には東沢？が流れていて、双方の沢は、下流にいくほど狭まっている。逆の二股といってもいい。マタダとは、「二筋の谷が重なる所、あるいは水田」といえる。

全国地図には、マタダ地名は、一件の記載も無い。

「はんの木瀬・滝ヶ沢・本山沢・ドンドン山・吉ヶ沢」

【はんの木瀬】

ハンノキゼ。

この小字は、三穂水力発電所の水路が通っている所にある。

ハンノキ（榛の木）とは、落葉高木で各地の山野の湿った所に生え、樹皮・果実は古くは染料に、材は薪炭・建築・器具用に用いたという。

ハンノキゼとは何を意味するのか。語源辞典によれば、セ（瀬）には、①急流のこと。②セ（背）で、側稜の背をいう。と二つの意味があるという。従って仮説も二つ。

①ハンノキゼとは、「本山沢の急流の近くで榛の木が生えている所」をいう。

②ハンノキゼとは、「榛の木が生えている側稜の尾根」を意味する。

全国地図には、ハンノキゼ地名は、載っていない。

【滝ヶ沢】

タキガサワ。

この小字は、ハンノキゼ小字の下流側とマエヤマ小字の下流側の二ヵ所にある。二ヵ所のタキガワ小字を流れているのが、釜ヶ沢である。

タキガサワ（滝ヶ沢）とは、文字通り、「滝のある谷川が流れている所」を意味するものであろう。

釜ヶ沢という小字が無いのは、この沢に釜ヶ沢と名付けた時期が、タキガサワ小字の発生時期より遅いことを意味する。

国土地理院の全国地図に、中・大字として、タキガサワ地名は、２ヵ所に記されている。

【本山沢】

モトヤマサワ。

この小字は、水晶山系の側稜の一つにあって、西端を本山沢が流れている。

モトヤマサワ（本山沢）とは何か。

モトヤマといえば、中心になる山ということになるが、この小字のある付近が中心的とは言えない。

杣人のことを本山と呼んだらしい。とすれば、モトヤマサワとは、「杣人が多く入っていた谷川が流れている所」となる。杣人たちは、材を求めて山から山へと移っていったが、小字発生当時は、モトヤマサワ小字付近が材木を切り出す中心地になっていたのかもしれない。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、モトヤマサワ地名は１ヵ所に記載がある。

【ドンドン山】

ドンドンヤマ。

マエヤマ、モトヤマサワ、カマガホラなどの小字の上流部にある小字で、水晶山系側稜にある。

近くにトンドヤマ小字があるが、意味する所は同じであろう。

ドンドンという副詞がある。「水が激しく音をたててぶつかったり、流れ落ちたりするさまを表す語」（国語大辞典）である。本山沢の上流部に当たる。ドンドンヤマとは、「本山沢の流れが発する音がドンドンと響く山」ということになる。

全国地図にはドンドンヤマ地名は無い。

【吉ヶ沢】

ヨシガサワ。

この小字は、テラヤマ小字の奥にあり、水晶山系の主稜の尾根に接し、下流部にまで延びる長い小字である。

ヨシガサワ（吉ヶ沢）とは何か。

ヨシは「湿地に多い地名」（語源辞典）であるという。ヨシガサワとは、「湿地のある洞」か。堤の痕跡もある。

全国地図には、中・大字として、ヨシファサワ地名は１２ヵ所に採られている。

「桧木ヶ洞・大平・永本・観音山・前山・荒城」

【桧木ヶ洞】

ヒノキガホラ。

この小字は、水晶山系の主稜に接する。蟻塚のある所でもある。緩傾斜地の大きな洞を含んでいる。

ヒノキガホラとは、「ヒノキが自生している、あるいは植林されたことのある洞」であろう。

全国地図にはヒノキガホラ地名は一つも記載が無いが、これは、伊那谷に多いと思われるホラ（洞）のせいかもしれない。

【大平】

オオヒラ。

この小字は、ヒノキガホラ小字の南側にあり、蟻塚の尾根に接している。

オオヒラ小字も伊那谷南部の各地にあるが、国土地理院の二、五万分の一地図には、中・大字として、オオヒラ地名は１３７ヵ所、「大平」地名は２９４ヵ所にもなる。オオダイラの呼び名が入るためである。

オオヒラ（大平）とは、「大きな面積の傾斜地」を意味する。ヒラには傾斜地いう場合がある。

【永本】

ナガモト。

この小字は、水晶山山系の釜ヶ沢右岸の上流部にあり、林道下瀬西山線が通っている。

ナガ（永）は、動詞ナガル（流）の語幹で、「傾斜地」をいう（語源辞典）。モト（本）は、モト（下）で、「麓」のこと。合わせると、ナガモトとは、「傾斜地の谷川に達する麓の所」を意味する。

全国地図には、ナガモト地名は載っていない。

【観音山】

カンノンヤマ。

この小字は、水晶山山系の側稜中にあり、南北を二つのマエヤマ小字に挟まれている。

カンノンヤマとは、「観世音菩薩が安置されていた所」ということになるが、その痕跡があるのかどうか。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、カンノンヤマ地名は、３１ヵ所が記載されている。

【前山】

マエヤマ。

この小字は、カンノンヤマ小字の周辺に三ヵ所、散在している。

マエヤマは、何かの前にある山である。その何かとは、テラヤマ（寺山）小字は少し離れているので、カンノンヤマ（観音山）しかないと思われる。

マエヤマとは、「観音山の前の方にある山」であろう。

国土地理院の二、五万分の一地図には、中・大字として、６４ヵ所もの記載がある。

【荒城】

アラジョウ。

この小字は、水晶山山系の頂上をもつ側稜にあり、中腹から麓にかけて、三穂水力発電所の水路が通っている。

アラジョウとは何か。これも語源辞典にそって見ていきたい。解釈は二つ。

①アラ（荒）は「水流の激しい川」のこと。アラジョウとは、「水流の激しい谷川のある城」をいう。水流の激しい谷川は本山沢と斧ヶ沢。中世のいわゆる「村の城」と思われる。

②ジョウは「山」をいう。アラジョウとは、「水流の激しい山」ということになる。

全国地図には、中・大字としてアラジョウ地名は、２ヵ所に記載されている。

「牛ヶ寝所・栃ヶ洞・まとう・日陰林・萱垣平」

【牛ヶ寝所】

ウシガネドコ。

この小字は、水晶山山系の山の中腹と谷川が流れている場所にある。釜ヶ沢の中流で、支流が合流する所もあり、現在は林道も通っている。

ウシガネドコは放牧した牛を休ませる所と解することは不可能ではないが、急傾斜地なので、難しいと思われる。

ウシ（牛）は、「河川工事や水防・砂防作業の時に川水や砂をせき止めるために組んだ木の枠」（方言大辞典）とあり、上伊那の方言でもあるという。ウシガネドコとは、「急傾斜地の釜ヶ沢の砂防工事のために組んだ木の枠のある所」としたい。木の枠が並んだところを、牛の寝床と見いなしたのであろう。

全国地図には、ウシガネドコ地名は載っていない。

【栃ヶ洞】

トチガホラ。

この小字は、ウシガネドコ小字の南側にあり、釜ヶ沢のさらに上流になる。

トチガホラ（栃ヶ洞）に対する解釈は二つ。

①素直な解釈で、「栃の木が自生している洞」をいう。以下は広辞苑による。栃は、落葉高木で各地の山地に自生、高さは２５ｍに達するという。種子からあく抜きして澱粉を採り、また栃餅・栃粥などにする。材は板に挽き、また刳り物に用いるという。目をつける価値のある樹木ということだろう。

②トチ（栃）は、トヅ（閉）と関係し「山などが囲んだ所」をいう（語源辞典）。だから、トチガホラとは、「周囲を山に囲まれた洞」ということになる。地形はその通りだが、地名としてのアクセントが弱いか。

国土地理院の二、五万分の一地図には、中・大字として、１ヵ所に記載がある。

【まとう】

マトウ。

この小字は、水晶山系の主稜線の尾根にある。峰が二つあり、その間は峠になっている。

マトウとは何を意味しているのか。これも語源辞典を参考にして考えていきたい。解釈は二通り。

①マトウ←マト←マドカ（円）で、円形の地形をいう。マトウとは、「丸い峰のあるところ」を意味する。円頂部は、この子字内に二つある。

②マトウ←マ（間）・ト（処）で、隙間のある所、すなわち「峠のある所」を意味する。

全国地図にはマトウ地名は、中・大字

として、４ヵ所にある。
【日陰林】
　ヒカゲバヤシ。
　この小字は、水晶山山系の尾根と谷の間にある。
　東に面しているので、日は当たる。ヒカゲバヤシとは､｢日の当たる樹木の生えている所｣であろう。
　全国地図には、中・大字として、１ヵ所、記載されている。
【萱垣平】
　カヤガキヒラ。
　この小字は、水晶山系の中腹にある。
　カヤはカヤス（覆）の語幹で、崩壊地形をいい、カキもカク（欠）の連用形の名詞化で、崩壊地形を意味する（以上は語源辞典)。
　カヤガキヒラとは､｢崩壊地のある傾斜地｣ということになる。
　カヤガキヒラ地名は全国地図には無い。